5. 五號箱裝塡品（計算尺ノ類、測板羅針、測斜儀、三脚分度器等ノ計器類）
6. 六號箱裝塡品（震動式電話機）

三 後車積載品

1 砲隊鏡及測板箱（砲隊鏡、測板、三脚架ノ類、照明具、三交會法用具、曳火破裂交會法用具、射撃修正計算板、絡車及卷尺ノ類、接續線、通信器材ノ補修材料）
2 燈器箱（アセチレン燈及カーバイド）
3 二十糎回光通信器箱（二十糎回光通信器及小乾電池）
4 丁字釘嚢及木工具類（丁字釘、鐵鎚、鎌、鉈）
5 電池箱（小乾電池乙、微光燈用乾電池）
6 觀測梯支柱箱（觀測梯支柱）
7 前箱（中小絡車、中小被覆線）
8 後箱（裝塡品ハ前箱ニ同シ）
9 後方上匣（標柱、方向板、三脚架ノ類、繋馬索、土嚢、携帯天幕）
10 後車屬品（兩頭鎚、繋馬杭、土工具類、繰出線掛、延線桿、觀測梯、脚類、脂油類、雨覆等）

四 九〇式砲兵重觀測車ノ積載品ハ輕觀測車ノモノト大差ナキモ左記ノモノヲ積載スルヲ異ナレリトス

六米觀測鏡、精密時計、電鈴式電話機、潜望式經緯儀、地上標定機、砲隊鏡寫眞機

第四節 九一式十糎榴彈砲各部ノ名稱

一 砲車細部ノ重要名稱附圖第五ノ如ク又閉鎖機各部ノ名稱附圖第六ノ如シ

二 外部裝著器ハ改造野砲ノモノト概ネ類似ス

三 中箱裝塡品（眼鏡、象限儀、氣壓計、空氣接續管、注液唧筒、各種スパナ類、鬲鉄器、轡螺子ノ類、小鎚、小目打、鑢鋸、鑢類、十米卷尺、鋼鐵線、麻、木綿、雜巾ノ類、復坐螺分解器各種副筒、各種受筒、平衡機裝脫螺、閉鎖機豫備品匣「各種ばね、槓桿柱栓、頭桿、撃莖、照準具用氣泡管、注液壺」）

四 豫備品箱收入品 各種スパナ、分解鉗、導管、車軸緊塞桿、緊塞匣「各種緊塞桿坐環」駐退機豫備品匣「各種ばね、各種防塵環」各種緊塞隅板、檢液鑵」

五　彈藥車豫備品車ノ積載品ハ之ヲ略ス

第五節　改造三八式野砲手入及取扱法

其一　一般ノ心得

一　兵器手入ノ要旨ハ其ノ構成材料ノ素質ニ應シ常ニ適切ナル保護ヲ加ヘ其發錆、磨損、變質、變形等ヲ豫防シ以テ兵器ノ保存竝ニ機能ヲシテ完全且確實ナル狀態ヲ維持セシムルニ在リ

二　總テ分解結合ハ閉鎖機ヲ除クノ外將校ノ監視ノ下ニアナサレハ之ヲ行フヲ得ス

三　分解、結合ヲ行フトキハ兵器取扱法ノ規定ニ遵ヒ順序正シク之ヲ行ヒ分解セル部具ニ毀損紛失等ノ虞ナキ樣併列シ置クヲ要ス

四　砲車、彈藥車、豫備品車ノ手入ニ使用スヘキ主要ナル脂油ハ左ノ如シ

1　石油揮發油（洗滌用）（上記ノ脂油ハナルヘク使用セサルヲ可トス）

2　スピンドル油、トロラタム（防錆用）

3　防擦脂（防擦用）（牛脂トスピンドル油ノ複合脂又ハグリースヲ用フ）

4　鯨油、牛脂、「ワセリン」ノ複合脂（革具用）

5　酒精（溶劑）

脂油類ヲ含有セル布片、雜巾等ヲ堆積シ置タトキハ自然發火ノ虞アルヲ以テ此等ハ使用後直ニ容器內ニ入レ蓋ヲナシ置キ隨時洗滌シ乾燥ノ後再用シ又要スレハ直チニ之ヲ燒却スヘシ

五　鋼及鐵部ノ一般ノ保存ハ左ノ如シ

1　鋼及鐵部（鐵部ヲ含ム以下同シ）ノ素地部（塗染ヲ施ササル本來ノ地金面ヲ謂フ）ハ乾布ヲ以テ拭淨シタル後通常當用品ニ對シテハ「ペトロナタム」ヲ塗布スヘシ

2　素地部ノ舊油ヲ除去スルニハ通常乾布ヲ以テ拭淨困難ナルトキハ「スピンドル」油、石油又ハ揮發油ニ浸シタル布片ヲ以テ拭淨シ後乾布ヲ以テ拭フヘシ舊油剝脫ノ爲要スレハ木片又ハ竹篦等ヲ使用スルコトヲ得舊油膠着シ若ハ油燒狀ヲ呈シ之カ除去著シク困難ナルトキハ錆ノ除去法ニ準シ實施スヘシ

3 素地部ノ錆ヲ除去スルニハ石油又ハ揮發油ニ浸シタル刷毛若ハ絨、綿布ヲ以テ摩擦スヘシ

又發錆甚タシキトキハ石油ヲ注キ三十分以上經過ノ後石油ニ浸シタル木賊又ハ絨布等ヲ以テ摩擦シ除錆スヘシ

4 拭淡ノ爲石油等ヲ用ヒタル時ハ其ノ油氣ヲ十分拭ヒ去リ「スピンドル」油ヲ以テ更ニ拭淨ズヘシ

5 素地部ノ發錆若ハ腐蝕ヲ除去スルニハ金剛砂、布鑢、磨粉、土砂類、其ノ他藥品等ヲ使用スヘカラス

但シ兵器ノ種類ニ依リ精密寸法、滑度ヲ要スル部分其ノ他機能又ハ抗力ニ影響ヲ及ホス部分ノ外已ムヲ得サレハ錆斑ノ除去ニ金剛砂、布鑢又ハ磨粉等ヲ使用スルコトヲ得

6 錆染又ハ染烘部ニ塵埃、泥土ノ附着セシトキハ十分之ヲ除去シタル後ニアラサレハ乾布等ヲ以テ拭淨スヘカラス拭淨後常用品ニアリテハ薄ク「スピンドル」油ヲ裕納品ニアリテハ「ペトロラタム」ヲ塗布シ置クヘシ

7 錆染又ハ染烘シタル鋼部ヲ摩擦シテ白色ニシ又ハ着色セサル部ニ光輝ヲ發セシムヘカラス

8 銃、砲架面ニ附著セル被甲鋼等ハ要スレハ之ヲ除去ス其方法ニ就テハ略ス

六 青銅、黄銅、銅等ノ部ハ摩擦部ノ外塗油スルヲ要セス乾布ヲ以テ拭淨スヘシ但シ強摩シテ光輝ヲ發セシムヘカラス又銅類等ニ錆若ハ汚物ノ附着セシモノハ成ルヘク之ヲ除去スヘシ之カ爲乾布若ハ少量ノ石油ヲ含メル布片ヲ以テ拭淨スヘシ

七 金屬部ヲ雨雪等ニ濕潤セシメタルトキハ成ルヘク速ニ之ヲ拭淨シ以テ發錆ノ機會ヲ與ヘサル如ク注意スルヲ要ス

泥土ノ附着セシトキハ適度ニ摩擦スルコトナク且他ヲ汚損セサル如ク拭淨スヘシ又塗料塗施部ニシテ他部ニ害ヲ及ホス虞ナキ場合ニアリテハ要スレハ水洗除去スルヲ得

八 木部ハ塵埃、汚垢ヲ除去シ乾布ヲ以テ拭淨スヘシ　又木部ノ塗漆剝脫セルモノハ該部ニ亞麻仁油ヲ塗布シ其吸收ヲ待チテ乾布ヲ以テ拭淨スヘシ

九 麻製品類ハ常時乾燥シアルヲ要ス之レカ爲時々日乾スヘシ若シ塵埃、汚垢ノ附着

セル時ハ之ヲ除去シ要スレハ日乾ノ後輕打スヘシ
但シ甚シク汚染セル部分ハ水、要スレハ石鹸水ヲ以テ洗滌シタル後十分ニ之ヲ乾燥スヘシ

十 硝子面ノ手入ハ左ノ如ク實施スヘシ

1 手入ハ成ルヘク連清乾燥ノ日ヲ選ヒ砂塵及濕氣ヲ受ケサル清潔ナル場所ニ於テ之ヲ行フヘシ

2 拭淨用材料ニハ清潔柔軟ニシテ乾燥セル毛筆又ハ刷毛及軟綿布（木綿布ノ清洗シタルモノ）ヲ用フヘシ

絹布「フランネル」類、紙、鹿革等ハ硝子面ヲ擦傷腐蝕セシムルヲ以テ之ヲ使用スヘカラス

3 拭淨ニ方リテハ毛筆又ハ刷毛ヲ以テ表面ニ附着ノ塵埃ヲ輕ク拂ヒ落シタル後軟綿布ヲ以テ表面ヲ拭ヒ要スレハ軟綿布ノ一部ニ少量ノ溶劑（酒精「エーテル」）ヲ浸シテ面ニ塗リ其ノ蒸散スルニ先チ該布ノ乾燥セル部分ヲ以テ輕ク拭ヒ數回反復シテ硝子面ヲ清潔ナラシムヘシ

4 硝子面ニ泥土附着セシ場合ニハ毛筆又ハ刷毛ニ少量ノ清水ヲ浸シ叮嚀ニ洗滌シタル後要スレハ溶劑ヲ以テ拭淨シ乾燥軟綿布ヲ以テ拭淨スヘシ

5 前項ノ手入ヲ行フ餘裕ナキ時ハ濕リタル軟綿布ヲ以テ表面ヲ強ク摩擦スルコトナク又使用セル部分ヲ再用セサルコトニ注意シテ泥土ヲ拭ヒ去リ使用ニ差支ヘナキ程度ニ至ラシメ後時機ヲ得ハ直ニ前項ノ手入ヲ行フヘシ

6 硝子面ヲ浸潤セシメタルトキハ軟綿布ニテ拭淨ノ後乾燥セシムヘシ

十一 硝子製品ノ取扱ニ關シテハ左ノ件ニ注意スヘシ

1 硝子面ハ常ニ乾燥シアルヲ要ス又雨露若クハ濕氣ト永ク接觸スル時ハ其ノ表面ニ灰白色ノ曇リ或ハ斑紋ヲ生スルヲ以テ直ニ之ヲ拭淨シタル後前述ノ手入ヲ實施スヘシ

2 硝子面ニハ脂油若ハ「ペラフインン」ノ類ヲ觸レシムヘカラス若シ此等ニ觸ルヽトキハ透明ヲ害シ或ハ面ヲ浸蝕スルコトアルヲ以テ溶劑ニヨリ叮嚀ニ手入スヘシ

3 硝子面ニハ塵埃ヲ附着シ置クヘカラス若シ水ク之ヲ放置スル時ハ硝子面ヲ腐蝕シ遂ニ斑紋若ハ斑點ヲ現ハスニ至ルヲ以テ常ニ清潔ナラシムヘシ

4 硝子面ニハ指頭ヲ觸レサルコトニ注意スヘシ若シ指ヲ觸レ其儘之ヲ放置スルトキハ指ノ痕跡ハ漸次斑紋トナリテ現ハル、ニヨリ溶劑ヲ以テ拭淨スヘシ

5 硝子ハ其ノ質脆弱ナルヲ以テ衝突又ハ墜落スヘカラス又面ハ容易ニ搔傷ヲ受クルヲ以テ拭淨ニ方リ特ニ注意スヘシ

其二 手入法

第一款 普通手入

一 常用品ノ手入ハ一般心得ニ依ル外概ネ左ノ如ク實施スヘシ

1 砲身

イ、砲腔ノ手入ヲ行フニハ通常先ツ閉鎖機ヲ離脫シ手入補助具ヲ確實ニ裝着シ以テ砲口ノ偏磨ヲ防キ且手入具ヲ藥室緣端等ニ擊突セシメサルコトニ注意スヘシ又過度ノ磨拭ニ依リ腔面ヲ磨損セシムヘカラス

ロ、腔面ノ狀態ニ應シ乾布ヲ以テ腔面ヲ拭淨シタル後スピンドル油ヲ塗布シ又ハ腔中油ヲ浸シタル布片ヲ洗桿頭ニ纏ヒ腔面ニ等齊ニ塗布シ數時間乃至十數時間放置シ發生ノ素因タル爐滓等ヲ浮出サシメ布片ヲ以テ之ヲ拭除シ後スピンドル油ヲ塗布スヘシ

2 閉鎖機

イ、通常分解シテ各部ヲ拭淨スヘシ之カ爲塵埃ヲ避ケ毛布等ヲ敷キタル臺上ニ於テ行フヲ要ス

ロ、各部ノ拭淨ニ方リテハ附着セル塵埃ヲ十分ニ除去シ又雨雪天ノ際水濕ヲ蒙リタルトキハ十分ニ拭淨シ水濕ノ影響ヲ受ケサル如ク注意スヘシ

ハ、槓桿ノ摩擦部、扛子ノ頭部等ニハ「パラワセリン」ヲ其ノ他ノ部分ニハ「スピンドル」油ヲ塗布スヘシ

3 搖架

イ、搖架軸ハ要スレハ軸底螺ヲ脫シテ拭淨スヘシ

ロ、搖架準鈑、表尺架、表尺坐筒ノ各嚙合部螺絲部及ばね等ハ分解スルコトナク拭淨スヘシ此際把子若ハ轉輪ヲ有スルモノハ之ヲ旋回シツヽ行フヲ要ス

ハ、表尺坐筒ノ溝ハ布片ヲ被ラセタル木若ハ竹片ヲ使用シテ拭淨スヘシ

ニ、搖架上鈑ノ準梁部及誘導鐶ノ準溝ハ砲身ヲ水平ニシ伸縮螺ヲ離脫シ砲身ヲ後退セシメテ拭淨シ十分ニ「スピンドル」油ヲ塗布スヘシ但シ伸縮螺ハ拭淨ノ上「ペトロラタム」ヲ塗布シ又護謨彈機ニ附着セル油分及汚垢ハ拭淨スルヲ要ス

ホ、後坐變換機傳導軸托板ノ注油孔搖架齒車蓋室ノ注油孔、解脫管、齒輪室ノ注油孔竝ニ搖架軸、防塵鈑ノ注油壺ニハ十分ニスピンドル油ヲ注入スヘシ（注油壺ニ注油スルニハ砲身ニ十分射角ヲ附與シテ行フヲ可トス）

4 小架

イ、小架鈑ノ上面ハ布片ヲ通シ之ヲ交互ニ左右ニ移動シテ拭淨スヘシ

ロ、方向指導匡及同副匡ハ搖架轉把ヲ旋回シツヽ拭淨スヘシ又搖架軸室ノ注油壺ニ注油スヘシ

5 大架

イ、外部ハ土砂、塵埃及塗料ヲ施セル部分ニ附着セル油等ヲ拭淨シ、托坐部ニハ「パラワセリン」ヲ塗布ス

ロ、照準棍駐鉤、駐鋤吊桿、下方防楯吊鉤等ノ鉤部、砲尾托架ニハ「パラワセリン」架尾鐶ニハ防擦脂、照準棍樞軸及駐鋤樞軸ニハ「スピンドル」油ヲ塗布スヘシ

ハ、軸臂殼筒內面、殼帽又ハ軸轄ニ土砂、塵埃ノ附着セルモノ若ハ舊脂油ノ變敗セルモノハ之ヲ除去石油ヲ以テ洗滌シタルトキハ十分ニ其ノ殘油ヲ除去スヘシ）

シタル後全面ニ防擦脂ヲ塗施シ且脂溜ニ防擦脂ヲ補塡スヘシ（塗脂ヲ行フニハ車輪扛上器ヲ用ヒ車軸ヲ支撐シ反對側ノ車輪ニハ支楔ヲ裝シ其轉動ヲ防キ又砲車ニアリテハ駐鋤ヲ下シ前車ニ在リテハ轅桿ヲ固定スル等其ノ轉覆ヲ豫防シテ車輪ヲ離脫スヘシ）

6 駐退機

イ、活塞桿ノ緊塞革及革鐶ニ接觸スル部分ハ毎月一回活塞桿ヲ若干抽キ出シテ拭淨シ要スレハ揮發油ヲ以テ清拭スヘシ但シ强摩シテ該部ヲ磨滅セサルコトニ注

意スルヲ要ス又腐蝕痕アルモノハ「ペトロラタム」ヲ薄ク塗布スヘシ

7 高低照準機及方向照準機

イ、齒車被及蓋鈑ヲ開キ轉把ヲ旋回シツヽ螺絲部及齒車ヲ拭淨シ要スレハ分解ノ上手入スヘシ

ロ、照準螺軸左方室ノ軸受及帶齒車軸ノ注油孔ニ注油スヘシ

ハ、方向照準機ハ搖架轉把ヲ旋回シツヽ、起動螺捍ノ螺絲部ヲ拭淨シ要スレハ分解ノ上手入スヘシ

8 制轉機

イ、短形槓桿及制轉臂ノ樞軸、十字樞軸又ハ結合鐶ノ軸部ニハ「スピンドル」油ヲ塗布シ又十字樞軸ノ軸筒ニハ防擦脂ヲ充塡スヘシ

ロ、右後方曳螺ノ伸縮在ねぢハ其ノ螺子被ヲ後方ニ壓下シ後方轉把ヲ旋回シツヽ螺絲部ヲ拭淨スヘシ

ハ、下方防楯ノ樞鉸部ニハ「スピンドル」油ヲ又吊鉤吻合窓ニハ「パラワセリン」ヲ塗布スヘシ

9 砲車前車、彈藥車、豫備品車

イ、通常外部屬品及箱内裝塡品ヲ取リ出シ粘着セル塵埃、汚垢ヲ除去シ準鈑蹄鐵匣匡及脂油罐匡ノ摩擦面ニハ僅ニ塗油スヘシ特ニ車體ノ下面ニハ泥土ヲ附着シ易キヲ以テ其ノ手入ニ注意スヘシ

ロ、蓋鈑駐桿及蓋鎖鈑等ノ鉤合部ニハ「パラワセリン」ヲ蓋鈑ノ樞鉸部、駐桿托鈑及駐桿ばね室ニハ「スピンドル」油ヲ塗布スヘシ

ハ、制轉機螺捍ハ被ヲ離脫シ螺捍轉把ヲ旋回シツヽ拭淨塗油スヘシ

ニ、轅桿ハ時々縱匡ヨリ離脫シ其挿入部ニ附着セル土砂等ヲ除去スヘシ

ホ、服馬轡ハ要スレハ分解ノ上手入シ摩擦部ニハ防擦脂ヲ螺絲部ニハ「ペトロラタム」ヲ塗施スヘシ

10 表尺、同補助桿、表尺眼鏡、象限儀、信管廻ヘ、鋼鉦及車尾鎖ニハ防擦脂ヲ塗施スヘシ

イ、手入ヲ行フニハ一般ノ心得ニ準據シ埃塵ヲ避ケ毛布等ヲ敷キタル臺上ニ於テスヘシ

ロ、表尺ハ幹及眼鏡室ヲ清拭シ十分ニ塵埃、汚垢ヲ除去シ僅ニ塗油スヘシ而シテ常ニ過度ノ摩擦ヲ避ケ適度ニ塗油シ其ノ磨滅ヲ豫防スヘシ

ハ、表尺補助桿ノ眼鏡室及底鈑モ亦前項ニ準ス

ニ、表尺眼鏡ノ手入ハ一般ノ心得ノ部ニ依ル

ホ、象限儀、信管廻ハ機能部ノ塵埃、汚垢ヲ叮嚀ニ拭淨シ鋼部ニハ塗油スヘシ

11 携帶燈若ハ提燈ハ煤蠟及煤煙ヲ除去シ軟布ヲ以テ反射鏡ヲ拭淨シ要スレハ薄ク塗油シ蛇綟ばねニハ防錆油ヲ塗布スヘシ

12 工具類ノ手入ハ繩、束藁ノ類ヲ以テ頭部及柄ニ附着セル土砂ヲ水洗シタル後乾キタル藁、布片ノ類ヲ以テ其水分ヲ拭ヒ然ル後塗料ノ剝脫セル部分ニハ防錆ノ爲少量ノ「スピンドル」油ヲ塗布スヘシ

13 上被、泥除等ニ附着スル革具ハ日乾前稍多量ニ塗油シ乾燥後更ニ手入ヲ行フヘシ

二

雨雪天若ハ泥濘甚シキトキニ使用シタル砲車、彈藥車、豫備品車ハ一般ノ心得ノ外左ノ件ニ注意スヘシ

1 雨雪ニ露出スル砲身等ノ標要部ニハ使用前稍々多量ニ塗油スヘシ

2 雨雪天等ニ使用シタルモノハ脂油ハ一般ニ稍多量ニ塗施シ各部ノ發錆ヲ豫防スヘシ

3 水洗スル場合ニ於テハ砲身、搖架、砲架、砲架匣、照準機ノ内部及車箱内竝ニ彈藥匣ノ内部等ニ水濕ヲ及ホサルコトニ注意シ洗滌後十分ニ各部ノ水氣ヲ除去スル要ス

三

射撃前ノ手入ハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

1 砲腔、閉鎖機及其室ニハ特ニ塵埃、汚垢ヲ留メサル如ク拭淨シ各部ニ適度ニ塗油スヘシ（藥室ノ塗油過多ナルトキハ藥莢ニ凹ミヲ生スルコトアリ）

2 撃發機ハ分解シテ手入シ各部品及其ノ室ニ油垢等ヲ殘ササル如ク拭淨シ十分ニ塗油スヘシ

3 駐退機、方向及高低照準機ハ要スレハ分解シテ手入ヲ行ヒ機能ヲ圓滑ナラシメ又搖架上面砲身ノ滑走部ヲ清拭シテ十分ニ塗油スヘシ

四

射撃間ノ手入ハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

1 不發火又ハ瓦斯ノ漏洩アルトキハ撃發機能ヲ點檢シ要スレハ撃發機ヲ分解シテ手入スヘシ

2 腔綫起部附近、藥室及抽筒子室ハ時々之ヲ拭淨シ腔中油ヲ塗布シ又射撃中止間、狀況之ヲ許サハ砲腔ニ付キテモ努メテ上述ノ手入ヲ實施スヘシ

3 長時間射撃スルトキハ爲シ得ル限リ各摩擦部ニ塗油シ防塵鈑ノ注油壺ニハ時々注油スヘシ

4 連續セル急射ヲ爲シ砲身過熱スルトキハ要スレハ注水スヘシ

五

射撃後ハ特ニ砲腔閉鎖機ノ手入ヲ速ニ實施スヘシ其方法左ノ如シ

1 射撃後直ニ硼砂溶液ニテ洗滌手入ヲ實施シ得ル場合

イ、閉鎖機ヲ離脫シ打殼藥莢等ヲ用ヒ藥室ヲ閉塞シ木製楔ヲ以テ之ヲ固定シ砲口保護器ヲ裝ス

ロ、洗桿頭等ニ硼砂溶液ヲ浸シ腔中ニ挿入ツテ洗桿頭ヲ進退セシメ屢々洗桿頭ニ液ヲ注キ概ネ三十回往復シテ爐滓ヲ除去ズ、藥室ハ硼砂溶液ヲ浸シタル布片ヲ以テ洗滌ス

ニ、閉鎖機前面、撃莖室、撃莖尖部等ハ硼砂溶液ニテ十分洗滌ス

ホ、洗滌後乾布ヲ以テ各部ニ附著セル液ヲ拭淨シ腔中ヲ檢査シ「スピンドル」油ヲ塗施ス

若シ射撃後直ニ手入ヲ實施シ得サル場合又ハ燒蝕、腐蝕等ノ關係ニ依リ射撃後ノ最初ノ手入ニテ完全ニ爐滓ヲ除去スルコト能ハサルトキハ前段「スピンドル」油ニ代フルニ腔中油ヲ多量ニ塗施シ砲身手入「口項」ニ於テ述ヘタル手入法ヲ實施スルモノトス

2 準備其他ノ關係ニテ硼砂溶液ヲ得ル能ハサルカ又ハ時間ノ關係上之ニ依ル洗滌手入ヲ行フ能ハサル場合

イ、通常閉鎖機ヲ離脫シ且砲口保護器ヲ裝ス

ロ、洗桿頭ニ布片ヲ纏ヒ腔中油ヲ浸シ腔中ヲ拭淨シタル後砲身手入「口項」後段ニ述ヘタル要領ニ依リ手入ヲ行フヘシ

若シ「スピンドル」油ヲ塗施スル前ニ硼砂溶液ヲ得タル時ハ先ツ之ニテ洗滌スルヲ有利トス

ハ、閉鎖機ヲ分解スル餘裕アル時ハ之ヲ分解シ前述ノ要領ニ依リ手入ヲ實施スヘシ

ニ、硼砂及腔中油ヲ有セサル等已ムヲ得サルトキハ「スピンドル」油ヲ用ヒテ洗滌スヘシ

3、砲腔、閉鎖機ノ内部ニ附著セル燼渣、蠟等ハ一回ノ手入ニ於テ完全ニ除去スルコト困難ナル場合多キヲ以テ爾後布片ニ汚物ノ全ク附著セサルニ至ル迄日々手入ヲ履行スヘシ

4　硼砂溶液ニテ洗滌手入ヲ行フニ方リ注意スヘキ件左ノ如シ

イ、溶液ヲ塗料塗施部ニ附著セシメサルタメ砲腔ヲ若干下クルヲ可トス若シ塗施部ニ硼砂溶液ヲ附著シタルトキハ十分ニ水洗又ハ拭淨シ置クヘシ

ロ、硼砂溶液ヲ溶桿頭及洗桿内ヲ通シ注流スル如ク製作セル吸水式洗桿ヲ用フルトキハ洗滌操作容易ナリ

其三　取扱上ノ注意

一　各部ノ損傷變歪ハ固有ノ機能及抗堪力ヲ減殺スルヲ以テ細心其ノ取扱ニ注意シ故障ハ假令微小ナリト雖モ速ニ其ノ原因ヲ精査シ修理スルヲ要ス

二　分解手入ヲ行フニ際シテハ各部品ハ順序正シク排列シ混淆又ハ紛失ヲ避ケ結合ノ際ハ其ノ順序ヲ誤ラサル如クシ特ニ合番號ニ注意スヘシ

三　閉鎖機半開ノ儘ニテ拉繩ヲ引クトキハ撃莖尖端ヲ以テ抽筒子ノ平鈑部ニ打痕ヲ印スルヲ以テ注意スヘシ又拉繩ノ空引ハ屢々引鐵發條折損ノ原因トナルコトアリ

四　表尺回轉盤補助分畫及蝸狀螺桿轉輪ノ解脫子ヲ十分解脫セスシテ操作スルトキハ吻合部ノ磨損、反起ヲ生シ尚攫爪ヲ急激ニ放ツトキハ發條ヲ折損スルコトアリ又高低照準機轉把ノ結合ヲ誤リ注油孔ヲ閉塞セサルコトニ注意スヘシ

五　小架鈑、方向指導匡ヲ手入スルニハ砲身及搖架ヲ離脫シテ行フヘシ方向照準機ノミヲ分解シ木架等ヲ以テ搖架ヲ支撐シ小架ヲ降下シテ行フカ如キ方法ハ小架ヲ屈撓セシムルヲ以テ行フヘカラス

六　砲車制轉機ノ螺子被ヲ脫スルニハ靜ニ之ヲ後方ニ壓下シ右後方曳桿ト伸縮牡螺ト吻合ヲ解キタル後曳桿ノ螺絲部ニ沿ヒ旅回シツヽ行フヘシ濫リニ前方ニ引クトキハ發條ヲ折損又ハ變形セシムルコトアリ

七 瓦斯漏及藥筒不發火ヲ生シ其ノ原因撃發機ノ故障ニ起因スル疑アルトキハ直ニ撃發機ヲ分解シテ之ヲ檢査シ要スレハ部品ヲ交換スヘシ（不發ハ撃莖發條ノ折損、撃莖ノ偏撃又ハ撃莖室ニ蠟劑或ハ塵滓等ヲ蓄積シ若ハ施油ノ過多及粘度大ナル寒地ニ在リテハ脂油凍結スルコト多シ」ナル爲撃莖ノ衝力ヲ殺クニ因ルコト多シ）

八 表尺蓋ノ著脱ニ際シテハ兩手ヲ用ヒテ靜ニ之ヲ行ヒ接眼筒部等ノ保護ニ注意スヘシ

九 彈藥筒ハ彈丸ト藥筒トノ結合不良ナルトキハ裝塡不能トナルヲ以テ其ノ軸ヲ屈折セシメサル如ク取扱ヒ又彈帶ニ打痕反起等ヲ生セシメサル如クスルヲ要ス又常ニ塵埃汚垢ノ附著ヲ豫防スヘシ

第六節　九一式十糎榴彈砲手入及取扱法

改造三八式野砲ノ節ニ於テ述ヘタル要領ニ依リ實施スヘシ

第七節　觀測通信器材ノ手入及取扱法

一 硝子製品ノ手入竝取扱上特ニ注意スヘキ事項左ノ如シ

イ、鏡頭ノ大旋回ヲ行フトキ節度ヲ附シ又ハ急激ナル操作ヲ避ケ解脱子ヲ十分解脱シテ行フヲ要ス此ノ際把子ヲ起伏スルニハ急激ニ操作セサルコト肝要ナリ

ロ、砲隊鏡

眼鏡ヲ托架ニ裝著シ又ハ脱スルニ方リ壓螺ヲ緊定スル際ハ必ス眼鏡ヲ保持シテ行フヘシ　又托架ハ分解スヘカラス

ハ、方向板

五角形反射鏡室ハ必要以外ニ抽脱ヲ行フヘカラス又抽脱スル場合ニハ著脱共ニ除々ニ操作スルコト緊要ナリ

解脱子ヲ使用シタル場合ニハ除々ニ定位置ニ復セシムヘシ

方向板ヲ嚢ヨリ出シ又ハ入ルニハ除々ニ之ヲ行ヒ且突出部ヲ嚢ニ衝突セシムヘカラス

ニ　パノラマ式眼鏡及　準儀

ニ、重測遠機

携行ニ際シ特ニ振動ヲ避ク且他物ニ衝突セシメ又ハ倒落セシムル等ノコトアルヘカラス

急激ナル溫度ノ變化ヲ避クヘシ殊ニ急ニ冷室ニ搬入スルトキハ曇ヲ生スルノ虞アリ

規正螺ヲ過度ニ回轉スル時ハ吻合部ヲ離脫シ毀損セシム取扱上特ニ注意ヲ要ス

二

1. 通信器材ノ手入取扱ニ關シテハ左ノ件ニ注意スヘシ

常時使用スル電話機ノ手入ハ左ノ如ク實施スヘシ

通常分解スルコトナク刷毛筆及乾燥セル布片等ヲ用ヒ脂油類ニハ時計油ヲ用ヒ實施ス

電鈴式電話機中電鈴器ノ接續線及受話器押卸接續螺子及接續管等ハ先ツ刷毛筆等ヲ以テ十分ニ塵埃ヲ拭ヒ次ニ布片ヲ以テ拭淨スヘシ

發電器轉把軸部ノ如キハ概ネ毎月一回時計油ヲ施シ摩損ヲ防クコト必要ナリ

塵埃多キ日又ハ雨雪天等ニ使用シタルトキハ速ニ布片ヲ以テ外部ヲ拭ヒ以テ水分

ノ送受話器內部ニ浸入スルヲ防ク

接續紐ニ雨水ノ浸入シタルトキハ布片又ハ紙ヲ以テ數回水分ヲ吸收セシメ空氣ノ流通良キ場所ニ乾燥スヘシ

震動式電話機中常時使用スルモノハ次ノ如ク手入スヘシ

外部ヲ拭淨スル外特ニ接續器、送受話器(分解スルコトナク)及開閉器ノ塵埃汚垢ヲ綿密ニ手入スヘシ

使用頻繁ナル時期ニ在リテハ時々震動器ノ蓋板ヲ脫シ電池接觸ばね及震動板ノ接點接續螺子ノ接觸部及發條鍵接點ノ拭淨ニ注意スヘシ

其他ノ通信器材ニ付取扱上注意ヲ要スル件左ノ如シ

一 絡車ノ輪板及駐螺ハ常ニ緊定ヲ確實ナラシメ被覆線ヲ絡車胴ト輪板トノ間ニ挾マサルコト

被覆線ノ卷換ハ成ルヘク行ハサルヲ可トス若シ之ヲ行フトキハ絡車胴ノ全部ニ平等ニ纏卷シ且綰結ヲ生モサルコト

被覆線ヲ運搬スルニ方リテハ其ノ捲形ヲ弛解セシメサルコト必要ナリ

第八節　携帯兵器ノ名稱手入及取扱法

携帯兵器ハ最モ大切ニ保存セシムルヲ要ス又裝塡シアル騎銃、拳銃ノ取扱及射撃ニ際シテハ不慮ノ危害ヲ生セサルコトニ注意スヘシ

其一　三八式騎銃

一　各部ノ名稱左ノ如シ（附圖第七第六參照）

銃身、照尺（坐、表尺鈑、遊標、ばね）照星、照星坐、
尾筒、
遊底駐子、蹶子、遂鉤、引鐵、
遊底　圓筒、擊茎、擊茎ばね、擊茎駐肘、抽筒子、覆
彈倉　彈倉ばね、彈倉底鈑、受筒鈑
銃床　床冠、上帶ばね、木被駐坐、下帶ばね、下支鐵、木被、槊杖
鈹錬　上帶、下帶、用心鐵、上支鐵、下支鐵、
屬品　銃口蓋、轉軸捍、洗管、藥室掃除器、負革（簪鐶一、遊鐶革二、鼓釘一共）彈藥盒
油壺、塗油桿、蓋螺大小各一、革環共）

二　手入　（第五節火砲一般ノ心得ニ於テ述ヘタル事項ノ外ハ左ノ如シ）

1.　腔中ノ普通手入ニ於テハ左ノ作ニ注意スヘシ
イ、腔中ニ存スル汚垢又ハ殘渣等ノ除去ニ方リテハ腔面ニ腔中油ヲ塗布シ數時間乃至十數時間放置シ發銹ノ素因タル物質ヲ浮出サシメ布片ヲ以テ其浮出セル物質ヲ拭淨スヘシ
ロ、銃ヲ常ニ同一狀態ニ於テ架又ハ臺上ニ托シ手入ヲナストキハ假令保心筒ヲ使用スルモ腔面ニ偏磨ヲ生スルハ免ルヘカラサルモノトス故ニ手入ニ方リテハ適時銃ヲ回轉シ手入具ヲ以テ銃腔同一部ヲ偏磨セシメサル如クスルヲ要ス

2.　日常ノ手入（使用後ノ手入）
イ、銃腔、藥室ノ拭淨ニ際シテハ槊杖、遊底、彈倉附屬品ヲ脫シ腔中ヲ覗視シテ腔中ニ異物介在セサルヤヲ檢査シタル後銃ヲ略水平ニ臺上又ハ架上ニ托シ保心筒（內孔ノ變形セサルモノヲ使用スヘシ）ヲ裝シタル洗矢ニ布片ヲ纏繞シテ之ヲ腔中ニ挿入スルト共ニ保心筒ヲ尾腔ニ裝シ徐々ニ流矢ヲ進退シテ舊油ヲ拭淨シタル後保心筒ヲ除ク

ロ、藥室ハ藥室掃除棒ニ布片ヲ纏繞シテ藥室ニ挿入シ旋回又ハ進退シテ十分舊油ヲ除去スヘシ

ハ、尾筒及銃口兩方面ヨリ藥室及銃腔ヲ覗視シ舊油ヲ完全ニ除去シタルヤ等ヲ檢査シ若シ舊油ノ除去不充分ナルトキハ更ニ手入ヲ反覆スヘシ

ニ、イ及ロノ要領ニヨリ新シキ「スピンドル」油ヲ腔中及藥室ニ塗布スヘシ

ホ、ハノ要領ニヨリ腔中及藥室ヲ覗視シ塗油完全ナリヤ糸屑等介在セサルヤ檢査スヘシ

ヘ、銃尾ヨリ銃口（銃尾）附近ノ附着物除去困難ナルトキハ（銃口）銃尾ヨリ手入スルコトヲ得但シ手入具ヲ銃口（銃尾）部ニ接觸セサル如ク布片ニテ保持スヘシ

ト、銃身後端、尾筒内部ハ藥室掃除器ニ布片ヲ纏ヒ舊油ヲ除去シタル後塗油スヘシ

チ、遊底ノ各部品ヲ分解シ圓筒及擊莖内部ハ圓筒掃除桿ヲ用ヒテ舊油ヲ除去シ特ニ擊莖尖頭圓筒ノ包底面及噴氣孔並擊莖孔ノ手入ヲ十分行ヒタル後塗油スヘシ

リ、槊杖、彈倉附隨品ノ舊油ヲ除去シタル後塗油ス

ヌ、表尺鈑ノ舊油ヲ除去シタル後稍々多量ニ塗油シ遊標ヲ徐々ニ上下シテ塗油ヲ平等ナラシメタル後表尺鈑ヲ輕ク拭ヒテ過剰油ヲ除去スヘシ

ル、外部ノ鐵部ヲ布片ニテ輕ク拭ヒ舊油ヲ除去シタル後僅ニ塗油シ木部ハ乾キタル布片ヲ以テ拭ヒスピンドル油、手垢等ヲ除去ス

3. 塵埃ノ附著セル時ノ手入ハ左ノ順序方法ニヨル

イ、銃外部ノ塵埃ヲ除去スル爲メ鐵部ヲ磨擦セサル如ク布片ヲ以テ拂フ

ロ、腔中ノ手入ニ當リテハ最初油ヲ濕シタル布片ヲ洗矢ニ纏繞シ之ヲ腔中ニ挿入シテ進退セシムルコトナク徐ニ銃口外ニ抽出シテ腔中ニ塵埃等ノ附著シアラサルヤヲ確認シタル後前條使用後ノ腔入ヲ適用ス

ハ、其他ノ部位ノ手入ハ先ツ塵埃ヲ除去シタル後前條ノ手入ヲ適用ス

注意 塵埃附著シテ除去ヲ忘却シ易キ部位左ノ如シ

床冠、上帶駐梁ノ凹部、照星坐、下帶飾鐶、表尺鈑裏面及標線、遊底覆ノ準溝、擊莖駐卽後端面用心鐵内部、彈倉駐子桿、引鐵孔ノ手入ノ際布片等ヲ深ク入レサル樣注意ヲ要ス）床尾飾鐶各螺子頭、銃口蓋内部

4. 雨雪ニ曹遇セシ時ノ手入

雨雪ハ火薬瓦斯ニ次テ銃特ニ腔中ヲ損傷スルコト大ナルヲ以テ成ルベク速ニ精密ナル手入ヲ實施シテ之ヲ完全ニ除去シタル後前記ノ手入ヲ實施スルヲ要ス

イ、銃腔ノ水ハ水滴ノ介在セサルコトヲ確認スルニ至ル迄手入ヲ反復スルヲ要ズ

夏季等ニアリテハ此際既ニ發錆シアルモノヲ見ルコトアリ此時ハ直ヲニ該部ヲ「スピンドル」油ヲ以テ洗滌スルコトヲ要ス

ロ、其他ノ部位ニアリテハ表尺鈑、遊底駐子、槊杖孔ノ水ハ除去スルコト困難ナルヲ以テ特ニ注意ヲ要ス

5. 使用セサル時ノ手入

使用後ノ手入ニ準シ數日毎ニ所要ニ應シテ實施スルヲ以テ足ル

6. 射撃前ノ手入

イ、實包射撃前ニ於テハ腔中藥室ヲ拭淨シタル後含油布片ヲ以テ薬ニ塗油シタル後異物介在セサルヤヲ精密ニ調査スヘシ

ロ、空包射撃前ニ於テハ腔中藥室ヲ拭淨シタル後「スピンドル」油、「ワセリン」又ハ混合油（「スピンドル」油ト「ペトロラタム」トヲ混合シタルモノ）ヲ稍々多量ニ塗油ス

7. 射撃後ノ手入

イ、射撃後腔中藥室ヲ手入スルニハ日常手入ニ準シ硼砂溶液ヲ以テ洗滌シタル後乾布ヲ以テ拭淨シ保存ノタメ「スピンドル」油ヲ塗施スルモノトス

準備其他ノ關係ニテ硼砂溶液ヲ得ル能ハサルカ、又ハ時間ノ關係上之ニ依ル洗滌手入ヲ行フコト能ハサル場合ニ於テハ布片ヲ洗矢ニ纏ヒ腔中油ニ依リ拭淨シタル後同油ヲ稍々多量ニ腔面ニ塗施シ處キ燼渣ノ浮出スヲ待テ更ニ布片ニテ拭淨シタル後保存ノ爲「スピンドル」油ヲ塗施スルモノトス若「スピンドル」油ヲ塗施スル前ニ硼砂溶液ヲ得タルトキハ先ツ之ニテ洗滌スルヲ有利トス

「スピンドル」油ニ依ル洗滌手入ハ硼砂溶液ニ依ル洗滌手入又ハ腔中油ニ依リ手入ヲナシ得サル場合ニ於テノミ行フモノトス

洗滌手入ヲ行フニハ先ヅ洗滌劑ヲ洗滌壺油壺ニ入レ銃口ヲ該液中ニ浸ス如ク銃ヲ同台ニ托シ旋回洗失（頭部ニ植物繊維製洗頭（繊維ハ「タワシ」ニ用フル椰子ノ

纖維、刷毛ニ用フル「メキシコ、フアイバー」俗稱「パキン」ノ如キ靱性大ナルモノ』又ハ脫脂綿、布片ノ類ヲ附ス但シ「スピンドル」油ヲ用フルトキハ豚毛製洗頭ヲ用フ）ヲ進退シ洗滌劑ニ依リ汚垢鏡渣ヲ除去スルモノトス

洗滌劑ハ通常下洗用、中洗用及仕上洗用等ノ二段又ハ三段ニ區分使用シ洗滌ノ效果ヲ大ナラシムルヲ可トス

ロ、射擊後ノ手入ヲ行フ餘裕ナキ場合ノ手入法

射擊後ハ發錆ノ防止、附著鏡渣ノ除去ヲ容易ナラシムル爲直ニ腔中藥室ノ手入ヲ行フヘシ若シ速ニ手入ヲ行フノ餘裕ナキトキハ稍々多量ニ腔中油ヲ塗布シ鏡渣ヲ浮出サシメ一時同部ノ發錆ヲ防遏スルト同時ニ爾後ニ於ケル手入ヲ容易ナラシムルヲ要ス

ハ、爾後ノ手入

腔中藥室ニ附著セル鏡渣ハ一回ノ手入ニ於テ完全ニ除去スルコト困難ナルヲ以テ爾後布片ニ汚物ノ全ク附著セサルニ至ル迄日々之ヲ復行シ鏡渣完全ニ除去セラレタル後日常ノ手入ニ移スモノトス

三　分解結合

普通分解ニ於テ分解スヘキ部品次ノ如シ

遊底、彈倉附隨品（受筒板、彈倉ばね、彈倉底板）槊杖、負革

1. 遊底ノ分解及結合

離脫ハ次ノ各號ノ順序方法ニ依ル

イ、銃ヲ臺上ニ置キ銃身ヲ上ニ銃口ヲ前ニシ成ルヘク床尾ヲ體ニ托シ左手ニテ銃把ヲ下ヨリ握リ其拇指ヲ銃ノ左側ニ位置セシメ右手ニテ槓桿ヲ起シテ遊底ヲ遊底駐子ニ鉤スルマテ後退セシメ右手ヲ放ツ

ロ、左手ニテ遊底駐子ヲ充分外方ニ開キ右手ニテ遊底覆ノ上ヨリ拇指ヲ槓桿ノ左方ニ他ノ四指ヲ右方ニシ遊底ノ後部ヲ握リ抽出ノ際擊莖駐肭ノ筍ニテ床鼻ヲ損セサル爲指頭ヲ淺ク其下部ニ位置セシメタル後徐ニ後方ニ抽出ス

2. 分解ハ次ノ各號ノ順序方法ニ依ル但シ、ハ號ハ、イ號ニ先チ之ヲ行フコトヲ得

イ、圓筒頭部ヲ下方ニシテ左手ニ遊底ノ中央部ヲ握リ右手ノ掌ヲ擊莖駐肭ノ後面ニ當テ、之ヲ握リ壓迫シテ充分右方ニ旋回シタル後徐々ニ壓迫ヲ緩メ擊莖駐肭

チ離脱ス但シ此際圓筒後部ヲ低下スルトキハ擊莖墜落スルコトアルヲ以テ注意スヘシ

ロ、擊莖ヲ圓筒ヨリ擊莖ばねヲ擊莖ヨリ離脱ス

ハ、圓筒頭部ヲ前方ニ槓桿ヲ右方ニシ左手ヲ以テ圓筒後部ヲ握リ其拇指ヲ槓桿ニ掛ケ右手ヲ以テ下ヨリ抽筒子ノ中央部ヲ圓筒ト共ニ强ク握リ四指ノ附根ヲ抽筒子ノ左側ニ當テ圓筒ヲ左方ニ充分旋回シテ抽筒子ノ鉤部（爪ノ直後）ヲ圓筒ノ溝ヨリ脫シ抽筒子ヲ上方ニシテ左手ニテ圓筒後部ヲ握リ右手ニテ圓筒ノ中央部ヲ下ヨリ握リ其兩拇指ニテ抽筒子ノ後緣及背ノ段部ヲ前方ニ押シテ抽筒子ヲ離脫スヘシ

3. 結合ハ次ノ順序方法ニ依ル但シ、イ號ハ、ハ號ノ後ニ於テ行フコトヲ得

イ、抽筒子駐鎹ノ後部ヲ圓筒ノ瓦斯漏孔ノ直後ニ位置セシメ圓筒頭部ヲ上方ニ槓桿ヲ左方ニシ左手ノ指ヲ以テ圓筒ト共ニ駐鎹ヲ撮ミ右手ニテ抽筒子ノ裏面溝ノ廣キ部分ニ駐鎹ノ鉤部ヲ裝シ左手ニテ圓筒ト共ニ抽筒子ノばね部ヲ握リ右手ノ拇指頭ヲ以テ抽筒子ノ頭部ヲ外方ニ開キ之ヲ壓下シテ抽筒子ヲ駐鎹ニ裝著シタル後右手ニテ圓筒後部ヲ握リ之ヲ右ニ旋回シテ駐退桿上ニ位置セシムヘシ

ロ、擊莖內ニばねヲ裝シ擊莖ヲ圓筒ニ袋入シ其擊發段ヲ圓筒ノ刳割半圓部（淺キ箇所）ニ位置セシムヘシ

ハ、圓筒頭部ヲ下方ニ槓桿ヲ右方ニシ左手ニテ圓筒ノ中央部ヲ握リ右手ヲ擊莖駐肘ノ後面ニ當テ、之ヲ握リ其軸ノ凸筍ヲ圓筒後部刳割蝸狀底（深キ箇所）ニ向ハシメ充分壓迫挿入シ（挿入シ能ハサルトキハ少シク左右ニ動カシ挿入スヘシ）左ヘ充分旋回シタル後擊莖駐肘ノ壓迫ヲ緩ム　但シ結合ノ際擊莖駐肘ノ施回及壓迫不充分ナル爲擊莖ノ擊發段ヲ圓筒刳割蝸狀底ニ落下シ擊莖駐肘ノ耳筍槓桿ト反對側或ハ直角（騎銃ニ在リテハ百三十五度或ハ四十五度）ニ位置スルニ至リテハ百三十五度ニ位置スルモノハ正式ノ結合ニ複セシムヘシルトキハ次ノ名號ノ一ニ依リ正式ノ結合ニ複セシムヘシ

ニ、擊莖駐肘ノ耳筍ト反對側（騎銃ニ在リテハ百三十五度）ニ位置スルモノハ左手ヲ以テ圓筒ノ中央部ヲ右手ニテ擊莖莖駐肘ヲ握リテ之ヲ壓シ擊莖ノ擊發段ヲ刳割蝸狀部ノ斜面ニ沿ヒ後退スル如ク擊莖駐肘ヲ右ニ旋回シ此旋回ニ依リ擊發段ヲ刳割半圓部ニ移シ得ルモノハ以下ノ操作ヲ要セス其旋回停止シタルトキハ

更ニ撃茎駐肘ヲ少シク急ニ壓迫スヘシ然ルトキハ撃發段ハ再ヒ刳割蝸狀ニ落下シ撃茎、撃茎駐肘、撃茎ばねハ結合セラレテ一體トナリ其連動自由トナリテ以テ撃發段ヲ刳半圓部ニ移シ撃茎駐肘ヲ少シク左ニ旋回スヘシ

ホ、撃茎駐肘ノ耳筍槓桿ト直角（騎銃ニ在リテハ四十五度）ニ位置スル場合ノ方法ヲ準用シ撃茎駐肘ヲ右ニ旋回シ（若シ旋回困難ナルトキハ左手ノ拇指ニテ撃茎撃發段ノ旋回ヲ扶クルモノトス）其儘撃發段ヲ刳割半圓部ニ移シ結合ヲ行フヘシ

4.

裝著ハ次ノ名號ノ順序方法ニ依ル

イ、遊底ヲ離脱スルトキト同樣ニ銃ヲ位置セシメ抽筒子ヲ正シク右側駐退桿上ニ位置セシムヘシ

ロ、遊底覆ヲ圓筒ニ裝シ槓桿室左方形部ニ位置セシムヘシ

ハ、右手ヲ以テ遊底覆ノ上ヨリ遊底後部ヲ握リ拇指ト食指トニテ遊底覆ヲ圓筒ト平行ニ支持スヘシ

ニ、左手ヲ下ヨリ圓筒ニ添ヘ圓筒頭部ヲ少シク尾筒ニ裝入シ且遊底覆前端ノ左爪

ヲ其拇指ノ扶ヲ以テ尾筒後端ノ左準溝ニ約二、三粍吻合セシメ右手ニテ遊底覆ヲ少シク右ニ旋回シテ其右爪ヲ尾筒ノ準溝ニ吻合セシムヘシ

ホ、遊底覆ノ兩爪カ尾筒ノ準溝ニ吻合シ（其吻合シアルモノハ遊底覆ノ內面ト尾筒上面トハ略相接スルモノトス）アルコトヲ確認シタル後徐ニ遊底ヲ挿入ス此際左手ニテ遊底駐子ヲ外方ニ開クヲ可トス但シ爪ノ吻合不充分ナルトキハ遊底ヲ挿入スルニ當リ尾筒部ノ右側銃床ヲ損スルコトアルヲ以テ注意スヘシ

ヘ、右手ニ槓桿ヲ握リ左手ニテ少シク受筒鈑ヲ壓下シタル後遊底ヲ徐ニ挿入シ槓桿ヲ右方ニ倒スヘシ

ト、引鐵ヲ引キテ撃茎ヲ前進セシムヘシ

チ、彈倉附隨品ノ分解及結合

1. 離脱スルニハ銃身ヲ上ニシテ銃ヲ臺上ニ置キ左手ヲ彈倉底鈑ノ下ニ添ヘ右手ノ拇指ヲ以テ彈倉駐子桿ヲ壓スヘシ

2. 分解スルニハ彈倉底鈑ニ接スル屈曲部ヲ少シク扛起シばねヲ徐々ニ抽出シ同一要領ニ依りばねヲ受筒鈑ヨリ抽脫スヘシ

3. 結合スルニハ彈倉ばねノ段部ヲ有スル端ヲ受筒鈑ニ裝著シ他端ヲ彈倉底鈑ニ裝著スヘシ

4. 裝著スルニハ銃ノ左側ヲ臺上ニ托シ右手ニテ彈倉底鈑ヲ撮ミ受筒鈑ヲ彈倉內ニ入レ彈倉底鈑前端ノ爪部ヲ用心鐵ノ溝ニ吻合セシメタル後彈倉底鈑ノ後部ヲ壓迫シテ彈倉駐子ニ鉤セシムヘシ

第四　取扱上ノ注意

1. 遊底離脫ノ際ハ擊莖駐卽筍ニテ上帶ノ下際部ヲ握リ其指ヲ以テ上帶ばねノ上部ヲ强ク壓シ右手ニテ上帶ヲ垂直ニ抽出スヘシ

2. 裝著スルニ左手ニテ上帶ばねヲ壓迫シ右手ニテ槊杖ヲ徐ニ裝入シばねノ壓迫ヲ緩メ槊杖ヲ僅ニ上方ニ引キばねニ鉤スヘシ

但シ裝入ノ際槊杖ヲ銃床ノ槊杖室底ニ擊突セシメサル如ク注意スヘシ

第五　負革ノ離脫及裝著

1. 離脫ハ次ノ各號ノ順序方法ニ依ル

イ、銃身ノ左側ヲ上方ニシ銃ヲ臺上ニ置キ遊鐶革ヲ床尾鐓鐶ノ方向ニ移シ簪部ヲ負革ヨリ抽出スヘシ

ロ、遊鐶革及簪鐶ヲ負革ヨリ離脫スヘシ

ハ、鼓釦ハ頭部ヲ負革ヨリ抽出シ鼓釦ヲ負革ヨリ離脫スヘシ

2. 裝著ハ次ノ順序方法ニ依ル

イ、負革ヲ離脫シタルトキト同樣ニ銃ヲ置キ負革ノ表面ヲ上ニシ其一端ヲ鼓釦ニテ負革ニ裝着スヘシ

ロ、簪鐶ノ簪部ヲ負革ノ裏面ト同側ニシテ之ヲ負革ニ挿入スヘシ

ハ、遊環革ノ縫著セル側ヲ負革ノ裏面ト同側ニシテ之ヲ負革ニ挿入スヘシ

ニ、負革ヲ床尾鐓鐶及遊環革ニ通シ其端ヲ床尾ノ方向ニ向ケ簪鐶ニ挿入スヘシ

ホ、簪鐶ノ簪部ヲ負革ノ孔ニ通シ遊環革ヲ簪鐶ニ近ツケ結合ヲ確實ニスヘシ

第四　取扱上ノ注意

1. 遊底離脫ノ際ハ擊莖駐卽筍ニテ床尾ヲ損スヘカラス

2. 槊杖裝入ニ際シ銃床ノ槊杖室底ヲ擊突セシムヘカラス

3. 銃口、照星、照尺及遊底ヲ地ニ觸レシメ又銃ヲ依托スル際照星ヲ直接物體ニ接觸セシムヘカラス

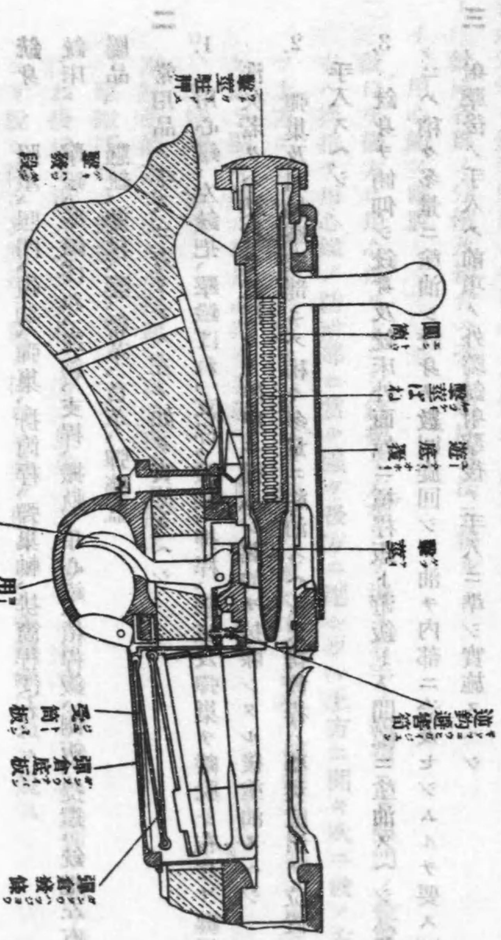
4. 銃ヲ使用セサルトキハ撃莖ばねヲ撃發ノ位置ニ置キ銃口ニハ銃口蓋ヲ裝シ木、紙、布片等ニテ假栓スヘカラス

5. 銃身ト銃床トノ接際ニ大ナル遊隙ヲ存スルモノニハ硬脂ヲ附著シ置クヘシ

6. 彈藥ハ先ツ彈倉内ニ裝塡シ遊底ニヨリ藥室ニ裝入スヘシ彈藥ヲ最初ヨリ藥室ニ裝入シ遊底ヲ閉鎖スルトキハ抽筒子ノ保存ヲ害スルモノトス（但シ狹搾射撃實包ハ最初ヨリ藥室ニ挿入ス）

7. 空撃及擬製彈ノ射撃ハ必要以外ニ行フヘカラス

8. 槊杖ニテ又銃スル時ハ深ク交叉シ四人以上又銃スヘカラス



一　各部ノ名稱左ノ如シ

銃身　照星、照門、鎖鉤、彈巢、排筒桿、彈巢軸、排筒桿ばね

銃床　撃鐵、撃鐵ばね、逆鉤、支桿、搬軌、用心鐵、槓桿鈑、側鈑、提鎖、銃把左右

屬品　懸紐、槊杖、嚢、帶革、負革、彈藥盒

二　常用品ノ手入ニ方リテハ左ノ如ク實施スヘシ

1. 用心鐵、左銃把、撃鐵ばね、支桿、搬軸、押桿、撃鐵及彈巢ヲ離脫シ布片ヲ纏繞セル洗矢若クハ槊杖ヲ銃尾ヨリ腔中ニ挿入シ舊油ヲ拭除シタル後塗油スヘシ

2. 彈巢及同軸摩擦部ニハ稍々多量ニ塗油スヘシ又排筒桿ハ藥莢蹴出ノ位置トシテ手入スヘシ

3. 銃身ヲ俯仰シ銃身及銃床外面竝ニ槓桿鈑ト遊鈑トノ間隙ニ塗油スヘシ（但後者ニハ稍々多量ニ塗油シ銃身ヲ數回旋回シテ油ヲ内部ニ洽及セシムルヲ要ス）

三　射撃後ノ手入ハ前項ノ外騎銃射撃後ノ手入ニ準シ實施スヘシ

四　普通分解及結合

普通分解ハ銃床内部ノ各部品ノ分解竝ニ彈巢ヲ離脫スルヲ謂フ

1. 銃床各部ノ分解及結合ハ次ノ順序方法ニ依ル

イ、用心鐵ノ離脫

銃口ヲ後方ニ用心鐵ヲ上ニシ銃把ヲ左手ニテ握リ右手ノ四指ニテ照門ノ位置ヲ支ヘ拇指ヲ用心鐵ノ防滑部ニ當テ強々後方ニ壓シツヽ上方ニ開キ次ニ銃ノ左側ヲ上方ニシ之ヲ臺上ニ置キ左手ニテ銃身ヲ支ヘ右手拇指ヲ側鈑ノ先端ノ溝ニ懸ケ之ヲ開キ然ル後用心鐵ヲ其軸ヨリ脫ス

ロ、左銃把ノ離脫

左銃把前方ヲ少シク扛起シ之ヲ前方ニ脫ス

ハ、撃鐵ばねノ離脫

ばね後端ヲ撮ミ之ヲ支桿ノ方ニ壓迫シツヽ少シク扛起シテばね下面ノ筍ヲ銃床ヨリ脫シ徐ニ其壓迫ヲ緩メばねノ全ク開キタル後撃鐵ばねヲ脫ス

ニ、支桿ノ離脫

支桿ノ中央ヲ撮ミ其後端ヲ支桿駐壔ヨリ脫シ其前端ヲ押桿ノ溝ヨリ脫ス

ホ、撇軌及押桿ノ離脱

押桿ヲ旋回シテ其頭部ヲ銃床ノ溝ヨリ脱シ撇軌ヲ軸ヨリ脱ス

ヘ、撃鐵ノ離脱

撃鐵ヲ右ニ旋回シ其撃針ヲ銃床ノ室ヨリ脱シタル後軸ヨリ脱ス

結合ハ分解ノ反對順序方法ニヨル

但撃鐵及撇軌ハ順序反對ナルモ支障ナシ分解ノ際モ亦同シ

2. 彈倉ノ離脱及裝著

右手ニ銃把ヲ握リ左手ニテ鎖鉤兩端ヲ撮ミ之ヲ扛起シ銃身ヲ握リ其食指ト拇指トニテ鎖鉤兩端ヲ撮ミ之ヲ外方ニ開キ鎖鉤下端ノ突起部ヲ彈巢ヨリ外シ右手ニテ彈巢ヲ戻回シテ其軸ヨリ離脱ス此際銃把部ヲ體ニ托スルヲ便トス

裝著ハ之レニ反ス

其三　三十年式銃劍

一　各部ノ名稱左ノ如シ

劍身　柄頭、駐梁溝、柄木一組、鍔、駐筍(頭ばね)、柄木小ねぢ二、柄木駐坐二、柄木

鞘　鐺、上部彈鎖子(鯉口共)　下部彈鎖子鉤鎖(小ねぢ共)

屬品　帶革(簪鎖、遊環革)　劍差(野砲兵用)

二　手入法左ノ如シ

普通手入ヲ分チテ毎日行フ手入、一週間ニ少クモ一回行フ手入及使用後行フ手入トス

イ、毎日行フ手入左ノ如シ

銃劍ハ其外部ヲ布片ニテ輕ク拭ヒタル後僅ニ含油セル布片ヲ以テ塗油スヘシ

革具ハ刷毛(軟毛ノ)又ハ布片ニテ塵埃ヲ拭淨スヘシ

ロ、一週間ニ少クモ一回行フ手入左ノ如シ

劍身ハ舊油ヲ拭淨シタル後塗油スヘシ

駐梁溝ハ布片ヲ纏ヒタル竹又ハ木片ヲ以テ舊油ヲ拭淨シタル後塗油スヘシ

駐筍ニハ數滴ノスピンドル油ヲ駐梁溝ヨリ注入シ駐筍頭ヲ數回壓迫シテ油ヲ内部ニ普及セシメ其餘瀝ヲ拭淨スヘシ

革具ハ塵埃ヲ拭淨シタル後僅ニ含油セル布片ヲ以テ數回拭磨スヘシ

ハ、使用後ニ行フ手入ハ(イ)ヲ準用スルノ外左ノ如シ

銃劍ハ塵埃ヲ蒙リ或ハ雨雪等ニ際會シタルトキハ(ロ)ニ準シ手入ヲ行フヘシ

汚垢又ハ泥土ノ附著シタル革具ハ僅ニ含水セル布片ニテ拭淨シタル後含油布片ヲ以テ稍々多量ニ塗油スヘシ

革具ノ浸潤シタルモノハ乾キタル布片ニテ拭ヒタル後空氣ノ流通良キ場所ニ於テ蔭乾シ乾キ終ル以前ニ於テ稍々多量ニ塗油シ其吸收スルヲ待チ輕ク拭摩スヘシ決シテ日光ノ直射又ハ火氣ニテ乾燥スヘカラズ

革具ヲ夏期炎天ノ際連日使用シタルトキハ稍々多量ニ塗油スヘシ

其四 喇叭

一 各部ノ名稱左ノ如シ

二體 前身、中身、後身、第一第二接續管、前鐶(坐共)、後鐶(坐共)、小鐶 坐共、開閉口(帶金共)、鐶(自在鐶甲乙共)

帶(開閉螺、牝螺共)、伸縮管、口(帶金共)、

屬品 飾紐(總二共)握卷

二 手入

イ、毎日左ノ手入ヲ行フモノトス

伸縮管及其他ノモノヲ離脫スルコトナク外部及漏斗狀ノ內部ヲ清濕ナル布片ヲ以テ拭淨スヘシ

ロ、一ケ月ニ少クモ二回ハ、口、伸縮管及開閉螺ノ鐵部ハ僅ニ含油セル布片ニテ拭淨スヘシ

口ノ外部、伸縮管外部及伸縮管ノ室ハ清潔ナル布片ヲ以テ拭淨スヘシ

口ノ內部ハ柔軟ナル紙片ヲ通シテ輕ク拭淨スヘシ

ハ、使用後ノ手入外部及漏斗狀ノ內部ヲ清潔ナル布片ヲ以テ拭フノ外左ノ手入ヲ行フモノトス

イ 口ヲ離脫シテ唾液ヲ除去スヘシ

ロ 黃銅部ニ汗等附著シテ甚シク汚レタルトキハ含水布片ニテ拭淨シタル後乾キタル布片ヲ以テ十分拭フヘシ

ハ 雨雪等ニ際會シテ浸潤シタルトキハ乾キタル布片ヲ以テ十分水分ヲ除去シタル後鐵部ハ含油布片ニテ拭フヘシ

ニ、黄銅部ニ發錆若クハ甚シク汚點ヲ生シタルトキハ眞鍮磨ノ類ヲ用ヒ徐々ニ拭除スルコトヲ得又内部ニ甚シク汚垢附著セシトキハ口及伸縮管ヲ脫シ水或ハ温湯ヲ通シ十分洗滌シタル後水氣ヲ除去スヘシ

三　取扱上ノ注意

イ、喇叭ハ軟質ノ金屬ヨリ成ルヲ以テ叮嚀ニ取扱ヒ打痕變形等ヲ生セシメサル樣特ニ注意スヘシ

又手入不十分ナルトキハ各部ノ機能ヲ害シ微細ナル損傷ト雖モ甚シク音色ヲ損スルコトアルヲ以テ注意スヘシ

ロ、黄銅部ハ唾液ノ飛沫水分等ノ爲汚點ノ生セサル如ク手入ヲ充分行フヲ要ス開閉螺ノ緊定ハ伸縮管ヲ保持スルヲ及トスヘシ否ラスシテ强キニ失スルトキハ螺子ヲ損傷スルモノトス

口及伸縮管内ニ唾液停滯スルトキハ惡臭ヲ放チ音調ヲ妨クルヲ以テ注意スヘシ

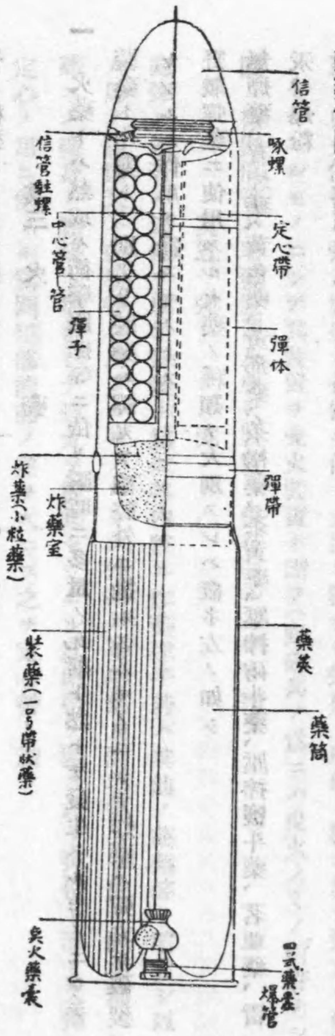
第九節　彈藥

（彈藥トハ火藥火具彈丸等ノ總稱ナリ）

其一　彈藥筒ノ構造

彈藥筒ハ藥筒ト彈丸及信管トニ大別セラル其構造要領左ノ要圖ノ如シ

彈藥筒圖面



其二　彈藥筒ノ作用（射擊ノ部參照）

一、彈藥筒ヲ火砲ニ裝塡シテ拉繩ヲ引ケハ擊針ハ爆管ヲ衝キ雷管ヨリ火ヲ發シ點火藥包ニ移リ裝藥ハ爆發シテ瓦斯トナル其壓力ニ依ツテ彈丸ハ藥筒ト分離シテ拋射セラレ所望ノ地點ニ落達シ信管ノ作用ニヨリ彈丸ヲ破裂セシメ人馬材料等ニ對シ

破壞的威力ヲ發揮スルモノトス

又信管ノ曳火裝置ヲ用フル時ハ彈丸ハ空中飛行中某點ニ於テ破裂スルコトアリ彈丸ノ威力ハ彈丸ノ種類ニヨリテ異リ彈丸ヲ如何ナル狀態ニ於テ破裂セシムヘキヤハ信管ノ種類ニヨリテ異ルモノトス

其三　火　藥

一　火藥トハ熱或ハ衝擊摩擦等ニ依リ瞬時ニ多量ノ瓦斯ト熱トヲ發生スルモノニシテ裝藥ト炸藥トノ別アリ裝藥ハ彈丸ヲ砲腔外ニ拋射スルモノニシテ炸藥ハ彈丸ヲ破裂セシムル作用ヲ爲スモノトス

野戰彈藥ニ使用スル火藥ノ種類ヲ大別スレハ概ネ左ノ如シ

無煙藥、有煙藥、黃色藥、黃那藥、茶褐藥、茶黃藥、壓搾硝斗藥、壓搾鹽斗藥、茗亞藥、雷汞、爆粉

其四　火　具

一　炸藥ノ點火ニ用フル信管ハ著發信管、曳火信管及複働信管ノ三種トス

二　著發信管ハ彈丸著達ノ際發火スルモノニシテ其裝置ヲ著發裝置ト謂ヒ彈丸ノ著達瞬時ニ發火スルモノヲ瞬時信管ト謂ヒ著達後第二彈道ニテ炸藥ニ點火スルモノヲ短延期信管ト謂フ

三　曳火信管ハ彈丸發射ノ初働ニ依リ火道ニ點火シ彈道上所望ノ點ニ於テ彈丸ヲ破裂セシムルモノニシテ其裝置ヲ曳火裝置ト謂フ（野砲兵ノ爲ニハ曳火ノミノ信管ナシ）

四　複働信管ハ著發裝置及曳火裝置ヲ併有スルモノヲ謂フ

其五　彈　丸

砲彈ハ鋼若ハ鑄鐵ヲ以テ彈體ト爲シ其內腔ニ炸藥彈子若ハ其他ノ藥劑等ヲ塡實シ以テ人馬ノ殺傷又ハ破壞等ニ用フルモノニシテ外部ハ蛋形部及圓壔部ヨリ成リ圓壔部ノ後部ニハ砲身ノ腔綫ト吻合シテ彈丸ヲ旋動セシムル爲銅帶ヲ裝ス之ヲ彈帶ト謂ヒ又彈丸定心ノ用ニ供スル爲圓壔部前部ノ徑ヲ大ニシ之ヲ定心帶ト謂フ

彈帶ト彈底トノ中間ニ通常藥莢ノ口部ヲ搾定スル爲全周ニ亘リ溝ヲ設ケ彈丸ト藥筒トノ結合ヲ確實ナラシム

二　三八式野砲榴彈

イ、鋼製ニシテ頭部ニ啄螺ヲ螺定シ之ニ傳火藥筒室ヲ裝ス傳火藥筒室ニハ傳火藥筒

ヲ塡實シ其上部ニハ更ニ雷汞壺ヲ螺著ス炸藥室ニハ被包式ノ黃色炸藥茶褐藥若ハ
硝斗炸藥ヲ塡實ス

ロ、黃色藥ヲ炸藥トシ三年式複働信管ヲ裝著スル彈丸ニ在リテハ信管接續筒ヲ介シ
テ八八式瞬發信管又ハ八八式短延期信管ヲ裝著スルコトアリ

ハ、此彈丸ハ殺傷及破壞ニ用フ

三 三八式野砲十年式榴彈

イ、鋼製ニシテ頭部ニ小ナル啄螺ヲ螺定シ之ニ傳火藥ヲ裝シ其上部ニ蓋板ヲ鋲ス

ロ、炸藥室ニハ茶褐藥ヲ直接壓塡ス（茶褐藥ヲ硝斗藥ヲ直接壓塡スルモ可ナリ）

ハ、啄螺ト彈體トノ間ニハ鉛鑞ヲ裝入シ彈頭ニハ八八式瞬發信管又ハ八八式短延期
信管ヲ裝著ス

ニ、此彈丸ハ破壞殺傷ニ用ヒ多量ノ炸藥ヲ有スルヲ以テ其破片効力特ニ大ナリ

四 三八式野砲十年式鋼性銑榴彈

イ、彈體ハ鋼性鑄鐵製ナルノ外概ネ三八式野砲十年式榴彈ニ同シ

五 三八式野砲榴霰彈

イ、鋼製ニシテ彈體啄螺塞板、中心管及隔板ヨリ成リ彈體内底部ニ炸藥室ヲ有シ之
ニ小粒藥百瓦ヲ塡實ス

ロ、炸藥室ノ上部ハ隔板ニテ覆ヒ其中央ニ中心管口在リテ之ニ管藥八個ヲ塡實シテ
火道ト爲シ中心管ハ塞板ヲ以テ其上端ヲ保定シ周圍ハ彈子室ヲ有シ此ニ硬鉛製ノ
彈子約二百七十個ヲ入レ其空部ニハ松脂ヲ充塡ス

ハ、彈頭ニハ啄螺ヲ螺定シ之ニ三年式複働信管「修」ヲ裝著ス

ニ、此彈丸ハ殺傷ニ用フ

六 三八式野砲代用彈

イ、鑄鐵製ニシテ小粒藥ヲ炸藥トシ彈頭ニハ三年式複働信管「修」若ハ信管接續筒ヲ
介シテ八八式瞬發信管若ハ八八式短延期信管ヲ裝著シ三年式複働信管ヲ裝著シタ
ル場合ニ於ケル外形及重量ハ三八式野砲榴霰彈ニ同一ニシテ彈子及管藥ヲ除ク
ハハ、此彈丸ハ演習用ニ供ス

七 三八式野砲十一年式發煙彈

イ、彈體ハ鋼製ニシテ内部ニ發煙劑及炸藥ヲ塡實シ彈頭ニハ三年式複働信管「修」ヲ

裝著ス

ロ、此彈丸ハ煙幕ヲ構成シテ敵眼ヲ遮蔽スルニ用フ

八 三八式野砲十二年式照明彈

イ、彈體ハ鋼製ニシテ內部ニ照明劑等ヲ塡實シ五年式複働信管翁「修」ヲ裝著ス

ロ、此彈丸ハ照明ニ用フ

其六 射撃時ニ於ケル彈藥ノ取扱

一 信管ノ錫帽及被包ハ射撃間所要ニ從ヒ之ヲ脫シ射撃後錫帽及被包ナキ信管ヲ成ルヘク殘サヽルコトニ着意スヘシ錫帽若ハ被包ヲ脫シタル信管アルトキハ「パラフインノ」紙ノ類ヲ以テ被包シ濕氣ノ侵入ヲ防クヘシ

二 安全栓ヲ離脫シタル信管アルトキハ安全栓ヲ正シク舊位置ニ裝定シ又信管分畫ヲ測合シタルモノハ正シク安全位置ニ復スヘシ

三 不發ノ彈藥筒空包ハ之ニ明瞭ナル標識ヲ施シタル後區分シ置クヘシ

四 一度發射シタル不發彈ヲ演習場或ハ其他ニ於テ錫帽、打殼藥莢、類ヲ拾ヒ取リ私ニ之ヲ所持スルヘカラス注意ヲ要ス火具モ同シトナク位置ヲ標示シ速ニ上官ニ報告スヘシ往々不發彈ヲ私ニ拾得シ不時爆發セシ結果悲慘ナル危害ヲ受ケタルモノ尠カラス注意ヲ要ス火具モ同シ

五 演習場其他ニ於テ錫帽、打殼藥莢、類ヲ拾ヒ取リ私ニ之ヲ所持スルヘカラス

第十節 三十年式乘馬具ノ名稱手入及裝着法

其一 名稱

一 乘鞍（鞍褥、前橋、後橋、騎坐革、韉革、韉革）

二 附隨品 勒（頭絡、大勒銜、小勒銜、大勒繮、小勒繮、轡鎖、轡鎖留革）鐙、鐙革、腹帶鞍嚢、繃嚢革條、蹄鐵嚢、蹄鐵釘嚢、鞍下毛布

三 屬品 膝覆、旅嚢、馬糧嚢、麥袋、水嚢、野繋勒（頸絡、銜繮）繃具革條

其二 手入法

一 革具ノ手入ハ概ネ左ノ如ク實施スヘシ然レトモ拭淨ニ際シイ、革具ハ刷毛又ハ乾布ヲ以テ塵埃ヲ拭淨シタル後塗油スヘシ

ロ、革具ハ刷毛又ハ乾布ヲ以テ拭セ革強摩シ革ノ表面ヲ剝脫スヘカラス又革實ノ硬化セルモノハ含水布片ヲ以テ拭セ革質內ニ少シク濕氣ヲ帶ハシメタル後含油布片ヲ以テ稍多量ニ塗油スヘシ

ロ、革具ニ給油スルニハ主トシテ革ノ表面ヨリ僅ニ含油セル布片ヲ以テ等齊且數次ニ塗施シ其吸收ヲ待チテ乾布ヲ以テ過剩油ヲ拭ヒ去ルヘシ常用ノ革具中馬體若ハ被服ニ觸接スル部位及表面ヨリ行フヲ得サル部位ニ塗油スルニハ其反對方面ヨリ行フヲ得サルヘシ

ハ、革具ノ手入ニハ水ヲ用フルコトヲ避クヘシ但シ汚垢泥土附着シ除去困難ナルトキハ含水布片ヲ以テ拭淨シ已ムヲ得サレハ清水若ハ軟石鹸水ヲ用ヒ刷毛又ハ布片ヲ以テ徐々ニ洗除スルコトヲ得

ニ、革具ノ手入ニ水ヲ用ヰタルトキ又ハ雨雪等ノ爲多量ノ水分ヲ吸收シタルトキハ乾布ヲ以テ拭ヒタル後通風良好ナル場所ニ於テ陰乾シ其全ク乾カサル以前ニ稍多量ノ塗油ヲナシ其吸收ヲ待チテ輕ク拭摩スヘシ決シテ直射日光又ハ火氣ニ觸レシムヘカラス

二　普通手入ハ概ネ左ノ如ク實施スヘシ

イ、革具ハ塵埃ヲ除去シ馬體ニ觸接スル部分ハ布片ヲ以テ汚垢ヲ拭淨シ要スレハ固ク絞リタル含水布片ヲ以テ拭淨シタル後僅ニ含油セル布片ヲ以テ摩擦スヘシ其他

ニ關シテハ第一項ニ依ル

ロ、鞍褥、腹帶、鞍下毛布ノ使用後汗ノ爲濕潤シタルトキハ日乾シテ塵埃及汚垢ヲ除去スヘシ　但シ日乾スルトキハ革部ニ給油シ又夏季ニ於テハ通風良好ナル場所ニ於テ陰乾スヘシ

ハ、頭絡、轡、腹帶托革、其他諸革條類ハ表裏兩面ヨリ給油スヘシ特ニ對控革、屈曲部其他金具ト觸接シテ屈撓竝ニ磨損シ易キ部分ハ努メテ汚垢ヲ除去シ常ニ給油ヲ潤澤ラナシムヘシ

ニ、麻製品ハ當時乾燥シアルヲ要ス之カ爲時々日乾スヘシ若シ塵埃汚垢ノ附着セルトキハ之ヲ除去シ要スレハ日乾ノ後輕打スヘシ

ホ、衛類等ノ研磨セル鐵具ハ磨粉、藥等ヲ以テ磨キ含油布片ヲ以テ拭フヘシ又野繋衛其他鍚鍍セル鐵部ヲ銅ノ儘アルモノニ對シテハ磨粉若ハ磨研布ノ類ヲ以テ錆ノ部分ヲ除去シ適宜塗抹シ置クヘシ

三　常用品ノ精密手入ハ各部分ヲ分解シ概ネ前項ニ準スル外左ノ如ク實施スヘシ

イ、革具中特ニ汗、汚垢、塵埃等ニ依リ甚シク不潔トナリタルモノハ布片又ハ刷毛ニ

清水若ハ軟石鹸水ヲ含マシメ徐々ニ之ヲ拭浄シタル後石鹸分ヲ除去シテ蔭乾シ乾

三　燥ニ先チ適量ノ塗油ヲナスヘシ但シ金屬ノ摩擦ニヨリ黒色汚

ロ、其他ノ革具ハ布片ヲ以テ拭摩シ適量ニ塗油スヘシ但シ金屬ノ摩擦ニヨリ黒色汚

垢ノ附着セルモノ及縫綴部ノ汚垢ハ叮嚀ニ拭浄スルヲ要ス

ハ、鞍下毛布ノ塵埃汚垢等ニ依リ著シク不潔トナリタルモノハ石鹸水ニテ洗滌シ更

ニ清水ヲ以テ洗ヒ日乾シ要スレハ之ヲ揉ムヘシ

第十一節　砲兵鞍馬具ノ名稱手入及裝着法

其一　名稱

三一ハ附圖第五（其一、其二ニ依ル）

其二　手入法

一　普通手入ハ三十年式乘馬具普通手入ニ關スル規定ニ準スル外概ネ左ノ如ク實施スヘシ

イ、緩喉革、袴革、頸上革、首革、袴革釣革、靴及等ハ主トシテ其馬體ニ觸接セサル面

ヨリ給油シ其觸接スル面ハ常ニ柔軟清浄ニシテ汚垢ヲ留ムルコトナク要スレハ含

濕布片若ハ軟石鹸水ヲ含マシメタル布片ヲ以テ之ヲ拭浄スヘシ

但シ過度ニ塗油シ軟化又ハ脂油ノ膠着スルニ至ルヘカラス又艶富革ニ在リテハ常

ニ適當ナル硬度ヲ保有スルヲ要ス

ロ、鞍革及平長革ハ稍多量ニ塗油スヘシ

二　精密手入ハ前項ニ準スル外概ネ左ノ如ク實施スヘシ

イ、汚垢、汗、塵埃等ノ爲甚シク不潔トナリタル緩喉革、袴革、及鞍革等ノ如キハ刷毛

ニ軟石鹸水ヲ含マシメ之ヲ拭浄ノ後蔭乾シ緩喉革及袴革ハ裏面又ハ馬體ニ觸レサル面ヨリ平長革鞍革ノ如キ複層革ハ兩面及側面ヨリ給油シ十分脂油ヲ纖維間ニ滲入セシムヘシ

ロ、緩喉革、袴革、頸上革、及鞍革ノ附屬革等ニシテ鎖ニ津結シ外方纖維ノ甚シク屈撓シ且十分抗力ニ堪ユルヲ要スルモノハ其部分ニ對シ稍多量ニ給油スヘシ

ハ、鞍索ヲ日乾又ハ風乾スルニ當リテハ之ヲ索張シ置クヘシ

第八章　被服手入保存法

要　旨（被服手入保存法ニ若干增補ス）

一　軍服着用ノ名譽

軍服ハ軍人ニシテ始メテ之ヲ着用シ得ル勅定ノ制限ニシテ　陛下ノ股肱日本臣民ノ精華タル軍人ノ名譽ヲ國ノ内外ニ表彰スルモノナリ軍隊ニ於テハ之ニ依テ秩序ヲ維持服從ノ施行ヲ整然タラシメ軍人ハ之ニ依テ其名譽ヲ表彰スルト共ニ一般社會ニ對シ軍人ノ精神ト言行トニ自制的監視ヲ與フルモノナリ殊ニ長クモ　陛下ノ御服ヲ陸海軍兩式ニ制定アラセラレタル一事ニ至リテハ軍人カ　陛下ノ股肱タル事實ヲ表證スルモノニシテ軍人ノ名譽タル事ハ勿論軍服ニ至大ノ尊嚴ヲ加ヘタルモノト謂ハサルヘカラス

軍服ノ尊嚴夫レ斯ノ如シ居常之ヲ着用スル者之カ尊重ノ念慮無クシテ可ナランヤ而シテ軍服尊重ノ實ヲ擧ケンニハ尙之カ着裝ト手入保存ニ注意スルヲ要ス

二　端正ナル着裝法ニ習熟スルコト必要ナリ

國民ノ儀表ヲ以テ任スル軍人ニ在リテハ居常其ノ着裝ヲ端正ニシ容儀ヲ整ヘ人ヲシテ尊敬ノ念慮ヲ起サシムル如ク心懸ケサルヘカラス抑モ着裝ノ端正ナルハ畢竟軍人精神ノ修養ニ資スル所少カラサルナリ加之着裝法正シカラサルトキハ姿勢ノ端正ヲ害ヒ身體ノ自由ヲ拘束シ動作ノ輕快ヲ妨ケ隊伍ノ齊一ヲ缺キ威嚴ヲ失墜スルニ至ルコトアルヲ以テ軍人タラントモノハ常ニ端正ナル着裝法ニ習熟シアルコト必要ナリ

三　手入保存ニ注意スルヲ要ス

軍服ノ整備ニハ巨額ノ國費ヲ要スル殊ニ戰時ニ於ケル之カ需用ハ莫大ニシテ而モ其ノ原料ハ我國產豐富ナラサルヲ以テ克ク此等ノ關係ヲ了得シ努メテ其ノ保存力ヲ永カラシムルコトニ留意スルヲ要ス而シテ軍服ノ保存命數ハ之カ手入ノ良否ニ依リテ長短アリ故ニ手入ノ時期方法ヲ誤ラサルコトニ注意シ取扱ヲ大切ニシ常ニ之カ手入保存ヲ良好ナラシメサルヘカラス況ンヤ各自着用ノ被服ハ後次入營スル者ニ轉々支給セラルヘキ物品動員ニ當リテハ戰用非準備被服トシテ充當セラルヽモノナルニ於テオヤ

古品ハ新品ニ比シ其取扱粗略ニ流レ易キモノナリト雖モ質素ヲ旨トスヘキ軍人ニ在リテハ克ク其ノ旨ヲ辨ヘ且如上ノ關係ヲ顧慮シ特ニ其取扱ヲ大切ニセサルヘカラス而シテ手入補修ノ完全ナル古品ニシテ着裝法正シキトキハ着用者ノ人格崇高ナルコトヲ表明シ軍人ノ一大美德トスル所ナリ

被服經理ノ向上ハ直接之カ實施者（使用者）タル下士官以下ノ被服ノ愛護及消費節約ニ俟ツコト多シ故ニ被服ノ補修手入特ニ早期修理ヲ勵行シ裝用區分ヲ嚴守シ以テ被服品ノ命數延長ヲ圖ル如ク注意スルコト肝要ナリ

第一節　被服裝着法　（被服手入保存法）

被服ハ其程度ニ依リ裝用區分ヲ定メアリ着用ニ當リテハ其區分ヲ固ク守リ濫用スヘカラズ

被服裝着法ニ付注意スヘキ事項次ノ如シ

其一　襦袢　袴下

一　襦袢ハ釦ノ線ヲ體ノ中央ニ置キ裾部ノ餘裕ヲ平等ニ配附シテ腰部ヲ包容スル如ク

スヘシ

二　袖長サ釦ヲ掛ケスシテ兩手ヲ垂レタルトキ手ノ甲ノ中程ニ至ルヲ適度トス若シ長キニ過クルトキハ袖付ノ下二三寸ノ所ニ襞ヲ取ルヘシ又袖口ノ大ナルモノハ釦ヲ附ケ直スヘシ

三　袴下ハ充分之ヲ引上ケ片手ニテ襦袢ノ裾廻リヲ引下ケ臀部ヲ覆ヒ次ニ右ノ腰紐ヲ左ノ紐孔ニ通シ一回後ニ廻シ右前ニ結フヘシ睾丸ハ左方ニ容ルヽヲ可トス二重帶ノ裾紐ハ踝ノ上部ニテ外側ニ結フ但シ過度ニ緊ムルトキハ袴下ノ破損ヲ速カナラシムルヲ適度トス

四　袴下ノ長サハ裾紐ヲ結ハサルトキ踵ノ下部迄垂ルヽヲ適度トズイス

五　防寒襦袢袴下ハ普通襦袢袴下ノ上ニ着用シ其袖口及裾口ノ餘裕ハ適宜ノ長サニ折返シ置クモノトス

六　鞍傷ヲ豫防スル爲メ袴下ヲ裏返シテ穿ツモ可ナリ又襦袢ノ裾ヲ股下ニ挾マサル樣ニ注意スヘシ

其二　靴（下

一　靴下ハ靴傷ノ豫防足ノ保温上必要ナルハ勿論靴内部ノ清潔ヲ保有スルニ必要ナル

一　ヲ以テ常ニ穿用スルヲ可トス

二　靴下ハ穿ツ前ニ約半分外ヘ折返シ足尖ヲ充分入レ然ル後兩手ニテ口編ノ所ヲ持チ折目ヲ延ハシ穿ツヘシ又靴下ノ脫出ヲ防クニハ口編ノ部ヲ袴下ノ下ニ穿ツヲ可トス

三　支給靴下ニ踵部ヲ付セサルハ保存ヲ永カラシムル爲メナリ故ニ側ヲ踏マサル如ク洗濯スル毎ニ位置ヲ替ヘ穿ツヘシ

四　洗濯ヲ爲セシモノハ乾燥後手ニテ揉ミ柔軟ナラシメテ用フヘシ

五　防寒靴下ヲ穿ヲタルトキハ保存上其ノ上ニ普通靴下ヲ穿ツモノトス

其三　軍衣　袴（夏衣袴）

一　衣袴ハ運動保溫及衞生ヲ顧慮シ寬裕ニ製作シアルモノナレハ過度ニ身體ニ適當セシメントシ縮小スルカ如キハ大ナル過ナリ

二　衣服ヲ着用スルニ當リテハ常ニ惡癖ヲ生セシメサル樣ニ注意シ就中新調ノ衣服ハ着用中體溫作用ニヨリ自然ニ容姿ヲ形成スルモノナレハ着裝ノ際特ニ注意スヘシ

三　袴ハ自然下方ニ垂下セサル如ク常ニ正シク上ニ引キ上ケ帶紐ニテ締メ外側方縫目ハ正シク脚ノ眞側面ニアラシメ皺ハ臀部ニ集ムヘシ乘馬ノ時ハ下部ヲ裾紐ニテ縛リ鞍傷ヲ豫防スヘシ

四　袴ヲ穿ツニハ先ツ前ノ釦ヲ嵌メ次ニ後方ノ尾綬ヲ緊縮シ若クハ帶紐ヲ締ムヘシ又前明ハ體ノ中央ニアラシムヘシ

五　上衣ヲ着ルニハ兩手ヲ通シ揺リ上ル樣ニシテ着ル而シテ袖ヲ通シ終ラハ襦袢各部ノ「タクレ」ヲ正スヘシ

六　上衣ノ襟ノ「ホツク」ハ下方ヨリ釦ハ上方ヨリ順次ニ掛クヘシ

七　上衣ノ釦ノ線ハ正シク體ノ中央ニアラシメ其ノ釦ノ線ト袴ノ前明ノ線トハ一直線ニアラシムヘシ

八　物入ニ物品ヲ入ル、ハ不可ナキモ之カ爲メ其形狀ヲ損セシメサルコトニ注意ヲ要ス又煙管、鉛筆、筆、時計ノ鎖等ヲ外部ニ出スヘカラス

九　刀劍帶革ノ爲メ胴圍ニ生スル皺ハ左右脇下ノ稍々後方ニ於テ襞積トナシ其ノ折目ヲ後方ニ向ケ姿勢ヲ正スヘシ

其四　襟　布

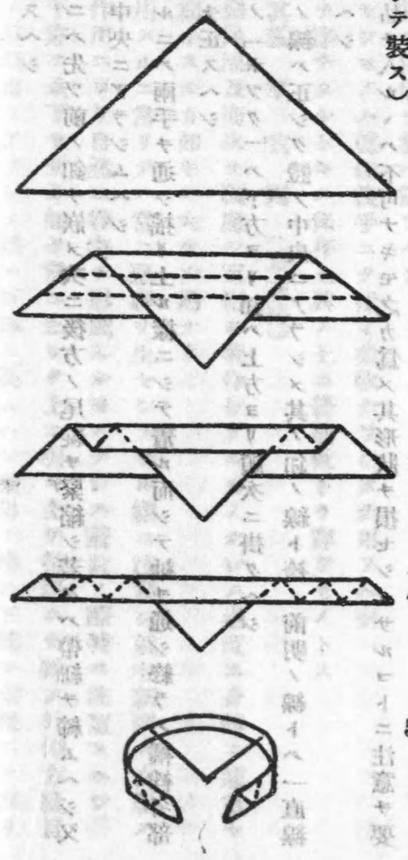
一　襟布ハ裝飾ニ供シ又襟ノ汚損ノ豫防ヲ兼ネシムルモノナリ

二　襟布ハ上衣ノ襟ノ高サヨリ稍々廣ク（巾約一寸三、四分）疊ミ着用ノ際襟上ニ一分位現出スル如ク頸圍ニ纏フモノトス

三　襟布ノ上方ニ抜キ出ルハ見苦シキモノナレハ之ヲ防ク爲メ糸ニテ襟ノ内部ニ簡單ニ縫着スルモ可ナリ

四　襟布ノ疊ミ方ハ第一圖ノ如シ（先ツ2ノ如ク折ル疊ミ次テ3、4ノ如ク折リニ5ノ如クシテ裝ス）

（第一圖）



着裝ニハ兩端ヲ襟ノ接合部ニ於テ合セ其端末ヲ胸ニ垂下ス

其五　襟章及肩章竝臂章、精勤章

一　襟章ハ正シク襟ニ縫着シ左右ニ偏スルコトナク寸度正シク等位置ニアルヲ要ス

二　襟部徽章ハ襟端ヨリ六分入リタル處ニ附着スルモノトス

三　肩章ハ襟付縫目ト平行シテ之ト五分ヲ隔テ肩ノ最モ高キ所ヨリ四分ノ三ヲ前方ニ四分ノ一ヲ後方ニスル（即チ肩章ノ前端ハ上衣ヲ着タルトキ略ホ第一釦ノ上際ト齊等トナル）如ク肩章支紐ヲ縫着シアルヲ以テ星章ノ一尖端ヲ後方ニ向フ如ク後方ノ肩章支紐ヲ通シ留釦ニテ留メ次テ前方ヲ同要領ニスルモノトス

縫着スル場合ハ右要領ニ準ス

四　臂章ハ上衣ノ左腕外側ニ精勤章ハ右腕外側ニ一對其上部ヲ肩ノ袖付縫目ノ下方約四寸ノ位置ニ臺地ノ周圍ヲ「マツリ」縫ニテ附着スヘシ

其六　軍帽

一　着帽ハ直接ニ自己ノ品性ヲ表章スルモノナレハ常ニ正シクセサルヘカラス而シテ其冠リ方ハ眼庇ヲ右手ニテ持チ星章ヲ鼻梁線ニ一致セシメ前後左右ニ歪マサル様ニスヘシ

二　星章ハ左右ニ偏セサル如クシ其一尖端ハ正シク上方ニ向ハシメ又頤紐ヲ以テ星章ヲ蔽ハサル如クスヘシ

三　軍帽ハ其ノ下端カ耳根ノ上方約一寸（指二本ノ廣サ）ノ所ニ在ルヲ適度トス

其七　編上靴及長靴

一　靴ハ新品ノ間ニ穿用ニ注意シ其形狀ヲ保存セサレハ初メニ生セシ曲癖ハ恢復困難ナルノミナラス多クハ之カ原因トナリテ靴傷ヲ生シ靴ノ命數ヲ縮ムルヲ以テ其穿用ニハ注意ヲ要ス

二　靴ノ大サハ防寒靴下ヲ穿ツモ窮屈ヲ感セサルヲ適度トス

三　靴ヲ穿ツ前ニハ之ヲ倒ニシ土砂、塵埃等ヲ叩キ出シ又靴下ノ皺ヲ充分伸ハスヘシ

四　編上靴ヲ穿ツニハ紐ヲ充分緩メ一方ノ手ニテ砂除革ノ上端ヲ他方ノ手ニテ摘ミ革ノ附根ヲ持チ口ヲ充分ニ開キ踵部ヲ踏ミ潰サヽル様穿ツヘシ砂除革ノ餘裕ハ兩手ノ食指ニテ兩側ニ寄セ置クヘシ

五　靴紐ハ足ノ運動ヲ妨ケサル程度ニ堅ク締メ二三回巻キ結フヘシ

六　長靴ヲ穿ツニハ兩手ヲ以テ釣紐ヲ摘ミ足ヲ入レツヽ徐々ニ引上ケ穿ツモノトス而シテ穿キ終ラハ釣リ紐ハ靴ノ內方ニ押シ入ルヘシ

之ヲ脫スルニハ必ス手ヲ以テ補助スヘシ拍車止ヲ蹈ムトキハ直ニ其破損ヲ來スモノトス

拍車ハ靴ヲ穿ツ前ニ尾錠ヲ外側ニシ後部ニ於テ上下シ得ル如ク弛ク着クヘシ革ハ不踏革ヲ下ニ甲縁革ヲ上ニ付スヘシ

七　靴ノ破損ハ不注意ヨリ來ルモノ勘ナカラス例ヘハ踵ノ月形革ヲ蹈潰シテ恰モ上靴ノ如ク足ヲ突キ込ムモノ或ハ雨雪中ニ穿用シタル靴ヲ火ニ乾カシ底部ヲ燒損シタルモノ（衛兵控兵ノトキ及露營ノトキ等注意ヲ要ス）アルカ如キ是ナリ此等ハ修理ヲ施スニ術ナク遂ニ廢品トナルモノナリ注意ヲ要ス

一　袴ノ膝部ヲ持チ裾口ヲ大凡靴第一鳩目ノ線迄ヲ引上ケ裾口ヲ脚ノ外側ニテ後口ニ折ルヘシ

二　脚絆ヲ巻クニハ其ノ端ヲ斜ニ靴ニ掛ケ内ヨリ外ニ巻キ二巻目ニ端角上ニ折リ其上ヲ堅ク巻キ三巻目カ四巻目ニ於テ表ヨリ裏ニ次ニ裏ヨリ表ニ足ノ前面ニ於テ二回折リ返シ其ノ後ハ足ニ沿フテ巻キ上ケ膝下ニ至リ巻キ終ル如クシテ紐ヲ巻キ付ケ其ノ端ハ袴ノ外側縫目ノ線ニテ結ヒ得ル長サニ折返シ結ヒ留ムヘシ

三　巻脚絆ノ高サハ左右相等シク紐ノ端ハ巻脚絆ニテ蔽フヘシ

ニ注意スヘシ又靴紐ノ端ハ巻脚絆ニテ蔽フヘシ

其九　外套

一　先ツ後列ノ釦ヲ外シ軍衣ノ要領ニ依リ袖ヲ通スヘシ

二　襟「ホツク」内釦前釦「順次上ヨリ」覆面釦ノ順序ニ掛ク

三　必要ノ場合ニハ裾穴ハ剣留銃ニ掛ケ又ハ後裂ノ釦ニ掛ク

四　長サハ膝下約二寸袖長ハ腕關節ヨリ長キコト約一寸五分ヲ適度トス

五　胴圍ハ軍衣ノ下ニ防寒襦袢ヲ着用シ尚若干餘裕アルヲ適度トス

其十　水筒

一　水筒ノ負ヒ方ハ挙銃ヲ携帯スル者喇叭ヲ携ヘ乗馬スル者並ニ衛生部獣醫部下士官兵ハ右肩ヨリ左腋ニ掛ケ其他ノ者ハ總テ之ニ反ス而シテ何レノ場合ト雖モ其ノ紐ノ尾錠ハ體ノ前面ニアルヲ要ス又水筒口栓ノ位置ハ其ノ上端カ帶革ノ下際ニ觸ル、ヲ度トス

其十一　嚢

一　先ツ左腋紐革ヲ尾錠ニ掛ケ左手ヲ左負革ニ通シ右手ニテ右負革ヲ持チ徐々ニ背負ヒ然ル後右腋紐革ヲ尾錠ニ掛クルモノトス

二　左右ノ釣金ヲ前方齊等ノ位置ニ於テ帶革ニ掛クヘシ

三　背嚢着用後ハ上衣各部ノ皺ヲ伸シ又負革ニテ肩章ヲ押ヘサル如ク注意スヘシ

其十二　防寒襦袢袴下

普通襦袢袴下ノ上ニ着用シ其袖口裾口ノ餘裕ハ適宜ニ長サニ折返シ置ク事ノトス

其十三　雑嚢

口締「ホツク」ヲ掛ケ中締革、蓋締革ノ締革ヲ締メ蓋ヲ外ニ左肩ヨリ右腋下ニ懸ケ帶

劍後釣鈎ヲ帶革ニ掛クヘシ

其十四　防寒外套防寒胴着

普通外套ニ替ヘ着用スルモノトス但シ防寒胴着ヲ併用スルトキハ其上ニ着用スルモノトス

防寒胴着ハ軍衣ノ上又ハ外套ノ上ニ着用スルモノトス

二　**其十五　防寒覆面防寒靴防寒手套**

防寒覆面ハ軍帽ノ下ニ着用シ其下部ノ余裕ハ軍衣ノ襟部ヲ蔽フモノトス

防寒靴ハ軍靴ニ替ヘ穿用スルモノトス

防寒手套ハ普通手套ニ替ヘ用フ

第二節　被服手入保存

（被服手入保存法）

其一　絨製品

一　被服手入不充分ナルトキハ單ニ外觀ヲ損スルノミナラス保存命數ヲ短縮シ被服經理ニ多大ノ不利ヲ招クモノナレハ常ニ其ノ手入ヲ怠ルヘカラス殊ニ絨製品ハ被服中

二主要ナルモノナレハ特ニ注意ヲ要ス第一、第二裝等ニシテ臨時着用ノモノハ使用後除塵ヲ行ヒ清潔ナラシメ置クヘシ

二　除塵ヲ行フニ當リ毛竝ニ從ヒ輕ク絨刷ヲ掛クヘシ

三　泥土ノ附着シタルモノハ能ク乾カシタル後手ニテ泥土ヲ揉ミ落シ指頭ニテ撮キ又ハ掌ヲ以テ打チ敲キ塵埃ノ浮キ上ルヲ待チ輕ク絨刷ヲ掛クヘシ汗又ハ雨露等ニテ濡レタルモノハ成ルヘク速ニ乾燥スヘシ行軍等ニ際シ雨ニ遭ヒ火ニテ乾カストキハ遠火ニテ乾燥スヘシ

四　除塵ヲ行フニハ絨刷ヲ過度ニ使用スヘカラス是レ絨地ハ絨刷ニテ磨損セラル、虞アレハナリ

五　脫衣後ハ物入内ニ「マツチ」紙屑食品ノ粉末等ノ殘リ居ラサル樣取掛スヘシ又時々物入ヲ裏返シ塵埃ヲ除去スヘシ是レ諸種ノ災害ヲ誘發スルノ原因トナルコトアレハナリ

六　絨製品ハ一般ニ蟲害ヲ蒙リ易シ若シ害蟲又ハ蟲害ヲ蒙リタルモノヲ發見シタルトキハ直ニ上官ニ報告スヘシ

注意ニ害虫ノ喰キ所汚レタル所又ハ濕氣アル場所ヲ好ミ整頓棚、羽目板、床板等ノ隙キ間ニ棲息スルコト多シ故ニ掃除ノ能ク是等ノ塵埃ヲ除去スルコトニ努ムヘシ

一軍帽

一、除塵ヲ行フニハ帽ヲ左手ニ持チ頤紐ヲ充分緩メ天井ノ前ヨリ後ニ縮（マヽ）ノ上ヨリ下ニ鉢巻ノ左ヨリ右ニ刷ヲ掛クヘシ

二、裏地ノ汚レタルモノハ取リ外シ洗濯スヘシ

三、縁革ノ汗ノ爲メ汚レ且ツ發黴シ易キヲ以テ時々手巾手拭等ニテ丁寧ニ拭フヘシ

四、眼庇、頤紐等ハ火氣ニ接觸スヘカラス是革質硬化シテ脆弱トナリ或ハ其塗料溶解スルノ虞アレハナリ

五、星章、頤紐釦ハ錆ヲ生スルコトアレハ時々布片ニテ清拭シ又成ルヘク手垢等ノ着カサル樣注意スヘシ

六、星章ノ手入ノ爲メ歪マサルコトニ注意スヘシ

二軍衣袴、外套

一、除塵ヲ行フニハ襟ハ左ヨリ右ニ胴及袖ハ上ヨリ下ニ刷ヲ掛クヘシ又襟付及袖付ノ縫目ノ如キ塵埃ノ溜リ易キ所ハ注意シテ拂フヘシ

二、袴ハ盤帳前ハ勿論時々裏返シテ爲シ除塵ヲ行フヘシ

三、襟、袖口、物入等ハ汚レ易ク又袴裾ハ泥土附着シ易キ故能ク手入ヲ爲スヘシ

四、濕レタルモノハ絞ルコトナク適宜ニ水ヲ壓出シ能ク皺ヲ伸シテ原形ヲ失ハサル如ク乾燥スルコトニ注意スヘシ

五、衣及外套ノ釦ハ手入ハ發錆ヲ防クニ止メ特ニ光輝ヲ發セシメサルモノトス

六、襟部徽章及肩章ノ金屬ハ塵埃ヲ除去スルニ止メ磨カサルモノトス

三巻脚絆

使用後舍外ニ於テ適宜ノ長サニ折疊其一端ヲ持チテ能ク塵埃ヲ振ヒ落スヘシ泥土ノ附着甚シキトキハ水洗ヒヲ爲スヲ可トス

其二綿麻布製品

一夏衣袴、作業衣袴等ノ除塵ヲ行フニハ時々能ク打チ振フカ又ハ絨刷ニテ拂ヒ落スヘシ人ニ因ハ品質ヲ害スル虞ナキ場合ニ於テハ又ハ毛刷ニテ拂ヒ落スヘシ

二　物入ニ種々ノ品物ヲ入ルヽトキハ汗又ハ雨ニ潤ヒテ色素溶解シ被服ニ汚点ヲ印スルコトアリ注意スヘシ

三　雨露又ハ汗ニ潤ヒタルトキハ乾燥スルカ又ハ洗濯ヲ爲スヘシ

四　夏衣袴、作業衣袴　汗及塵埃等ノ爲メ汚レ易キヲ以テ日常着用ノモノハ適時洗濯ヲ怠ルヘカラス

金屬類ノ手入ニ關シテハ軍衣袴ニ同シ

五　襟布、襦袢袴下　不潔ナルトキハ衞生上有害ナルヲ以テ適時洗濯ヲ行ヒ常ニ清潔ナラシムヘシ

六　靴下　洗濯ヲ怠ルトキハ不潔トナルノミナラス靴傷ヲ生スル原因トナリ且ツ其ノ破損ヲ速カナラシム故ニ屢々洗濯ヲ行ヒ常ニ清潔ナラシムヘシ

七　夏外套、携帶天幕　防水ヲ施シアルヲ以テ妄ニ折リ目ヲ附シ又ハ摩擦セサル樣注意スヘシ

其三　寢具

一　時々日光乾燥ヲ行フヘシ

二　敷布、枕覆ハ特ニ汚レ易キヲ以テ適時洗濯ヲ爲スヘシ

三　敷布ハ同時ニ二枚洗濯シ又修理ニ差出スヘカラス

四　敷布ハ洗濯ノ都度前後シテ其ノ位置ヲ替ヘ使用スヘシ

五　枕覆ヲ洗濯シ或ハ修理ニ差シ出シタル時ハ枕ニハ手拭ノ類ヲ巻キ使用スヘシ

六　枕ハ常ニ廻轉シテ使用スヘシ

七　毛布ハ塵埃ヲ吸收シ易ク塵埃ハ衞生上有害ナルヲ以テ毎朝振ヒテ塵埃ヲ除クヘシ

八　包布内ニハ最新ノ毛布二枚ヲ入レ白絲ニテ八箇所以上綴ヲ置キ毛布ノ片寄ラサル樣爲スヘシ

九　包布内ニ毛布ヲ入ルヽニハ先ツ毛布ヲ裏返シ口明ノ方ヲ下ニシテ床上ニ平ニ延シ其上ニ毛布二枚ヲ正シク重ネ其餘裕ハ内ニ折込ミ四隅ヲ二寸位入リタル所ニ稍々緩ク綴チヲ施シ次ニ四隅ヨリ斜ニ中央ニ向ヒ等シク巻キ込ムヘシ然ルトキハ包布ノ口明キノ所ハ表面ニ現ハレ來ルヲ以テ之ニテ巻キ込ミタル部分ヲ蔽ヒ後徐ニ巻込部ヲ舊位ニ引キ伸スモノトス毛布ヲ入レ終ラハ皺ノ生セサル如ク平ラニシテ口明ノ紐ヲ

ニ結ヒ第二圖ノ如ク緩チヲ施スヘシ

第二圖

八　靴

其四　軍靴

一　軍靴ノ手入不充分ナルトキハ革質硬化シテ保存命數ヲ縮ムルノミナラス革傷ノ原因トナリ延イテ行軍力ヲ減スルニ至ルヲ以テ常ニ其ノ手入ヲ怠ルヘカラス

二　日常使用ノモノハ毎日靴刷ヲ以テ塵ヲ拂フヘシ泥土附着シタルモノハ靴刷ノ泥落又ハ竹ヘ木片等ニテ之ヲ落シタル後除塵ヲ行フモノトス

三　軍靴ヲ水ニテ洗フコトハ成ルヘク避クヘシ若シ泥土其ノ他ノ汚物密着シ已ムヲ得ス水ニテ洗ヒタルトキハ之ヲ陰乾ト爲シ半ハ乾キタル正トキ稍々多量ニ保革油ヲ塗リ充分革質内ニ擦リ込ムヘシ潤ヒタル軍靴ヲ强キ日光又ハ火ニテ乾ストキハ革質硬化スルニ至ルヲ以テ之ヲ避クヘシ

四　保革油ヲ塗ルハ日常使用セサルモノハ穿用後日常使用ノモノハ通常一週間一回トシ其ノ量ハ編上靴一組ニ付八分長靴一組ニ付一匁ヲ適度トス

五　保革油ヲ塗ルニハ靴刷ニテ塵埃ヲ拂ヒタル後布片ヲ以テ靴ノ表面ニ擦リ込ミ然ル後初メニ塗油シタルモノヨリ布片若クハ靴手入用刷ニテ充分ニ摩擦スルモノトス

六　靴刷ニテ保革油ヲ塗リ又擦リ込ムヘカラス

七　保革油ハ爪先革及月形革上部(長靴ニアリテハ柱形革)ニ充分塗リ其ノ他ハ少量ヲ塗ルヘシ殊ニ編上靴ノ上部鳩目附着ノ部分、踵(月形革ノ下部)ノ部分及長靴ノ筒ハ其ノ量ヲ減シ底革ニハ保革油ヲ用フヘカラス

八　保革油ノ使用量過度ナルトキハ革質柔軟ニ過キ筒革垂ノ下月形革ノ變形トナリ又袴ノ裾口靴下ノ汚損等ノ不利アリ

九　革質ノ硬クナリタル軍靴ハ先ツ濕リタル布片ニテ拭ヒ革ニ濕リヲ持タシメタル後

保革油ヲ塗ルヘシ其ノ量ハ日常使用ノモノニ比シ稍々多キヲ可トス

十　營内靴ニアリテハ甲布ニ塗油セサル外前各項ニ依リ手入ヲ行フモノトス

十一　靴ノ内部ハ時々布片ヲ以テ拭ヒ常ニ清潔ナラシムヘシ

其五　背嚢

一　手入不充分ナルトキハ革質自然ニ變化シテ脆弱トナリ保存命數ヲ縮ムルモノナレハ常ニ其ノ手入ヲ怠ルヘカラス

二　塵埃ヲ除去スルニハ各紐革類ヲ解キ毛皮ハ布片ヲ以テ刷キ落シ紐革及絲革ハ清拭スヘシ

三　背嚢内部ニハ塵埃溜リ易キモノナレハ時々中枠ヲ取リ出シ隅々ヲ丁寧ニ擽除スヘシ

四　夏期演習行軍等ノ際背當革及紐革類ノ汗ニ濕ロタルモノハ濕布ヲ以テ汗ヲ拭ヒ去リタル後陰乾ト爲スヘシ

五　濕氣ヲ帶ヒタル背嚢ハ成ルヘク陰乾ト爲シ雨雪ニ濡レタルモノハ日光ニテ半乾燥ト爲シタル後陰乾ト爲スヘシ火熱ヲ加フルコトハ絶對ニ避クヘシ

六　革類（毛皮絲革ヲ除ク）ニハ毎月一回保革油ヲ塗ルヘシ其ノ量ハ背嚢一個ニ付約一匁ヲ可トシ塗油ノ方法ハ軍靴ニ準ス

七　革質ノ硬クナリタルモノ及濕潤後ノ油ニ關シテハ軍靴ニ同シ

其六　水筒及飯盒

一　水筒、飯盒ハ「アルミニユーム」製ナルヲ以テ取扱ヲ丁寧ニシ物ニ打チ當テ變形セシメサル樣注意スヘシ

二　『アルミニユーム』ハ酸類（梅干、漬漬、酢ノ如キモノ）ニ遭ヘハ腐蝕スルヲ以テ使用後ハ直ニ洗滌シ酸氣ノ殘リ居ラサル樣ニスヘシ梅干ノ類ヲ携行スルトキハ飯ノ内部ニ入レ置クヲ可トス

三　飯盒及水筒ノ洗ヒ方不充分ナルトキハ遂ニ臭氣ヲ發スルニ至ルヲ以テ充分ニ洗滌シ常ニ清潔ナラシムヘシ

四　寒期ニ於テ行軍露營等ノ場合水筒ニ湯ヲ充實携行スルトキハ凍結ノ爲メ破裂又ハ變形ノ虞アルヲ以テ若干（約十分ノ一）ノ餘裕ヲ存シ置クヘシ水筒紐革ハ湯又ハ水ニ濕ラササル樣注意スヘシ

五 水筒紐革ノ手入法ハ背嚢紐革ニ準シ塗油ノ量ハ約二分ヲ可トス

一 拍車ハ錆ヲ生シ易キヲ以テ使用後ハ勿論其他時々油布ニテ清拭シ錆ノ出デサル様注意スヘシ錆ヲ生シタル場合ニアリテモ紙鑢如キモノヲ使用セサルモノトス

二 留革ノ手入法ハ軍靴ニ準ス

其八 被服手入具

一 絨刷 植毛内ニ絨モ其ノ他塵埃附着シタルトキハ絨毛ハ錐尖等ニテ除去シ塵埃ハ石鹸ニテ洗ヒ落スヲ良シトス

二 洗濯刷 乾燥不充分ナルトキハ毛、木質及内部ノ針金等ヲ腐蝕スルヲ以テ使用後ハ能ク水ヲ去リ成ルヘク速ニ乾燥セシムヘシ

三 靴刷 塵埃、泥土附着シ易ク之カ為麻袋其ノ他ヲ汚シ易キヲ以テ使用後ハ能ク清拭スヘシ

塵埃、泥土ノ固着シタルモノハ石鹸ニテ洗ヒ落スヘシ

鞘ハ時々清拭シ錆ノ出テサル様注意スヘシ

四 小刀、鋏、針 錆ヲ生シ易キヲ以テ使用後ハ勿論其ノ他時々油布ニテ清拭シ錆ノ出テサル様注意スヘシ

五 絆巻 靴實施クナルトキハ折損シ易キヲ以テ一年一、二回薄ク保革油ヲ塗ルヘシ

六 燕口袋、麻袋 油壺又ハ靴刷等ノ為汚シ易キモノナレハ取扱ニ際シ汚損セサル様注意スヘシ

其九 汚損被服ノ手入

一 被服ヲ汚損シタルトキハ成ルヘク速ニ取リ去ルヘシ其ノ儘ニ為シ置クトキハ漸次地質ニ固着シ容易ニ取リ去リ得サルニ至ル

二 保革油其ノ他ノ油類ノ附着セルモノハ濡手拭ニ石鹸ヲ附シ拭フヘシ

三 煙草ノ脂ハ味噌汁ニテ拭ヒ去リ後水洗スヘシ

四　蠟ハ温灰ヲ紙ニ包ミ附着部ニ當テ蠟分ヲ吸收シ去ルヘシ

五　梅酢等ノ附着セルトキハ酸ノ爲染色ヲ變スルコトアルヲ以テ濡手拭ニ石鹸ヲ附シ拭フヘシ

六　味噌汁、醬油等ハ鹽分ノ爲染色ヲ變スルコトアルヲ以テ速ニ濡手拭ニテ拭セ去ルヘシ日ヲ經タルモノハ石鹸ニテ洗フヘシ

七　糊又ハ飯粒等ノ附着セルトキハ濡手拭ニテ拭ヒ去ルカ又湯ニテ洗フヘシ

八　酒、ビール等ハ布ニテ拭ヒタル後煙草ノ煙ヲ吹キ掛ケ置クカ或ハ湯又ハ水ニテ洗フヘシ日ヲ經タルモハ汚染部ヲ濕シ然ル後石鹸ニテ洗フヘシ

九　葡萄酒ハ直ニ水洗スルカ又ハ冷水ニ浸シ後石鹸ニテ洗フヘシ

十　サイダー、果實ノ汁等ハ直ニ水洗スルカ若クハ水洗ヲ爲スヘシ附着後時間ヲ經過スレハ洗ヒ落スコト困難ナルニ至ル

十一　インキハ直ニ濕布ニ吸込マセルカ其ノ部ヲ洗ヒ後石鹸ニテ洗フヘシ日ヲ經テ乾燥セルモノハ先ツ温湯ニテ濕ホシ飯粒又ハ濃厚ナル糊ヲ塗リ込ミ其ノ兩面ニ布片ヲ

十二　墨汁ハ多量ノ水又ハ温水ニテ輕ク其ノ部ヲ洗ヒ後石鹸ニテ洗フヘシ日ヲ經テ乾

當テ糊ヲ絞リ取リ尚ホ新シキ糊ヲ與ヘテ反覆シ最後ニ水洗スヘシ

十三　消火器液ヲ附着セルトキハ直ニ水洗ヲ爲スヘシ時間ヲ經過スレハ地質ヲ損スルニ至レルカナリ

十四　血ノ附着セルモノハ冷水ニテ洗フヘシ時ヲ經過シタルトキハ石鹸ニテ水洗ヲ爲スヘシ決シテ湯ヲ用フヘカラス

十五　尿水、馬ノ涎等ハ速ニ石鹸ニテ洗ヒ水洗ヲ爲シ乾燥ス

第三節　被服個人修理ノ範圍及小修理法（被服手入保存法）

一　被服ノ破損ハ自ラ修理シ得ルモノハ直ニ修理シ破損大ニシテ自ラ修理シ能ハサルモノハ修理ヲ申立ツヘシ決シテ破損ノ儘捨テ置クヘカラス

二　被服ノ破損小ナルトキ又ハ破損セントスル以前ニ於テ修理ヲ加フルトキハ作業容易ニシテ且ツ宗全ニ修理シ得ルモ大破ニ至リタルモノハ工場ニ出スモ其ノ修理困難ナルノミナラス保存命數ヲ短縮スルニ至ルモノナリ

三　被服ノ修理ハ戰地ニ於ケル練習ヲシテ最モ緊要ナルヲミナラス其ノ場合ハ保存命

數、運動ノ自由及外觀ノ良否ニ關係スルモノナレハ常ニ其ノ方法ニ習熟セサルヘカラス

四　各人ニテ行フ修理ノ範圍ハ左ノ如シ（師團經理要領）

イ、各種錆ホック類ノ縫着

ロ、肩章襟章各種臂章片布類ノ縫着

ハ、一般被服ノ綻ヒニ、襦袢袴下及裏地等ノ小ナル當切修理

ホ、約一寸以下ノ鉤裂ノ巻縫

五　修理ノ實施法ニ關シテハ被服手入保存法ニ據ル

修理ニ關スル注意

一　修理ニ用フル絲ハ地質ト同色ノモノヲ用フヘシ例ヘハ夏衣袴ニハ柒褐色ノ絲ヲ襦袢袴下ニハ白色ノ絲ヲ用フルカ如シ

二　「ホック」尾錠等修理材料古品ナルトキハ多少ノ變形ハ手直ノ上使用スヘシ

三　修理セントスルトキハ其物ノ形狀寸法ヲ變セサルカ如ク注意スヘシ例ヘハ長キモ

ノヲ短ク仕上ケ又ハ臀部ノ如キ膨ラミアル部分ヲ緊張シテ仕上クルカ如キハ外觀惡シキノミナラス直ニ破損スルニ至ルモノナリ

又鉤裂ノ修理ニ其兩片ヲ引キ寄セテ縫ヒ合ス如キハ適當ナラス

四　總テ修理濟品ハ其破損箇所ノ修理正シク行ハレアルヤ否ヤヲ點檢シ着用ニ當リ支障ナキ樣注意スヘシ

第四節　洗濯

一　石鹸ニハ地質ヲ弱クスルモノアルヲ以テ成ルヘク少量ヲ使用セサルヲ可トス

二　妄リニ多量ノ石鹸ヲ使用スルモ其ノ割合ニ效用アルモノニアラス故ニ石鹸ハ先ツ襟、袖口等ノ如キ垢ノ多ク着キタル部分ニ使用シ初メ少量ヲ用ヒ尚充分ニ垢ノ取レサルトキハ更ニ少量ヲ加ヘ其ノ他ノ部分ハ餘汁ニテ洗フヘシ

三　石鹸使用後ハ水ニテ洗ヒ地質ニ石鹸ノ殘ラサル樣充分濯キ出スヘシ若シ石鹸殘リ居ルトキハ地質ニ粘氣又ハ一種ノ臭氣ヲ生シ拔キシキハ變色スルニ至リ地質ヲ弱クシ

且座埃汚垢ヲ附着シ易カラシムルモノナリ

四　洗濯ニハ成ルベク洗濯刷ヲ用フヘシ特ニ手ニテ採ムヘシ是レ洗濯刷ヲ用フルトキハ襯衣袴等ノ如ニ染色物ニアリテハ褪色ヲ breed シ褌袢袴下等ニアリテハ徒ラニ地質ヲ磨損スレハナリ

五　洗濯刷ハ地質ノ硬クシテ手ニテ採ミ難キモノ又ハ手採ノミニテ汚レヲ取レサルモノニ限リ使用シ其ノ使用ニ際シテハ成ルヘク輕ク地質ヲ摩擦スヘシ

六　毛糸、根糸等ノモノヲ使用スルハ厳禁ト雖ドモ已ムヲ得サル場合ニハ成ルヘク輕ク地質ヲ摩擦スヘシ

七　洗濯物ハ強ク絞ルヘカラス殊ニ二人協同シテ強ク絞ル如キハ不可ナリ

八　洗濯物ハ充分ニ乾燥セシムヘシ乾燥不充分ナルトキハ黴ヲ生シ或ハ蒸レヲ來シ遂ニ地質ヲ弱カラシムルニ至ル

九　單衣、夏衣等ヲ洗濯スルトキハ襟メ肩章、襟章、臂章、精勤章等ヲ取リ外スヘシ

十　洗濯ノ際ハ標記消ス易キモノナレハ能ク點檢シテ書キ直シ明瞭ナラシムヘシ

十一　洗濯後ハ能ク之ヲ檢シ釦、「ホック」等ノ緩ミ又ハ破損シタルモノハ修理ヲ爲スヘシ

一　絨布ハ熱湯又ハ石鹸水ニヨリテ地質收縮シ且ツ粗硬トナリ壽命數ヲ短縮スルヲ以テ著シク汚染シタル場合ノ外洗濯セサルヲ可トス若シ已ムヲ得ス洗濯スルトキト雖熱湯ヲ用フヘカラス

二　單衣袴ハ水槽中ニ浸シ泳ヲ充分ニ浸透セシメ先ツ裏面ノ汚染部ニ石鹸ヲ塗ケ洗濯刷ニテ擦擦スヘシ袖口等モ同一方法ニテ洗ヒ次ニ表ニ返シ汚ヒタル部分ニ薄ク石鹸ヲ塗ケ毛並ニ從ヒ刷ニテ輕ク摩擦スヘシ洗濯シタル毛ノハ再ヒ水槽中ニ入レ清水ヲ以テ洗濯シタル毛ノハ再ヒ水槽中ニ入レ清水ヲ以テ洗ヒ絞ルニトヲ繰返シ絞ルニトヲ繰返シ適宜ニ水ヲ壓出シ能ク裏裏ノ纖維ヲ伸ハシテ損傷ヲ失ハサル如クシ裏面ヨリ日光ニ當テ乾燥スルモノトス

三　外套ハ單衣袴ノ要領ニ準スルモ内務班長ニ屆ケ出テ指示ヲ受ケ行フモノトス

四　單衣袴外套ヲ洗濯セントスルトキハ

一　夏衣袴、敷布、包布、襟布ハ充分水ヲ浸透セシメタル後少量ノ石鹸ヲ塗リ手ニテ揉ミ汚物ヲ洗ヒ去ルヘシ此際手揉ニテ充分ニ除去シ難キ汚點ハ洗濯刷ニテ輕ク摩擦

スヘシ然ル後石鹸液カ地質中ニ殘ラサル様水ニテ再三洗滌シテ絞リ充分鍛テ伸シテ
乾燥スヘシ
但シ襟布ハ絞ラスシテ疊ミ付ケ其ノ儘乾燥スルヲ可トス
二 夏外套、携帯天幕ハ防水剤ヲ施シアルモノナレハ洗濯セサルヲ可トス若シ著シク
汚損シ已ムヲ得ス洗濯スルトキハ成ルヘク石鹸ヲ用フルコトナク水ニ浸シタル後洗
濯刷ニテ輕ク摩擦シ汚レヲ除キ去ルヘシ洗濯後ハ
脂油ノ爲汚損シタル場合ニハ少量ノ石鹸ヲ用ヒ輕ク摩擦シ汚レヲ去ルヘシ洗濯後ハ
絞ルコトナク適宜ニ水ヲ壓出シ能ク鍛テ伸シテ乾燥スヘシ
三 襦袢、袴下、靴下ハ先ツ裏返シ汚レ
口其ノ他著シク汚レタル部分ニ石鹸ヲ附ケ手揉ニテ洗濯スヘシ袖
モノトス
洗濯後ハ清水ニテ能ク石鹸ヲ濯キ出シ適宜ニ絞リ乾燥スヘシ
四 軍帽裏地、麻袋（舊式織リ目粗キモノ）ハ織目粗キヲ以テ能ク揉ミ又ハ洗濯刷ニ
テ摩擦スルトキハ其ノ織目ヲ崩シ地質ヲ破ルニ至ルヲ以テ洗濯ニ際シテハ輕ク揉ミ

汚レヲ洗ヒ去ルヘシ
洗濯後水ヲ去ルニハ絞ルコトナク疊ミテ水ヲ壓出スヘシ
五 如何ナル場合ニ於テモ毛櫛棕櫚棕梠製タワシ等ニテ洗濯スヘカラス
六 洗濯機械ニヨリ洗濯スルトキモノハ襦袢、袴下、夏衣袴、冬作業衣袴、作業衣袴、敷布、
包布、蒲團、枕等綿麻布製品ハ洗濯ヲ行ハサルモノトス

第五節 防毒被服ノ手入保存法

其一 防毒面

先ツ覆面及連結管ト吸收罐トヲ連結セル儘携帯袋ヨリ取出シ乾燥セル布片ヲ以テ之ヲ
清拭シ之ニ附着セル塵埃異物ノ除去ヲ行ヒ然ル後各部分ニ對シ以下示ス如キ手入ヲ行
フモノトス

一 覆面

1. 面體内部ヲ水又ハ酒精ヲ僅カニ浸潤セシ布片ヲ以テ拭淨シタル後濕乾スルモ
ノトス火氣ニヨリ乾燥スヘカラス

但シ水ノ使用ヲ已ムヲ得サル場合ノ外成ルヘク避クルモノトス

2. 面體外圍ノ汚損ニ注テ乾布又ハ刷毛ニテ落シ得サル場合ノ外成ルヘク避クルモノトス

一 使後清水ニテ洗滌シ蔭乾ヲ行フヘシ

但シ火氣ニヨリ乾燥スヘカラス

洗滌ノ際ハ呼氣室等ニ水ノ入ラサル樣特ニ注意ヲ要ス

3. 眼硝子ハ軟綿布ニテ内外ノ表面ヲ拭ヒ漏レハ軟綿布ノ一部ヲ小量ノ酒精ヲ浸シテ硝子面ヲ拭ヒ乾燥セル部分ニテ輕ク拭淨スヘシ

4. 呼氣室ハ呼氣瓣ヲ取外シタル後乾布ニテ充分清拭後「ワセリン」ヲ薄ク塗布シ置クヘシ若シ發錆ニ依リ白粉ヲ生シアル場合ハ之ヲ取除キタル後茶褐塗料ヲ以テ補修塗ヲ行フヘシ

呼氣瓣ノ取外シ及ヒ取付ケハ努メテ町噐ニ取扱ヒ殊ニ取付ノ際ハ正規ノ位置ヲ保タシムル如ク注意ヲ要ス

5. 眼鏡ノ蓋螺呼氣室ノ螺旋部及呼氣室蓋等ニハ發錆ヲ防止スル爲メ必要ニ應シ薄ク「ワセリン」ヲ塗布スルヲ可トス

二 連結管

一 連結管ノ手入ハ面體ノ場合ト同樣ニ行フヲ可トス　若シ水洗ノ必要アル場合ハ吸氣室ニ水ノ滲入セサル如ク注意ヲ要ス

三 吸收罐

吸收罐ハ乾布ニテ清拭シ塗料ノ剝離甚シキ時ハ茶褐塗料ノ塗布ヲ行ヒ底蓋ニ防水紙ヲ張付スヘシ

四 携帶袋

携帶袋ハ塵埃及圭等ノ附着セルモノハ刷毛又ハ布片ニテ拭淨シタル後日乾スヘシ

二シテ汚染セル部分ハ水又ハ石鹸水ヲ以テ洗滌シタル後充分之ヲ日乾スヘシ

五 委止板圍ヲ内容品ヲ點檢シ不足物ヲ補塡シ置クヘシ

其二　防毒衣褲等

一 防毒衣

防毒衣ノ使用後ノ手入ハ左ノ如ク行フヲ適當トス

1. 表面ニ塵埃泥土等ノ附着セシモノハ乾燥セル布片又ハ刷毛ニテ輕ク拭淨ス

2. 汚レ甚シク前項ノ方法ニテ容易ニ清淨シ得サル場合ハ稀薄ナル石鹸液ニテ拭ヒ取ルヲ要ス

一 3. 內面ハ季節及使用時間ノ長短ニヨリ異ルモ汗ノ附着甚シキニヨリ清水ニテ濕シタル布片ヲ使用シヨク拭淨シ次ニ酒精ヲ浸シタル布片ニテ拭ヒ日陰ニテ充分乾燥セシメ更ニタルクヲ薄ク塗布シ置クヲ最モ適當ナル處置トス

二 防毒袴、防毒手袋、防毒靴

防毒衣ニ準スル手入ヲ實施スルモノトス

三 包布塵埃ノ附著セシ場合ハ刷毛又ハ乾布ニテ清拭ス泥土等ニテ甚シク汚損セシ時ハ水洗スヘキモ成ルヘク水洗ハ避クルヲ可トス

水洗後防水性ヲ失セタルモノハ雜嚢ノ場合ト同樣ノ方法ニテ防水加工ヲ行フヲ可トス

其三 馬用防毒面

一 覆面

二 1. 塵埃土砂ノ除去ニハ乾布又ハ刷毛等ニテ輕ク拭淨スルモノトス

2. 革具ニ對スル發黴及金具ノ發錆躁防ノ爲左ノ如キ手入ヲナスヘシ

即チ革具ニ對シテハ保革油ヲ使用シ尙塗油ト同時ニ防黴ノ目的ヲ達スル手段ヲ講スルヲ可トス

金具ハ乾布ニテ清拭シ要スレハ塗油ヲナスモノトス

3. 特ニ使用後ニ於テハ口板氣密革及締紐等ニ唾液ノ附着セルヲ以テ乾布ニテ充分拭ヒ取ルヘシ

4. 永ク使用セサル場合ハ面ヲ洗濯シ吸收劑ヲ除去シタル後乾燥セシメ所要ノ手入ヲ施ス

二 吊革

刷毛又ハ乾布ニテ拭淨シタル後塗油スルモノトス油ハ保革油ヲ使用スレハ可ナリ

三 袋

1. 外部ニ附着セシ塵埃泥土ヲ刷毛又ハ乾布ニテ清拭ス革具金具等ニハ發黴發錆ヲ來サヽル如ク塗油スルモノトス

2. 永ク使用セサル時ハ內袋ヲ濕布又ハ酒精ヲ浸セル布片ニテ拭フカ或ハ水洗シヨ

ク蔭乾シ終ル後舊ノ狀態トナスヘシ

來セル**其四**　防毒脚袢ノ

一　脚袢ハ

二　内外ニ附着セル塵埃土砂等ハ乾燥セル布片若クハ刷毛ヲ以テ輕ク拭淨ス

三　3.　雨雪等ノ際使用セルモノハ布片ニテ十分水分ヲ除去シタル後蔭乾スヘシ

二　袋

馬用防毒面ノ袋ニ準シ行スルモノトス

第九章　軍裝ニ關スル規定

軍裝ニ關スル規定附表第二第三ノ如シ

第十章　馬事

野砲兵ノ輕捷ナル運動ハ一ニ馬力ニ依ラサルヘカラス即チ馬ハ野砲兵ノ活兵器ニシテ砲兵ノ本領ヲ發揮スル要素ナルカ故ニ能ク訓練シ能ク愛護シ常ニ新鋭ノ精力ヲ維持セシメサルヘカラス

第一節　馬體ノ名稱

其一　馬體ノ區分

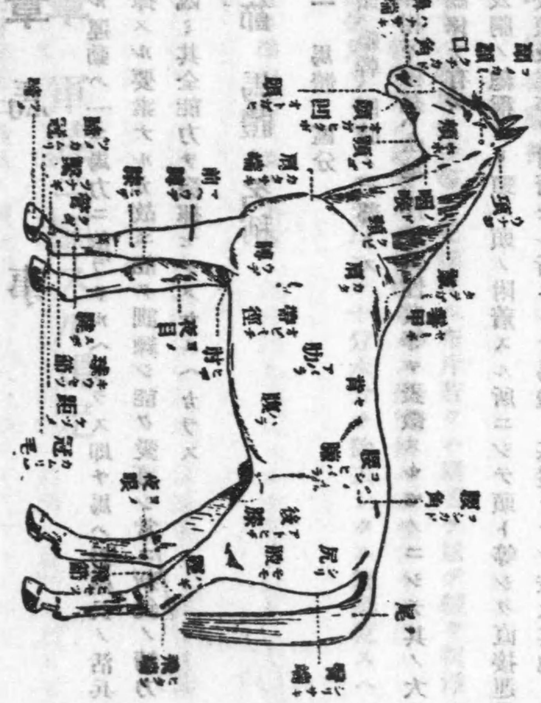
馬體ハ大別シテ頭、軀幹、四肢ノ三部トス

一　頭ノ形狀及容相ハ種類、產地、悍威及性質等ヲ表徵スルモノニシテ其ノ大小方向等ハ直接運動ニ關係ヲ有ス

二　軀幹トハ頸及胴ノ總稱ヲ頸ハ頭ノ附着スル所ニシテ頭ト等シク直接運動ニ關係ヲ有シ胴ハ四肢頸及尾等ノ附着セル所ニシテ馬體ノ基礎ヲナシ鞍及其他ノ馬具ヲ裝着スル部分ナリ

第十章

其二　馬體要部ノ名稱左圖ノ如シ

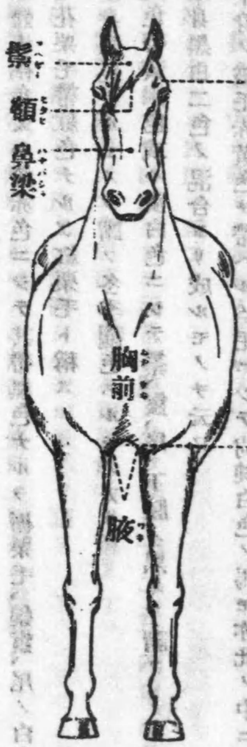


外貌其一

名稱一

外貌其二

名稱二



三　四肢ハ軀幹ノ下部ニアリテ體軀ヲ支ヘ且ツ行進ノ用ヲ爲ス前肢ハ專ラ體重ノ支撐ニ任シ後肢ハ主トシテ體ヲ推進スヘキ任務ヲ有ス

第二節　毛色及特徴

一　毛色ノ種類多キモ大別スレハ左ノ如シ

鹿毛　主色褐色ニシテ鬣、鬣、尾及四肢下部ノ黒キモノヲ謂フ、鹿毛ニハ濃淡種々アリ全身殆ンド黒色ニシテ唯眼圍、唇、喙及腹部等ノミ褐色ナルモノヲ黒鹿毛ト謂フ其他白鹿毛、金鹿毛、紅鹿毛等アリ

栗毛　全體赤褐色又ハ淡赤色ニシテ其帶黒色ナルヲ栃栗毛、鬣、鬣、尾ノ白色ナルヲ尾花栗毛帶紅色ナルヲ紅栗毛ト稱ス

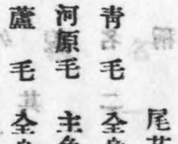
青毛　全身黒色ナルモノヲ謂フ冬季褪色スルモノアリ

河原毛　主色帶黄褐色或ハ灰白色ニシテ鬣、鬣、尾、下肢ノ黒キヲ謂フ

蘆毛　全身黒白二色ノ混合ヨリ成ルモノヲ云フ

月毛　全身ノ被毛赤黄色ヲ帶ヘル白毛ニシテ尚純白色ノ馬モ亦此ノ中ニ含有セシム（佐目月毛）

二　特徴ハ馬ノ識別上必要ナルモノナリ例ヘハ次ノ如シ



（ヒタイサシゲ）額刺毛　額ニ生シタル少數ノ白毛ヲ云フ

星　額ニアル白斑ニシテ其著シク小ナルモノヲ小星ト云フ

流星　星ノ長ク下方ニ延ヒタルモノヲ云フ

鼻白　鼻端ニ有スル白斑ヲ云フ

三白　脚ノ下端ニアル白斑ニシテ通常各脚ノ名ヲ冠シ一、二、三、四白、半白ト稱ス

異毛　毛生ノ附又ハ創傷ニヨリ局部ニ生シタル異色毛ヲ謂フ

（イワヲチ）岩ニ陷　筋肉ノ一部窪ミテ皮上ニ階凹ヲ生ズルモノヲ謂フ

烙印　肩股等ノ一部ニ烙印アルモノハ部位ト烙印ノ原形ヲ併稱ス

右ノ外旋毛其ノ他局所ノ刺毛裂（キレ）瘢等ニシテ特徴トナルハ大ニ其ノ種類多シ

第三節　馬取扱上ノ注意

其一　一般取扱

一　馬ハ性質柔順ニシテ馴レ易ク忠ヲ取扱フニ溫和、親切ナレハ益々其ノ美性ヲ增シ愛撫スルコト深ケレハ直チニ其人ニ親ミ如何ナル勞苦モ厭ハサルニ至ル然レトモ取

扱ヲ誤リ粗暴冷酷ナルトキハ其性質忽チ變シテ人ヲ厭ヒ馬添ヲ惡クシ咬ミ蹴ル等ノ惡癖ヲ生ジ遂ニ軍馬タルノ資格ヲ失スルニ至ルヘシ

二 馬ニ接スルハ常ニ音聲（オーラ）ヲ以テ知ラシメツヽ近ツキ次ニ頸側ヲ愛撫スヘシ然ラサルトキハ不意ナルニ驚キ蹴ルコトアレハナリ馬ノ蹴ルトキハ耳ヲ立テ或ハ耳ヲ背負ヒテ人ヲ睨ミ又ハ鼻端ニ皺ヲ寄スルモノナレハ其ノ瞬間ニ注意スヘシ馬體ニ觸ルヽトキハ直接ニ局部ニ觸ルヽコトナク例ヘハ前肢ヲ擧ケントセハ先ツ腰或ハ臀ヽヲ撫テツヽ手ヲ下方ニ滑ラシ又後肢ヲ擧ケントセハ肩ヲ先ツ撫テツヽ漸次肢ニ至ルモノトス馬ヲ率クトキハ常ニ前ノ馬ニ接近セシメス少クモ四歩ノ距離ヲ間スヘシ水飼ヲ爲シ又ハ演習前後ノ馬ノ出入ノ際ハ殊ニ注意スヘシ

三 新馬ノ取扱ヒニハ細心ノ注意ヲ要ス兒童又ハ子供ノ時家庭ノ惡癖シキガ教育方法ヲ誤ルトキハ不良ノ少年トナル如ク又新馬ノトキノ取扱ヒニハ最モ注意セサルヘカラス馬ノ惡癖ハ此ノ時期ニ於ケル取扱ノ粗惡ナルモノニ多シ故ニ愛撫ヲ主トシテ懲戒ハ寧ロ避ケサルヘカラス

四 取扱ノ不注意ハ啻ニ其性質ヲ不良ナラシムルノミナラズ馬體ニ不時ノ怪我ヲ生セシメ或ハ馬力ヲ虛弱ナラシムル等ノ害アリ

其二 繫馬取扱

一 繫馬ハ取扱使役ニ煩累多ク人馬ニ危險ヲ及ホシ軍隊ノ教育及活動力ヲ減スルコト尠カラス其矯正ハ至難ナルモノ多キヲ以テ先ツ其原因ヲ探究シ之カ改善ヲ圖リ其發生ヲ豫防スルコト肝要ナリ

習繫ハ取扱ノ過失運動ノ不足ニヨリ發生スルモノ多キヲ以テ其種類程度及發生數等ニヨリ概ネ其部隊ニ於ケル馬取扱ノ良否ヲ窺ヒ得ルモノトス

二 繫馬ノ矯正ハ長時日ニ亘リ常ニ細心ノ注意ヲ以テ反覆持續スルニアラサレハ其成果ヲ期シ難ク熱心ト忍耐トハ繫馬矯正ノ要訣ナリ

矯正ノ手段トシテハ馴致ヲ主トシ器械的ノ矯正ハ從トスヘキモノナリ而シテ矯正ノ實施ニ方リテハ愛撫ト懲戒トノ適切ナル應用竝飼養ト運動トノ適當ナル調節ニヨリ主トシテ温情的愛撫ヲ以テシ懲戒ノ要アル時ハ其時機ヲ失セサル如ク有効ニ之ヲ行ナヒ又馬ノ嗜好スル飼料ヲ以テ人馬ノ親和ヲ圖リテ馴致ノ完成ニ努ムヘシ

三 習繫ノ主ナルモノ竝其取扱ニ關シ特ニ注意スヘキ事項次ノ如シ

三 1. 躁癖ヲ成ルベク取扱者ヲ一定シ人馬ノ親和及馬添特ニ後驅集合ノ馴致ヲ圖リ手入飼付水與等ニ際シ溫和ニ取扱ヒ其不安ヲ除去シ躁ル機會ヲ與ヘサル如クシ率馬中躁ラントスル時ハ頭ヲ高ク上ケテ之ヲ制ス

二 躁癖ノ甚シキモノニ對シテハ躁袋躁球及躁癖帶ヲ用ヒ矯正スルコトアリ

2. 咬癖 扱ヒ溫和ニシ飼料ヲ與ヘ、親和ヲ圖リ前驅ノ集合馴致ヲ勵行シ厩内ニ於テハ馬添ヲ考慮シテ繫キシ或ハ成ルヘク空馬房ヲ隔テテ繫クヲ可トス

二 3. 恐怖癖 異樣ナル物體光線音響等ニ對シ恐怖シ易ク行進中俄ニ停止シ或ハ後退シ或ハ急旋回スル如キ癖ニシテ性質怯懦ナルニヨルモノニシテ恐怖ノ徵候又ハ原因ヲ釀奈シタル時ハ激勵ト愛撫トヲ以テ安心セシムル如クシ或ハ停止シテ物體ヲ凝視セシメ或ハ其周圍ヲ遠ク卷乘シ或ハ率馬ヲ以テ近接スル等ノ方法ヲ講シ漸次恐怖心ヲ除クヲ要ス

一 4. 後退癖 突然反リ又ハ後退スル癖ニシテ多クハ前方ヨリスル恐怖若クハ頭頸部ニ於ケル苦痛特ニ項ノ接觸又ハ銜ニヨル口角ノ劇突ヲ免レントスルニ起因ス後退ノ際銜傷又ハ舌創ヲ發シ易シ不意ニ前方ヨリ近接スルヲ避ケ馬ヲ繫クニ方リテハ

索ヲ成ルベク長クシ或ハ彈力アルモノニ繫キ或ハ馬房内ニ於テ通路ニ面シテ繫絆スルカ或ハ放飼スルヲ可トス

5. 逃癖 繫キ方ノ不良率馬ノ過失等ニ起因シ運動不足ハ其誘因トナル

一 取扱上注意スヘキ主ナル事項次ノ如シ

二 イ、馬繫ハ頭絡及寢張索ノ結著ヲ確實ナラシムル時ハ馬ノ自由ヲ束縛シ苦痛ヲ與ヘ却テ逃走ヲ多カラシメ又ハ繫索ヲ過短ナラシムル時ハ馬ノ頭絡又ハ寢張頭絡ノ上ヨリ製勒シタル銜換ヲ最モ愼重ニ行ヒ要スレハ二人協力シ又ハ寢張頭絡ノ上ヨリ製勒シタル後之ヲ脫ス

ロ、率馬 注意ヲ周密ニシ要スレハ大勒ヲ用フ

ハ、注意 逃癖アル馬（後退癖共）ヲ頸輪ノミニヨリ繫畜スルコトハ往々頸部ヲ綾絢シ死ニ至ラシムルコトアルヲ以テ嚴ニ戒シムルヲ要ス頸輪ヲ裝著セル頭絡ハ此弊害ヲ除クコトヲ得ルヲ以テ使用セラルヽ向多シ

6. 齧癖 切齒ニテ飼槽隔木繫索等ニ支點ヲトリ又ハ支點ヲトルコトナク空氣ヲ嚙

下スル癖ニシテ胃腸ヲ障害シ切齒ノ不正磨滅ヲ來ス無聊又ハ模倣ニヨリ發生スルヲ以テ適度ノ運動ヲ課シ厩内ニテハ屬々干草ヲ與ヘテ無聊ヲ感セシメサル如クシ寛馬房又ハ棚内ニ放飼スルヲ可トス

第四節　手入法

一　馬ノ手入ハ人ノ入浴按摩ノ兩者ヲ兼ネタルト同樣ノ効果アリ乃チ馬體ノ垢ヲ去リ皮膚ノ機能ヲ進メ疲勞ヲ慰シ榮養ヲ助クルモノナルヲ以テ十分之ヲ行フヘシ病馬ニアリテハ特ニ然リ若シ之ヲ怠ルトキハ馬體ノ機能ヲ弱メ其ノ發育ヲ妨クルノミナラス種々ノ皮膚病及外傷ヲ生ス

二　馬ノ手入ハ通常朝、夕、二回ニ行ヒ其ノ使用ノ都度之ヲ行フモノトス

一、朝ノ手入　恰モ人ノ朝起キ顏ヲ洗ヒ精神ヲ清メテ着裝ヲ端正ニシタル後其ノ日ノ勞務ニ從事スル如ク馬モ又此ノ趣旨ニ基キ厩勞役ノ準備トシテ馬體ノ異狀ヲ檢シ全身ノ摩擦竝ニ務務ニ必要ナル馬具觸接部ノ手入及四肢、蹄ノ手入ヲ行フヲ以テ主眼トス

二、夕ノ手入　恰モ人ノ入浴シテ汚垢ヲ去リ血行ヲ促シテ一日ノ疲勞ヲ慰スルカ如ク終日使務ノ爲メ塵埃ヲ蒙リ汚垢ノ多量ヲ膠着スルヲ以テ精密ニ手入ヲ行ヒ兼ネテ一日ノ勞ヲ慰スヘキ要アルヲ以テ馬體全部ニ亘リ摩擦ト汚垢除去トニ努ムルノミナラス四肢ノ手入ヲ以テ血行ヲ促スモノトス之レタノ手入ハ最モ多クノ時間ヲ與ヘテ綿密ニ行ハシムル所以ナリ

三、演習後ノ手入　局部ノ充血ヲ消散シ血行ヲ流利ニシ以テ直接疲勞ヲ慰シ疾病ヲ損徴ノ發生ヲ豫防スルニ極メテ重要ナル關係ヲ有スルモノニシテ先ツ採藁又ハ束藁ニテ充分四肢、殊ニ腱及繫凹部ヲ擦リ跡ノ表裏ヲ掃除シ次ニ鞍ヲ卸シ鞍下ヲ擦リ後全體ニ及ホシ汗ノ乾燥スルヲマチマチ手入スヘシ此ノ際帶徑及腋間及股ノ內面等ハ丁寧ニ手入スルヲ要ス又目、鼻、口、肛門等ニ附キタル塵ヲ濕雜巾ニテ拭フコト必要ナリ

三　手入具及其ノ用法

手入袋「ヅツク」表ニシテ手入具ヲ收容ス

鐵櫛　毛ノ縫レヲ解キ皮膚ノ垢ヲ搔キ起スモノニシテ頸、胸、背、尻等肉多ク皮膚厚

き部分ニハ用ヒ頭、背線、腰角、四肢等骨立チ又ハ毛薄ク知覺鋭キ部分ニハ用フヘカラス

三、毛櫛ハ全體ヲ擦ル又鐵櫛ニテ掻キ起シタル垢ヲ拭ヒ去ルニ用フ

木櫛　鬣、繁、尾ヲ梳ルニ用フ

鐵篦　蹄ノ裏ノ汚物ヲ除クニ用フ

雜巾　眼、鼻、口、肛門等ヲ拭フニ用フ

採藥及束藥　馬體ノ汚物ヲ拭ヒ去リ主トシテ肢ノ垢ヲ擦リ去リ血行ヲ促スニ用フル

モ屢々毛櫛又ハ鐵櫛ニ代用シ且之ヲ併用シテ汗ヲ乾カスニ用フ一般ニ手入具ハ常ニ

清潔ニ保チ各馬ニ定メラレタル手入具ヲ使用スヘシ

スルモ決シテ馬ハ清潔ナル能ハス且手入具ノ混用ハ傳染病ヲ傳播セシムルコトアルハナリ

四　手入法

馬ノ手入ハ概ネ左ノ順序ニ依ルヘシ

二、氷勒ニ衝換ヘ手入場ニ繫キ採藥又ハ束藥ヲ以テ粗分ニ摩擦シテ垢ヲ去リ然ル後

鐵櫛ヲ以テ體ヲ輕ク擦リ皮膚ノ垢ヲ掻起スヘシ其ノ順序ハ左ノ頸ヨリ始メ臏、肋、臀、股ノ順序ニ漸次後方ニ至リ次ニ右ニ廻リ臀ヨリ頸ニ及フヘシ

鐵櫛ヲ知覺鋭キ馬ニ用フル時ハ往々惡癖ヲ發スルノ恐アリ注意スヘシ

二、毛櫛ヲ右手ニ持チ鐵櫛ヲ左手ニ握リ毛櫛ニテ全體ヲ擦ルヘシ其使ヒ方ハ毛並ニ逆ヒ又ハ斜ニ擦リ上ケ更ニ毛並ニ又ハ斜ニ擦リ下ケ數回此ノ操作ヲ重ネタル後毛櫛ヲ鐵櫛ノ齒ニテ輕ク擦リ其ノ垢ヲ去ルヘシ鐵櫛ニ溜リタル垢ハ時々敲キ落シ手入ノ後之ヲ掃キ去ルヘシ

左手ニ毛櫛右手ニ鐵櫛ヲ取リ手入スルコトニ慣ルレハ疲勞ヲ減シ馬體各部ノ手入ヲ均一ナラシメ得ルノ利益アリ

毛櫛ノ使用ハ手入ノ主眼トスル所ナルヲ以テ眼、鼻、肛門、陰部等ヲ拭ヒ清ムルニハ必ス毛櫛ヲ使用スヘシ

三、雜巾ハ清水ニ浸シ堅ク絞リ眼、口、鼻、肛門、陰部等ヲ拭フニ用フ

四、木櫛ニ水ヲ含マセ鬣、繁、尾ヲ梳ルヘシ尾若シ泥ニテ汚レタルトキハ手ニテ採去ルカ濕雜巾ニテ拭フヘシ又馬體著シテ泥土等ニ汚レタル場合ニハ先其ノ部分ヲ水ニテ洗フヲ可トスルモ然ルトキハ速ニ乾カサシムルコトニ注意スヘシ

五、鐵箆ヲ以テ蹄裏ノ汚物ヲ除キ楾藥ニテ蹄壁ヲ輕ク擦リ水ニテ洗フヘシ此ノ際繁
ヲ濕サヽル樣注意スヘシ
六、蹄ノ內部ノ水分ヲ蒸發シ乾固狹窄シ易キモノナレハ手入ノ終リニハ常ニ油ヲ塗
ルヘシ其法先ツ蹄裏ニ充分塗リ次ニ蹄壁ニ及フヘシ蹄ノ水洗、塗油ハ護蹄上最モ
緊要ナルコトニシテ蹄機ヲ旺盛ナラシメ蹄ノ成長ヲ助クルノミナラス蹄病ヲ豫防
スルニ最モ効アレハナリ
七、蹄ノ手入ノ際ハ常ニ蹄鐵ノ弛緩又ハ釘節ノ缺損及其ノ剝起竝ニ蹄ノ伸方等ニ就
テ檢査シ直ニ整理スルコト殊ニ緊要ナリ
八、總テ手入ノ際ハ馬體ヲ檢シ外傷特ニ繫韁、蹄叉腐爛、骨瘤、軟腫、釘綻ミ又ハ蹄ノ
伸方等ノ有無及損徵ノ發生增減等ニ注意シ異狀アリタルトキハ上官ニ屆出テ其ノ
處置ヲ請フヘシ
九、手入ハ馬ヲ舍外ノ馬繫杭ニ繫キテ行ヒ雨、雪等已ムヲ得サルトキニ限リ既內ニ
於テス可シ而シテ全身一樣ニ普及スヘキモノナリ外難モ頂、鬐甲、背、帶徑等馬具
ノ觸接スル部位及四肢ハ特ニ意ヲ用ヒテ之ヲ行フヘシ若シ時間ノ餘裕少ナク普ク

二、全身ニ施シ難キ場合アリトスルモ要點ノ手入乃チ前記ノ部位ノミハ努メテ精細ニ
行フヲ要ス蓋シ鞍傷ハ馬具傷ノ原因ハ其手入ノ不良ニ因ルコト最モ多ケレハナリ
十、愛馬心ハ手入ノ良否ニ依リテ略々察知スルヲ得ヘシ即チ本來手入良好ナルモノ
ハ被毛光澤ヲ有シ手ヲ以テ被毛ヲ其ノ方向ニ逆ヒテ掻起スモ汚垢手ニ附着スル
コト少ク鬣、鬣、尾等整然トシテ美觀ヲ呈スルモ否ラサルモノハ飛端、尾根、頂等ヲ龜物ニ摩
擦シテ被毛ヲ切斷シ或ハ皮膚肥厚スルニ至ル
十一、騷擾スル馬、咬、蹴癖等ノ馬アルトキハ之カ矯正及人馬ノ外傷豫防ニ努ムルコ
ト
十二、手入者ハ手入ノ順序方法ヲ正シクシ且熱心ニ手入ニ從事スルコト
以上ノ事項ノ實行ヲ確實ナラシムルトキハ馬體ノ淸潔ハ勿論人馬ノ外傷ト馬ノ疾病ヲ
豫防シ又作業間落鐵馬少キニ至ルヘシ

第五節　飼養法

飼方ハ馬ノ保健及能力發揚上ニ重大ナル關係ヲ有スルモノナレハ馬糧及飮水ノ選擇其

他飼養上諸般ノ事項ニ注意シ馬ノ榮養狀態ヲシテ常ニ佳良ナラシムルヲ要ス榮養佳良ナル馬ハ強健ニシテ疾病ニ抵抗シ各種ノ作業ニ堪エ得ルモ榮養不良ナル馬ハ虛弱ニシテ作業力充分ナラス且早發ズルニ至ル

一　飼養法

一、馬糧ハ大麥、燕麥、干草、切藁、食鹽ニシテ定メラレタル量ヲ通常三回乃至四回ニ分チ與フ代用馬糧トシテ高粱、大豆、豆餅、麩等ヲ與フルコトアリ

二、飼付ハ成ルヘク同時ニ之ヲ行フヘシ

三、干草ノ分配ハ穀類ノ飼付若干時間前ニ於テシ馬ヲシテ貪食ノ弊ニ陷ラシメサルヲ可トス

四、水飼ハ各馬ノ嗜好ニ應シテ充分ニ之ヲ行フヘキモノニシテ規定スヘキモノニ非サルモ種々ノ關係上一日朝、晝、夕、日夕點呼前ノ四回ニ通常飼付前ニ於テ之ヲ行ヒ且充分ニ飲マシムヘシ特ニ平常飲水量少キ馬ニハ注意スヘシ

馬ハ通常一日間參期ハ八升、二斗夏期ハ二斗八、一斗五六升ノ水ヲ飲ムモノトス

二　飼養ニ於ケル注意事項

一、馬糧ハ丁寧ニ取扱ヒ一粒ノ麥一握ノ干草ト雖モ無益ニ放棄スヘカラス喰落シタル干草ハ再ヒ拾ヒ集メテ匏架ニ容ル、如クスヘシ

二、飼養ハ區分ニ基キ正確ニ分配スヘシ馬ノ愛ニ溺レ規定以外ニ多量ノ食物ヲ與フル時ハ病痛、骨軟症、其他ノ疾病ニ罹ル基トナルモノナリ

三、穀物ニハ心ヲ略々同容積ノ切藁ヲ混スヘシ其ノ長サハ一寸ヲ適度トス之レ咀嚼及消化ヲ助ケ又新馬ニハ特ニ發育上必要ナルモノナリ

四、飼槽、麥袋及水槽ハ人ノ食器ニ等シキモノナルヲ以テ常ニ清潔ニシ飼槽ハ毎回食鹽ハ食物ニ味ヲ附ケ食慾ヲ增シ消化ヲ助ケ又新馬ニハ特ニ發育上必要ナルモノナリ

飼付前ニ掃除シ水槽ハ水ヲ酌ミ入ルヽ前ニ長ク東藁等ヲ以テ洗モ覆ヲ爲シ置クヘシ

五、馬ノ採食中ハ成ルヘク靜肅ニシテ咀嚼ヲ全カラシムルヲ要ス若シ食慾不進ノ馬アル時ハ速ニ報告スヘシ

六、水槽ニ水ヲ汲入ルヽニハ氣候ニ依ニ依リテ差アルモ水飼ノ直前ニ於テスルヲ可

トス

七、演習後ニハ必ス水ヲ與フヘシ但シ劇シキ勞働ニ服シ呼吸未タ鎭靜ナラサル間ハ決シテ水與ヲ行フヘカラス若シ渴甚シキトキハ先ツ口ヲ洗ヒ水中ニ干草麩等ヲ浮ヘテ放飮ヲ防クヘシ

八、夏季又ハ行軍演習等馬ノ發汗多キトキハ一日ニ何回トナク水與ヲ行フヘシ勞働中馬ハ水與ニヨリテ元氣ヲ恢復シ疲勞ヲ醫シ夏季ハ是レニヨリテ熱射病ヲ豫防スルコトヲ得ヘシ

九、馬ニ水ヲ與フル際一度頭ヲ擧クルコトアルヲ見テ最早飮ミ終リタルモノト思フヘカラス馬ハ飮水ノ途中屢々休ミテ又飮ミ始ムルモノナリ

十、秋季演習或ハ戰時ニ於テ常用馬糧ヲ得難キ爲止ムヲ得ス裸麥、小麥、高粱、大豆、玄米、甘藷、粟等ヲ代用馬糧トシテ與フルコトアリ之等ノ飼料ハ喰ヒ馴レサル爲メ多量ニ與フレハ危險ナル疾病ニ罹ルコトアルヲ以テ注意スヘシ

第六節　馬ノ健康ナル徵候

一　擧動活潑ニシテ元氣アリ能ク身邊邊ノ事物ニ注意ス

二　眼ハ爽快ニシテ曇リナク耳、鼻翼、唇、尾ノ運動自由ナリ　殊ニ尾根ヲ起シ見ルニ力アルハ元氣濕潤タルノ徵ナリ

三　被毛ニ光澤アリ皮膚ハ柔軟彈力アリテ皮溫齊一ナリ

四　耳ヲ腹側ニ接スレハ恰モ含嗽スルニ似タル音ヲ聞キ得ヘシ

五　食慾良好ニシテ排糞尿ニ異狀ナク排糞ハ硬軟適度ニシテ球狀ヲナシ尿ハ黃褐色ヲ呈ス

六　呼吸ハ安靜ナリ

七　步調快活ニシテ整一ナリ

八　粘膜淡紅色ヲ呈シ靜止ノ際ニ於ケル呼吸ハ通常一分間ニ八乃至十二脈搏ハ一分間ニ三十六乃至四十體溫攝氏三十七度五分乃至三十八度トス

九　晝間ハ概ネ起立シ伏臥スルモ人ノ注意ニヨリ直ニ起立ス

第七節　疾病ノ徵候

前記ノ健徵ニ於テ異狀アルハ疾病ニ罹レルコトヲ示スモ尙ホ病徵ニ就テ記載セハ左ノ

如シ

一　食慾不振、水ヲ飲マス歩行蹌踉頭殊ニ耳ヲ垂レテ愛嬌ス（一般ノ病徴）

二　頻ニ前掻ヲナシ或ハ驟援轉倒シ呼吸促迫又ハ發汗シ腹側ニ耳ヲ接スルモ音ヲ聞カス糞便遲滯ス（疝痛ノ場合ニ多シ）

三　時々咳嗽ヲ發シ身體震顫シ嚥下困難ナリ且又平常狀態ニ於テ頻リニ鼻汁ヲ出ス（感冒等ノ場合）

四　粘膜蒼白或ハ暗赤色ニ變シ呼吸脈搏共ニ概ネ其ノ數ヲ增シ體溫上昇ス

五　蹄ニ熱アリ歩樣雜澁或ハ跛行ス

六　身體倒痩シ被毛光澤ヲ失ス又四肢若クハ下腹ニ浮腫ヲ生スルコトアリ

七　糞ハ褐色ニシテ黄色ヲ帶ヒ大塊消化良好ナルヲ可トスルモ消化不良ニシテ下痢スルカ或ハ其色暗褐色ヲ呈シ小塊ニシテ硬キニ至リ又頻時小糞塊ヲ排泄シ遂ニ排泄ノ狀ヲ呈メルモ脫糞セサルニ至ルカ尿ハ排泄回數ヲ增加シ少量トナリ褐色ノ度ヲ加ヘ遂ニハ淡キ油狀ヲ呈ス

八　落涙、流涎、鼻漏、出血、其ノ他異常物ノ漏出

第八節　疾病及外傷ノ種類原因及之ニ對スル處置

病馬ノ發見其ノ期ヲ失スルトキハ重態ニ陷リ終ニ廢斃ニ至ラシムルコトアルヲ以テ常ニ健康狀態ニ注意シ若シ病馬アルトキハ速ニ上官ニ報告シ其ノ指示ヲ守リ以テ恢復ヲ速カナラシメ馬ノ保全ニ勉ムルヲ要ス

一　傳染セサル疾病

一、疝痛ハ主トシテ運動ノ過激又ハ不足、飼料ノ不良、不潔ナル寢藁ノ貪食、過食、水飼ノ不足、飼付直後ノ激働冷水ノ過飲感胃腸癖等ヨリ發生スルモノニシテ之ニ罹リタルトキハ前肢ニテ地ヲ掻キ或ハ伏臥セントシ又ハ後肢ヲ以テ腹部ヲ打チ頻リニ尾ヲ揮ル等煩悶スルヲ以テ知リ得ヘシ此ノ疾病ハ甚シキハ數時間ヲ出テスシテ斃ルヽコトアルモノナレハ最モ能ク注意シ前述ノ如キ景況ヲ認メタル時ハ直チニ上官ニ報告シ後束藁ヲ以テ腹部ヲ強ク揉ミ要スレハ牽運動ヲ爲スヘシ而シテ脫糞スルニ至レハ稍々輕快ニ趣キタルモノナリ

二、感冒ハ發汗後束藁手入ノ不充分ナルカ或ハ運動後直チニ鞍ヲ脫シ手入ヲ爲ササ

ル場合又ハ既ニ於ケル蹄風侵入等ニヨリ發生スルモノニシテ感冒ニ罹リタル馬ハ概ネ咳チ爲シ鼻汁チ流スチ以テ之ヲ知リ得ヘシ之ニ對スル手當ハ寢藁ヲ充分ニ與ヘ毛布チ被ヒ常ニ溫暖ナラシムルニ在リ

三、蹄叉腐爛ハ蹄叉溝ヨリ惡臭ノ膿チ分泌シ遂ニ蹄叉チ融解シ劇症ニアリテハ肉部ニ達シ跛行スルニ至ル其原因ハ手入不良ニシテ馬糞等ノ蹄裏ニ滯溜スルカ又ハ運動不足ヨリ生ス故ニ之レニ罹リタルトキハ成ルヘク休養セシムルコト無ク蹄チ清潔ニ保チ患部チ薄キ鹽水ニテ洗ヒ「タール」チ塗リ又ハ砂馬房ニ軟容スヘシ

四、息勞ハ迅速又ハ劇烈ナル運動ノ爲呼吸チ促迫セシムルニヨリテ發生スル慢性無熱ノ病ニシテ劇症ニアリテハ其際肛門後方ニ突出スルニ至ル之カ手當トシテ冬期ハ溫暖ニ夏期ハ淸潔ニ保チ榮養分ニ富ミ且ツ消化シ易キ食物ヲ與ヘ寢藁チ食フコトチ禁スレハ大ニ病症ヲ輕減シ輕役ニ服セシムルコトヲ得ルコトアリ

五、胃腸加答兒ハ痂痛ト略同一ノ原因ニ依リテ起リ舌荒レ食慾減シ下痢又ハ便秘ヲ發ス若下痢ヲセサル時ハ糞塊大小不同ニシテ往々粘液ヲ被ルコトアリ之カ爲メ消化シ易キ食物チ與ヘ輕易ナル運動ヲ行ヒ下痢スルモヘハ腹部チ溫包スヘシ

六、繫韁ハ主トシテ繫門部ニ生スル皮膚病ニシテ局部ノ手入不完全ニシテ即チ泥土ノ汚染濕潤若ハ垢ノ梳拭不全削蹄ノ過失及護蹄ノ懈怠疥癬虫等ニ依リテ起ルモノニシテ初メハ赤色ヲ呈シ腫脹シテ疼痛アリ次テ其部ニ小水泡ヲ生シ終ニ破潰シテ帶黃色ノ液チ滲出シ皮膚厚變シテ龜裂チ來ス之ニ罹リタル時ハ「ワセリン」ノ如キ油類ヲ塗リ塵ノ入ラサル如ク繃帶シ常ニ繫ノ淸潔ニ勉ムヘシ

七、骨軟症ハ初期ニハ飼食ノ時間ヲ要スルカ或ハ食慾減シ榮養不良運步强硬トナリ遂ニ跛行シ顏骨及下顎ノ骨腫等ヲ現ハスニ至ル斯クノ如キ馬ニ對シテハ特ニ取扱ヒヲ叮嚀ニシ穀食チ減シ靑草ヲ與ヘ爲シ得レハ放牧スルヲ可トス

八、轉移ハ四肢ノ關節殊ニ球節冠關節ニ發シ易ク腫キ或ハ倒ルヽ等ニ依リテ起リ跛行ヲ呈シ關節腫脹シ熱チ伴フモノナリ初期ニ於テハ冷却法ヲ施スヲ可トス

九、蹄葉炎（蹄充血）ハ蹄ノ全部ニ熱及痛ヲ生シ重症ノ跛行ヲ呈スル疾病ニシテ其原因ハ勞役過度ナルカ又ハ濃厚飼料ノ暴食或ハ裝蹄ノ不良長途ノ輸送等ニ基クモノナリ之カ救急法ハ晝夜ノ別ナク冷水ニテ冷シ穀類チ禁シテ草チ與ヘ水チ充分飲マシムルニアリ

十、熱射病及日射病ハ共ニ夏期炎熱ノ日ニ於テ過度ノ勞働或ハ水與ノ不足等ニヨリテ發スルモノニシテ全身發汗シ呼吸切迫步行跼蹐遂ニハ步行スル能ハサルモノナリ之カ救急法ハ直ニ馬具轡具ヲ脫シ樹蔭屋下等涼シキ所ニ入レ冷水ヲ以テ頭胸部ヲ冷却シ充分水ヲ與フルニ在リ

二　傳染スル疾病

傳染病ニハ炭疽、皮疽、鼻疽、假性皮疽、腺疫、傳染性膿疱皮炎、流行性感冒、胸疫、强直病、傳染性貧血、狂犬病、禿性副行疹、疥癬等ノ種類アリ、炭疽、皮疽、鼻疽、狂犬病及禿性副行疹ハ人ニモ傳染スルヲ以テ危險ナリ凡テ傳染病ヲ發見セハ直ニ上官ニ屆出ヲ爲スヘシ

一、炭疽　俄然發病シ沈鬱戰慄シ體溫上昇、結膜蓋赤色ヲ呈ス行步蹣跚トシテ醉ヘルカ如ク或ハ痼痛症狀ヲ表ハシ血液ヲ混スル下痢ヲ發スルコトアリ數時間以內ニ斃死スルモノ少カラス人及他ノ動物ニモ傳染ス其病毒ヲ食物ト共ニ採ルカ昆虫ノ媒介又ハ創傷ヨリ病毒侵入ニ因リ感染シ本邦各地ニ常在ス

二、鼻疽及皮疽　鼻腔、皮膚等ニ細小結節若ハ潰瘍ヲ生スル最モ危險ナル慢性不治

ノ傳染病ニシテ其ノ主トシテ皮膚ニ發スルヲ皮疽ト云ヒ鼻腔ニ生スルヲ鼻疽ト稱ス觸接又ハ鼻汁、外傷等ノ媒介ニヨリ人馬ニ傳染ス支那、朝鮮、シベリア地方ニ多ク本邦內地ニハ極メテ稀ナリ

三、假性皮疽　皮膚ニ豆大乃至梅實大ノ球腫ヲ生シ次テ近傍ニ球數狀又ハ索狀ノ腫瘍ヲ形成シ終ニ皮膚面ニ開口ス多クハ胸腹壁ヨリ四肢ニ亘リ發生ス觸接ニヨリ傳染スルモノトス

四、腺疫　幼齡ノ馬ニ多ク老齡ニ稀ナリ直接及間接ノ傳染ヲナシ感冒之ヲ誘發ス鼻漏咳嗽アリ顎凹其ノ他ノ淋巴腺腫脹化膿シ體溫昇リ重症ハ嚥下及呼吸困難ヲ起シ又體內各所ニ膿瘍ヲ形成ス病馬ヲ發見セハ直ニ隔離シ鼻汁其ノ他ノ排泄物ノ散亂ヲ防キ消毒ヲ行フヘシ

五、傳染性膿疱皮炎　傳染力大ナル皮膚病ニシテ陰筒、陰囊、帶徑、肩、內股其ノ他ノ皮膚面ニ留針大乃至拇指頭大ノ小疱ヲ發シ帶黃白色ノ痂皮ヲ被ルニ至ル口內ニ發スルモノヲ口炎ト云フ元氣食慾ニハ異常ナシ本病ヲ發見セハ直ニ隔離シ鐵櫛ノ使用ヲ禁スヘシ

六、流行性感冒　鼻洩咳嗽體温上昇ヲ主徴トシ重症ハ呼吸困難ニ陷ル傳染力大ナリ
本病ヲ發見セハ直ニ隔離シ絕對安靜トナスヘシ
七、胸疫　高度ノ熱發シ食慾不振、呼吸促迫ヲ訴ヘ咳嗽頻發シ伏臥ヲ好マス褐色ノ鼻汁ヲ出ス腺疫ト同樣ニ取扱フヘシ
八、强直病(破傷風)　病毒ハ土中ニ存在シ創傷ヨリ感染ス之ニ罹レハ各部ノ筋肉强硬トナリ瞬膜眼球ヲ掩ヒ耳峻立シ口ノ運動困難ニシテ鼻孔濶大呼吸困難トナル運動竝ニ伏臥スルコト能ハス
病馬ハ速ニ暗馬房ニ收容シ靜肅ナラシメ易消化飼料ヲ與ヘ水ハ隨意ニ飲マシメ手入ヲ禁ス
九、傳染性貧血　赤血球ノ減少スル傳染病ニシテ主トシテ昆蟲類ノ擦刺ニヨリ媒介セラル
輕度ノ疲勞食慾元氣不振ヲ初徴トシ次テ突然熱發シ粘膜蒼白色ニ變リ心悸亢進四肢及下腹部等ノ浮腫ヲ生スルニ至ル食慾ニ大ナル變化ナキニ拘ハラス步樣蹣跚榮養不良トナリ衰弱シテ死スルモノアリ早期發見ト榮養快復ニ努メ其ノ保護宜シキヲ得ハ快復スルコトアリ
十、狂犬病　狂犬病獸ノ咬傷ヨリ來リ初期ハ興奮シ狂騷不安トナリ肢ヲ以テ地ヲ搔キ頻リニ嘶キ器物ヲ咬毀シ他ノ人畜ヲ咬蹴スルノミナラス自體ヲ嚙ム或ハ之ニ反シ沈鬱眠狂ノ狀ヲ呈スルモノアリ初メハ食ヲ喫スルモ後ニハ全ク食セス大ニ渴ヲ訴ヘ尿意頻數ニシテ體温四十度若クハ其ノ以上ニ昇リ遂ニ斃ル
十一、禿性黴行疹　觸接又ハ馬具、手入具等ノ媒介ニヨリ傳染スル皮膚病ニシテ初メハ小腫ナレトモ速カニ丸ク脫毛シ輪狀ヲナシテ周圍ニ蔓延ス病馬ハ直ニ隔離シ手入ヲ一時中止スルヲ可トス
十二、疥癬　傳染ノ方法及取扱ハ禿性黴行疹ニ同シ初メ小疹ヲ生シ劇烈ナル痒覺ヲ訴ヘ病馬自ラ局部ヲ咬嚙シ或ハ柱壁等ニ摩擦ス重症トナレハ皮膚厚變シテ皺襞ヲ生ス

三　外傷

外傷ハ軍馬ノ疾病中比較的多數ヲ占メ諸種ノ惡癖ノ原因トナリ或ハ損徴ヲ發生シ軍馬ノ資格ヲ損スルモノナルヲ以テ平素細密ナル注意ヲ拂ヒ之カ豫防ニ勉メサルヘカ

ラス馬體ヲ一見シテ異毛ノ多少ハ其豫ノ愛馬心ノ程度ヲ察知シ得ベシ

十、擦傷ハ寢張(野繋)頭絡ニヨル擦傷、腹帶擦傷、鞍具擦傷、綱傷等アリ

イ、寢張(野繋)頭絡ニヨル擦傷ハ眼球ヲ擦傷スルモノ最モ危險ナリ其原因ハ繋方短カキニ過キ横臥スル際、馬頭稍々釣リ上ケラレ一方ニ傾ク爲メ其方側ノ眼ヲ頬紐ニテ擦ルカ又ハ馬ノ頭絡ヲ脫セントシテ咽紐脫スル能ハス頭絡ノ上部ニ於十二テ眼ヲ壓スルモノ多シ又寢張頭絡新シキ爲メ麻硬クシテ頂鼻梁ノ擦傷ヲ起スコトアリ以上ノ諸原因ヲ除去セハ豫防スルコトヲ得

ロ、腹帶擦傷此原因ハ腹帶ノ緊縮ニ過クルト乘馬、下馬等ノ不良或ハ腹帶ノ硬直セルモノヲ使用スルニ依ル其豫防法ハ腹帶ノ間ノ被毛ノ紛レヲ直シ乘馬、下馬ノ動作ヲ輕捷ニシ腹帶ノ硬直セルモノハ揉ミタル後使用スルニアリ輕度ノ腹帶擦傷ハ柔キ布片ヲ卷キ尙昆布「カモジ」毛ヲ當ツレハ一時病勢ヲ抑ヘ得ルモノナリ

ハ、鞍具擦傷頸上革、緩喉革、袴革等ノ壓迫摩擦ニヨリテ生スル損傷ヲ云ヒ其原因ハ鞍具ノ不適合或ハ裝法及手入不良等ニ基クモノニシテ頸上革擦傷ハ特ニ後

馬ニ最モ多シ之カ豫防法ハ鞍具ヲ常ニ清潔柔軟ニ保チ其裝法ヲ正シク且ツ鞍具ノ當ル部ノ皮膚ハ平素其ノ手入ヲ充分ナラシムヘシ輕度ノモノニシテ乾キタル傷ハ冷却シ濕潤セルモノハ木炭末ノ散布ヲ行ヒ又ハ昆布等ヲ卷キテ使用スルヲ得

ニ、綱傷ハ寢張頭絡又ハ野繋索ヲ跨キ舊位ニ復セントスル際綱ヲ繋ク多クハ後肢ニ纏絡スルニ因リテ生スルモノナリ又頸部ノ手入不良ナルモノハ後肢ヲ以テ掻痒セントスル際誤テ生スルコトアリ其ノ豫防法ハ繋キ方ヲ過長ナラシメサルト厩當番兵ノ監視ヲ嚴ニシ頭部ノ手入ヲ充分ニ行フニ在リ又繋ノ部分ニ布片(古品ノ靴下等)ヲ纏ヒ置クモ良法ナリ

其他狹キ馬房内ニ在リテ回轉スル際腰角、尾根等ヲ擦ルモノアリ或ハ手入不良ニシテ自ラ局部ニ掻痒スル爲メ擦傷ヲ生スルコトアリ

二、刺創　釘又ハ鋭利ナル物體ニ依リテ馬體ノ一部ニ刺創ヲ受ケタル等ノモノニシテ之カ豫防法ハ其原因トナルヘキ物體即チ厩内外及馬場等ニ於ケル釘、木片等ヲ除去スルニ在リ

三、裂創　銳利ナル物體トノ接觸ニ因リ多ク發生スルモノナリ故ニ之カ豫防法トシテ食槽臺、隔木及柱等ノ鋸カノ折損セルモノヲ除キ破壞シ易キ瓶類又ハ罐詰等ヲ放棄セサル樣注意スヘシ

四、咬創　咬癖アル馬ニ依リテ生スルモノナレハ此ノ癖ノ矯正ニ勉メサルヘカラス

五、挫傷　挫傷ノ豫防法左ノ如シ

イ、厩出入ノ際急度ノ回轉ヲ行ハサルコト

ロ、滑走シ易キ場所ハ徐行スルコト

ハ、放馬セシメサルコト

ニ、滑走顚倒ヲ防ク手段ヲ講スルコト

ホ、伸暢セル歩度ニテ急激ノ回轉ヲ行ハサルコト

ヘ、恐怖スル馬ノ馴致ニ努ムルコト

六、鞍傷　鞍傷ハ行軍中最モ多發スルモノナリ皮膚一部ノ腫脹、表皮剝脫等ヲ呈スルモノ騎手ノ姿勢不良等ニ依リ起ルモノナレハ此ノ癖ノ矯正ニ勉メサルヘカラス

ニシテ重症ハ大ナル膿竈ヲ形成ス之カ豫防法トシテハ鞍ノ適合ヲ檢シ毛布ノ皺被毛ノ膠着、鞍ト馬背トノ間ニ異物ノ附着シ居ラサルヤ等ニ注意シ鞍ヲ正シク裝シ裝具左右ノ重量ヲ等シクスヘシ又馬上ノ姿勢ヲ正シクシ睡眠セサルコトニ注意スヘシ

七、蹄冠蹯傷　自己或ハ隣馬ニ蹄冠ヲ踏マルヽニ因リ生スルモノニシテ馬ノ疲勞馭者ノ不注意及距離間隔ノ不正等其原因ヲ爲ス直チニ繃帶ヲ爲シ土砂ノ侵入ヲ防クヘシ

八、冠膝　馬ノ躓テ倒ルヽニヨリテ膝ニ生スル外傷ニシテ一度之ニ罹レハ治スルモ前肢ヲ弱メ屢々本傷ヲ發スルニ至ル專ラ乘御ノ不注意ニ原因スルコト多キモ又體格ノ不良調教及裝蹄ノ不注意ニ依ルコトアリ故ニ油斷ナク騎坐シ特ニ前肢ノ弱キ馬不整地及降坂等ニ於テ上體ヲ前ニ傾クルコトナク韁ヲ弛メサル樣注意スヘシ而シテ創部僅カニ血液ノ滲出ニ止マルモノハ木炭末ヲ散布シ深ク皮膚ノ破レテ土砂ニ汚レタルモノハ之ヲ淸潔ナラシメ繃帶ヲ施スヘシ

九、蹴傷　他馬ノ蹴癖ニヨリテ生スル損傷ニシテ單ニ腫脹ニ止マルモノヨリ骨折ヲ伴フモノニ至ルマテ其輕重ニ差アリト雖モ通常皮下ノ損傷多キモノトス其ノ程度

ニ從ヒ概ネ冠膝ト同樣ニ手當ヲ施ヘシ腫脹甚シキハ時ハ冷却法ヲ施スヲ可トス之カ豫防法ハ蹴癖アル馬ヲ他馬ニ接觸セシムル際常ニ注意ヲ加ヘ溫和ニ取扱ヒ馴致矯正スルヲ要ス

四、化兵症ノ救急防護

化學兵器中噴嚏劑催涙劑ニ對シテハ馬ハ人間ノ堪エ得サル濃度ヲモ尙ヨク堪エ得ルモノニシテ軍犬軍鳩モ人間ノ數倍抵抗力ヲ有スト然レ共窒息性劑糜爛劑ハ共ニ危險多キヲ以テ之等ニ對シテハ左ノ救急防護ヲ必要トス

イ、防護法

馬用防毒面ヲ裝着スルヲ最モ安全トス若シ之ヲ携行セサル時ハ馬足ヲ利用シテ風上ノ安全地帶ニ移動スルカ或ハ麥袋ニ青草又ハ干草ヲ入レタルモノヲ水ニ浸シ覆面ノ代用トナスヘシ

ロ、應急處置

中毒馬ヲ速ヤカニ危險地域ヨリ離脫セシメ且出來得ル限リ安靜ニ保チ毛布ヲ以テ馬體ヲ溫包シ獸醫ノ診療ヲ受クヘシ

馬ハ瓦斯吸入後早クモ三時間ヲ經サレハ病狀ヲ現ハササルヲ以テ特ニ此ノ點ニ注意スルヲ要ス

二、糜爛劑

イ、防護法

被害ノ危險最モ多キ四肢ノ下部ヲ保護スル爲メ馬四防毒脚袢又ハ之ニ準スル防毒裝置ヲ施スヘシ

本劑ハ馬ノ眼、咽喉、肺等ニ對スル障害ハ比較的輕キモ狀況之ヲ許セハ馬用防毒面ヲ裝スルヲ可トス

ロ、應急處置

糜爛劑ノ附着セル部位ニハ可及的速ニ漂白粉又ハ除毒粉ヲ用ヒ消毒スルモノトス之カ實施ノ細部ニ就テハ省略ス

第九節　損徵ノ種類原因及豫防法

損徵ハ馬ノ能力ヲ減スルモノニシテ一度發生シタル後ハ容易ニ恢復セサルモノナリ

一　軟腫ニハ球節軟腫、飛節軟腫、膝軟腫、球腱軟腫等アリ多クハ演習後ノ手入不良ナル爲メ生スルモノニシテ甚シキモノハ跛行ヲ呈ス其豫防法ハ演習後ノ手入ニ際シ柔軟ナル藁ヲ以テ綿密ニ軟腫ノ生スル部ヲ按摩スルニアリ

二　骨瘤ニハ趾骨瘤、管骨瘤、飛節内腫等アリ骨瘤ハ其部位ニヨリ跛行スルコトアリ甚シキモノハ蹇馬トナル其原因ノ主ナルモノハ過激ノ運動及外傷等ニシテ多クハ骨膜炎ト稱スル疾病ノ結果ナリ故ニ其原因ヲ除キ演習後ノ手入ヲ充分ニスヘシ

三　腰角缺損腸骨外角ノ骨折ニシテ衝突或ハ打撲ニヨリテ生ス往々運動ニ障害アルモノアリ之カ豫防ハ馬房ノ出入ニ際シ馬ヲ倒サヾル如ク注意シ尚放馬ヲ嚴ニ戒ムヘシ

四　瘢痕

一、冠膝痕ハ冠膝ノ痕ニシテ前肢ノ弱キヲ示ス

二、交突痕ハ速歩ニヨリ左右一側或ハ兩側交互ニ衝突シテ生シタル創痕ヲ云フ交突ハ疲勞スレハ其ノ度ヲ增加スルヲ常トス先ツ裝蹄ニヨリテ矯正シ疲勞ヨリ來ルモノハ豫防ノ處置（革網毛布片等ヲ）ヲ球節部ニ纏フ）ヲ球節部ニ施スヲ可トス新馬ハ之ニ羅リ易キヲ以テ特ニ注意スルヲ要ス

第十節　護蹄上ノ注意

蹄ヲ不良ナラシムル原因ハ護蹄法ノ懈怠ニ在ルモ蹄ノ手入及運動ノ不適當ニ因ルモノ亦尠シトセス保護上注意スヘキ件左ノ如シ

一　蹄ノ乾燥ハ蹄質ヲ脆クシ蹄形ヲ不良ナラシムル等其害大ナリ故ニ蹄ヲ水ニテ洗ヒ僅カニ乾クヲ待チテ蹄油ヲ塗リ適度ノ水分ヲ保タシムヘシ乾燥著シキ當地ノ如キハ特ニ之カ實施ヲ確實ニシ尚蹄質不良ノモノニハ塗油ノ回數ヲ多クスヘシ然レトモ過度ニ濕潤スルノ虞アルトキハ豫メ蹄油ヲ塗リテ之ヲ防クヘシ蹄油ヲ塗ルニハ左ノ注意ヲ要ス

一、蹄ヲ清潔ニシタル後油ヲ塗ルコト

二、油ヲ多量ニ塗リ塵埃ノ附着ヲ促サヽルコト

三、蹄底、蹄叉ニ充分塗リ然ル後蹄壁ニ及ホスヘシ此ノ際蹄冠ニ油ヲ着ケサル樣注意スヘシ

二　演習間休憩アル毎ニ檢査ヲ行フヘシ落鐵ハ蹄ヲ不良ナラシムル一大原因ナリ蹄ノ

檢査法次ノ如シ

鐵唇ハ固着シアリヤ釘節（釘ノ蹄壁ニ現ハレタル部）ハ確實ニ屈折シテ正シク一蹄ニ六個又ハ八個アルヤ否ヤ　次ニ蹄ノ裏ヲ檢査シ釘頭（蹄鐵ノ下面ニ現ハレタル數）ノ數正シク六個又ハ八個アルヤ鐵ノ弛ミ居ラサルヤ又裏面ニ石其他ノ異物挾マリ居ラサルヤヲ檢ス

第十一節　馬使用役上ノ注意

馬ハ運動性ノ動物ナルカ故ニ日々適當ノ運動ヲ課スルコト最モ必要ナリ從ヒ休日ト雖モ健康ニ異狀ナキ限リ必ス適度ノ運動ヲ行ハサルヘカラス然レトモ使役過度ニ失シ或ハ使役ト飼養トノ調和宜シキヲ得サル時ハ馬ヲシテ疲勞衰弱セシメ榮養モ漸次不良トナリ終ニ軍役ニ耐ヘサルニ至ルモノナリ今使役ニ關スル注意事項ヲ速フレハ概ネ左ノ如シ

一　馬ノ使役ハ飼與後少クモ一時間ヲ經過セサルヘカラス但シ少量ノ飼與ハ此ノ限リニ非ラス

二　馬ノ使役ハ始メト終リトニ於テ緩徐ナルヲ要ス

三　強健法不充分ナル馬殊ニ新馬ハ劇シキ勞働ニ服セシムヘカラス

四　歩度ノ配合上常歩ハ五分以内ニ減セサルヲ可トシ速歩ハ一回十五分ヲ越エサルヲ要ス駈歩ハ體力ヲ消耗スルコト最モ多キヲ以テ短距離ニ於テ短時間ニ限リ行フ可キモノトス

五　昇坂路ニハ比較的迅速ナル歩度ヲ採リ得ルモ降坂路ニハ緩徐ナル速度ヲ採ルヘシ

六　馬ノ使役中差支ヘ無キ限リ三十分以上ノ休止ニハ脫鞍スルヲ可トス又各小休止中轡具ノ觸ルヽ部分ハ濕雜巾ヲ以テ汗及塵埃ヲ拭キ採ルコト四肢殊ニ腱部ハ束藁ヲ以テ擦ルコト必要ナリ

七　激動後直ヲニ休憩セシムルコトナク先ツ常歩ニ移シ呼吸ノ安靜ヲ待ツヘシ此際徒歩牽馬ハ特ニ利アリ脈搏ノ極度ハ一分間八、九十呼吸ノ極度ハ一分間約百三十回トス此レ以上ニ至レハ危險ナリ

八　夜間ノ行進ハ特別ナル場合ノ外ハ速歩、駈歩ヲ行フヘカラス

九　馬使役中ハ常ニ馬具ノ裝著ニ注意セサルヘカラス鞍ハ前位ニ失スル時ハ鬐甲ヲ壓シテ鞍傷ノ原因トナリ又前肢ノ運動ヲ妨ケテ冠膝ヲ起シ易ク後位ニ失スル時ハ腰ヲ

壓シテ運動ノ自由ヲ束縛シ永ク之ヲ連續スルトキハ膝ノ强硬ヲ來スニ至ルモノナリ

十　使役後ニハ四肢及馬具ノ接觸部ヲ充分ニ手入スヘシ

第十二節　有毒植物ノ種類

馬ハ生來有毒植物ヲ鑑別シテ之ヲ食セサル官能アリト雖軍馬ハ常ニ干草ニテ飼養セラルルヲ以テ動モスレハ其官能衰ヘ有毒植物ヲ食シ中毒ヲ起スコトアリ有毒植物ノ主ナルモノ附圖第　ノ如シ

第十三節　廐ノ注意

一　廐ハ屢々其內外ヲ掃除シ常ニ乾燥シ特ニ秣棚、飼槽臺ヲ淸潔ニシ寢藁ヲ散サス尿ヲ留メス糞便ハ直チニ取除キ臭氣ヲ止メサルコトニ注意スヘシ

二　窓戸ノ開閉ヘ必ス規定ノ通リ實施シ空氣ノ流通ヲ適當ナラシムヘシ蓋シ馬ハ多量ノ空氣ヲ要シ且不潔ノ空氣ニ堪ヘ難キモノナレハナリ

三　馬若シ廐內ニ在ラサル時ハ窓ヲ開キ乾燥セシムヘシ廐內ニ於テ妄リニ水ヲ使用ズヘカラス

寢藁ハ每朝汚シタル分ヲ取除キ其他ハ所定ノ場所ニ出シテ乾カスヘシ寢藁ハ各馬房ニ平均ニ入レ其ノ上ニ新藁ヲ敵クヘシ但シ天候季節等ニ依リ寢藁ノ敷詰ヲ便トスル場合ニハ屢々汚レタル分ヲ取除キ其上ニ新藁ヲ布クモノトス

五　馬具ハ使用後叮嚀ニ手入ヲ爲シ所定ノ位置ニ整頓シ置クヘシ鞍下毛布ハ日光ニ曝シ塵ヲ拂ヒ疊ミ置クヘシ此等ノ淸潔整頓セルハ其隊ノ愛馬心ノ旺盛ナルヲ表證スルモノナレハ特ニ留意スヘシ

六　廐ニ於テハ特ニ火災ノ豫防ニ注意スヘシ廐及其周圍ニ於テハ裸火ヲ用フヘカラス又喫烟ヲ禁ス

七　非常鎌ハ危急ノ際寢張頭絡ヲ切ルニ使用スルモノナルヲ以テ其置場所ヲ承知シ置クヘシ

第十四節　陸軍豫備貸付馬

一　每年秋季演習終了後（演習ニ參加セサルモノハ十一月）各隊除役馬中四年四月以上軍用ニ堪ユル見込アル馬ヲ民間ニ貸付シ指定期間其ノ馬ヲ飼養管理シタル時ハ其ノ者ニ無償ニテ附與スルコトヲ得

二　馬ノ貸付ヲ受ケントスル者（在營下士官ヲ除ク）ハ七月末日迄ニ主任長官宛願書ヲ市町村長ニ差出スヘシ

三　在營下士官（借受希望ノ年ニ退營スルモノニ限ル）ニシテ貸付ヲ受ケントスル者ハ七月末日迄ニ退營後居住セントスル地ノ所管長官宛願書ヲ所屬部隊長ニ差出スヘシ

四　借受人ノ心得ヘキ主ナル事項左ノ如シ

イ、借受人貸付ヲ受ケタルトキハ十日以内ニ受領シタル馬匹名簿寫ヲ添ヘ現住地ノ市町村長ニ屆出ツヘシ

ロ、貸付馬ハ轉貸シ又ハ擔保ニ供スルコトヲ得ス

ハ、戰時又ハ事變ニ際シ貸付馬ノ返還ヲ命セラルヽコトアリ

ニ、師團長ヨリ演習ノ爲メ一年ヲ通シ三十日以内引上ヲ命セラルヽコトアリ

ホ、地方馬檢査等ノ場合ニハ檢査ヲ受クルモノトス

ヘ、貸付馬ニ異常又ハ變動アル場合ハ直ニ屆出ツルモノトス

第十五節　在鄉軍人ノ地方馬ニ對スル注意

一　戰時所要軍馬ノ大部分ハ地方馬ニ依リ充足セラルヽモノナルヲ以テ戰時軍ノ活動力ハ其ノ能力如何ニ依リテ左右セラルヽモノナリ故ニ地方馬ノ素質ヲ改良シ且ツ之ニカ保育ニ力ヲ盡スハ戰時ニ於ケル軍ノ戰鬪力ヲ增進スル所以ナリ在鄉軍人特ニ乘馬隊ニ服務シタルモノハ直接又ハ間接ニ地方馬ノ取扱ヲ改善シ能力增進ヲ計ルコトニ努メサルヘカラス

二　地方馬取扱ニ就キ注意ヲ要スル事項概ネ左ノ如シ

イ、温和ニ馬ヲ取扱ヒ飼方ト手入トヲ十分ニシ殊ニ蹄ノ保護ニ注意シ時期ヲ誤ラス必ス改裝又ハ削蹄ヲ爲スコト

ロ、厩ヲ清潔ニシ其ノ保温ト換氣トニ注意スルコト

ハ、飼養者職業ノ關係上馬ヲ使役セサル時期ニ於テモ連日厩ニ繫養スルコトナク適度ノ運動ヲ課スルコト

ニ、過酷ニ馬ヲ使役シ或ハ無益ノ苦痛ヲ與ヘサルコト

ホ、病馬ノ早期受診ヲ圖ルコト

ヘ、馬ノ出入屆ヲ迅速確實ニスルコト

第十一章　勳章徽章其他褒賞ニ關スル事項

第一節　勳章、徽章、感狀（附圖九其一・二・三參照）

勳章ハ國家ニ功績アル褒賞スル爲ニ設ケラレタル名譽ノ表彰ナリ

從テ授ケラレタル勳章ニ對シテハ相當ノ特權ト待遇トヲ與ヘラルルモノナリ

勳章ニハ次ノ五種類アリ

一　金鵄勳章　神武天皇ノ定メ給ヒシ明治二十三年此ノ勳章ヲ創設シ武功拔群ナル軍人ニ賜ヒ其忠勇ヲ奬勵アラセラルルノ叡旨ニ出テタルモノニシテ軍人ノ最モ名譽トスル勳章ナリ

功級ニ應シ終身年金ヲ下賜セラル

功一級ヨリ功七級ニ至ル

二　大勳位菊花章　皇族及國家ニ最モ偉勳アル者ニ賜ハリ次ノ二種アリ

大勳位菊花章頸飾（我國最高ノ勳章）

大勳位菊花大綬章

三　旭日章　平時戰時ヲ問ハス國家ニ對シ勳功著シキ者ニ賜ハリ勳一等ヨリ勳八等ニ至ル其等級左ノ如シ

勳一等旭日桐花大綬章

勳二等旭日重光章

勳一等旭日大綬章

勳三等旭日中綬章

勳四等旭日小綬章

勳五等雙光旭日章

勳六等單光旭日章

勳七等青色桐葉章

勳八等白色桐葉章

四　瑞寶章　平戰兩時ヲ問ハス國家ニ對シ勳勞アル者ニ賜フ（此ノ勳章ハ婦人ニモ賜フ）

勳一等ヨリ勳八等ニ至ル

五　賓冠章　勳勞アル婦人ニ賜フ

勳一等ヨリ勳八等ニ至ル

勳章ニハ種類每ニ略授ト稱スルモノアリ

六　從軍記章　外國トノ戰爭ニ從軍シタル軍人、軍屬ニ勳功ノ有無ヲ論セス凱旋後從

軍ノ徽ニ之ヲ賜ハル、又軍人、軍屬以外ノモノニテモ其戰役ノ軍務ニ從事シ或ハ之ヲ幇助シタル者ニ賜ハルコトアリ

從軍記章ノ種類左ノ如シ

1. 明治七年從軍記章（台灣ノ役）
2. 明治二十七八年徒軍記章（日淸戰役）
3. 明治三十三年從軍記章（北淸事變）
4. 明治三十七八年從軍記章（日露戰役）
5. 大正三年乃至九年戰役從軍記章（日獨戰役及西伯利亞並北滿事件）
6. 昭和六年乃至九年從軍記章（滿洲事變）

七

記念章　其種類概ネ次ノ如シ

1. 憲法發布記念章
2. 大婚二十五年祝典之章
3. 皇太子渡韓記念章
4. 韓國併合記念章
5. 大禮記念章（大正天皇及今上天皇陛下御即位ノ盛儀ヲ記念セルモノ）
6. 滿洲國建國功勞章

八

戰捷記章　大正三年乃至九年戰役ノ同盟及聯合國勝利記念ノ國際表彰トシテ特ニ設ケラレタルモノナリ

此ノ記章ハ大正三年八月二十三日ヨリ大正九年一月九日迄ノ間ニ於テ戰役ニ關スル軍務ニ從事シ功績顯著ナル戰斗員ニ授與セラル

九

軍人傷痍記章　軍人テ戰斗又ハ公務ニ因リ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ不具又ハ癈疾トナリタル者ニ授與サル而シテ甲種（戰傷）乙種（公傷）ノ二種類アリ

十

總テ勳章徽章ヲ有スル者左ノ項目ニ當ルトキハ褫奪セラル

1. 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者
2. 賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者
3. 素行修マラス帶勳者タルノ面目ヲ汚シタル者

十一

感狀　軍人又ハ軍隊戰地ニ於テ左ノ各號ニ當ル所爲アルトキ軍司令官、獨立師團長、司令長官、獨立司令長官其他大本營ニ直屬スル團體長ハ之ニ感狀ヲ與ヘ其名

譽ヲ全軍ニ全示セラル

1. 敵前ニ於テ抜群ノ勳功ヲ顯ハシ其行爲軍人ノ模範トスヘキトキ
2. 特別ノ任務ヲ負ヒ危險ヲ冒シテ敵前ニ行動シ爲ニ我軍ニ勝利ヲ得シメタルトキ
3. 戰斗中長官ノ危急ヲ救ヒ敵ノ將官ヲ擒ニシ又ハ敵ノ軍旗ヲ奪ヒ取リタルトキ
4. 前各號ニ準スヘキ抜群ノ武功アリタルトキ

十二 徽章 其種類概ネ左ノ如シ

元帥徽章
侍從武官長徽章
侍從武官徽章
陸軍大學校卒業徽章
陸軍飛行機操縱術修得徽章
戰時補助憲兵徽章
在鄉軍人徽章
赤十字社社員徽章

十三 下士勳功章 營內居住ノ下士官任官後六年以上勤續シ勤務精勵品行端正學術優秀ニシテ下士官ノ儀表タル者ニ與ヘラル

十四 褒賞徽章

1. 野戰砲兵照準徽章
2. 馭術徽章
3. 砲兵觀測徽章
4. 砲兵通信徽章
5. 小銃徽章
6. 輕機關銃徽章
7. 歩兵砲照準褒賞徽章
8. 騎兵馬術徽章

十五 精勤章 營內居住ノ現役兵（動員又ハ臨時編成部隊ニ編入サレタル者 短期現役兵、下士官ノ勤務ヲ命セラレタル者、下士官候補者タル學生ヲ除ク）ニシテ品行方正、勤務勉勵ナル者ニ附與セラル而シテ入營後六ケ月以上ヲ經過シタル後爾後五

ケ月以上經過シタル後ニ附與セラレ同一人ニシテ累次增與サルルコトヲ得
精勤章ヲ有スル者左記ノ一ニ該當スルトキハ一個又ハ數個ノ精勤章ヲ褫奪セラルル
1. 刑罰又ハ懲罰ニ處セラレタルトキ
2. 品行及勤務ノ狀態精勤章ヲ有セシムルニ適セスト認メタルトキ
精勤章ハ左ノ場合ニハ返納スルモノトス
1. 下士官ニ任セラレタトキ
2. 下士官ノ勤務又ハ憲兵上等兵ヲ命セラレタルトキ
3. 下士官候補者タル學生トナリタルトキ
4. 動員又ハ臨時編成ノ部隊ニ編入サレタトキ
5. 除隊ノトキ

十六 表彰狀 下士官兵ニシテ一般ノ儀表タルヘキ行爲アリタル者ヲ特ニ表彰スル爲
授與セラルルモノナリ

十七 褒賞休暇 營內居住ノ兵ニシテ表彰狀ヲ授與セラレタル者又ハ之ニ該當セサル
モ一般ノ模範タルヘキ特殊ノ行爲アリタル者ニ對シ臨機褒賞スル爲附與スルモノナ

第二節 恩賞進級

一 恩給ノ種類

普通恩給 (年金)
增加恩給

一時恩給 (一時金)
傷病恩給

扶助料 (年金)
一時扶助料 (一時金)

二 恩給ヲ受クルモノノ資格

普通恩給 (將校以下ニ給セラル)
1. 十二年以上現役ニ服シタルモノ
2. 平戰時公務ノタメ傷病疾病ヲ受ケ現役ニ堪ヘサルモノ

增加恩給 (將校以下ニ給セラル)

1. 公務ノタメ傷痍疾病ヲ受ケ不具癈失トナリタルモノ
傷痍賜金（下士官以下ニ給セラル）
1. 下士官以下ノモノニシテ公務ノタメ傷病ヲ受ケ又ハ疾病ノ爲メ不具癈失ノ程度ニナラサルモノ
2. 退職後一年以内ニ一種以上ノ兵役ヲ免セラレタルモノ
扶助料（將校以下ノ遺族ニ給セラル）
1. 普通恩給ヲ受ケル資格ノアルモノ又ハ現ニ普通恩給ヲ受ケアルモノ死亡シタル時其遺族ニ給セラル
一時扶助料（下士官以上）
1. 下士官以下ノモノ在職三年以上十三年未滿ニテ在職中ニ死亡シタ時遺族ニ給セラル

三 年金一時賜金　特別ノ功績アリテ勳章ヲ賜ハリタル者ニハ年金又ハ一時金ヲ賜フ

四 善行證書　下士官以下現役中品行方正、勤務勉勵ニシテ學術技藝（職務）ニ熟達スル者ニハ滿期若ハ退營ノトキ聯隊長之ヲ附與ス但シ在營八ケ月未滿ノ者及一等症患者ニテ該傷病疾病ノ爲除役セラルル以外ノ事故ニ由リ現役ヲ免セラルル者ニハ附與サレス而レ共假令懲罰令ニ依リ處分ヲ受ケタルモノト雖モ改悛ノ狀著シキモノニハ附與セラルルコトアリ

五 歸休　前項ノ資格ヲ備フルモノノ内優秀ナル者ハ現役一年ニシテ歸休ヲ命セラルヽコトアリ

六 進級　二等兵ノ一等兵ニ進級スルハ入營後概ネ六ケ月ヲ越ヘ優秀ナルモノヨリス一等兵ノ上等兵ニ進級スルハ現役約一ケ年ヲ過キ優秀ナルモノヨリス上等兵ニシテ優秀ナルモノハ伍長勤務ヲ命セラルヽコトアリ

七 下士官適任證　伍長勤務若ハ下士官タルノ技能ヲ有スル上等兵ニ對シ除隊ノトキ附與セラル計手、縫工長、靴工長、看護長、蹄鐵工長、火工長、靴工長、木工長、鍛工長適任證書ハ上等兵、上等看護兵、工務兵ニシテ各々適任ナル者除隊ノトキ附與セラル而シテ此ノ證書ヲ附與セラルル工務兵ハ此際上等兵ニ進メラル

八 士官勤務適任證書　曹長ニシテ志操確實、品行方正、勤務勉勵其ノ他成績優秀ナルモノニ附與サル

第十二章　刑罰ニ關スル事項

第一節　陸軍刑法

陸軍刑法ハ軍紀ヲ維持シ軍隊ヲ保護スルタメ特ニ設ケラレタル法律ニシテ其刑頗ル重シ一度此刑法ニ觸ルルトキハ啻ニ軍人ノ本分ヲ誤リ軍隊ノ安寧ヲ害スルノミナラス延テ我カ陸軍ノ榮譽ヲ汚スニ至ル故ニ名譽ヲ尚ヒ義務ヲ重スル軍人タル者ハ平素戒心シ誓テ之ニ違背セサルコトヲ期サルヘカラス

一、刑ニハ左ノ五種類アリ

死刑

無期懲役

無期禁錮

有期懲役

有期禁錮

二、罪ノ種類

1. 叛亂ノ罪

黨ヲ結ヒ兵器ヲ執リ反亂ヲナシタル者及反亂ヲ爲ス目的ヲ以テ黨ヲ結ヒ兵器彈藥其他軍用ニ供スル物ヲ劫掠シタル者（陸軍刑法自第二十五至二十六條）

2. 擅權ノ罪

命令ヲ待タス故ナク戰斗ヲ爲シタル者（同第三十八條）

3. 辱職ノ罪

イ、哨兵故ナク守地ヲ離レタルトキ（同第四十七條）

ロ、哨兵睡眠又ハ酩酊シテ其職務ヲ怠リタルトキ（同第四十八條）

ハ、衞兵、控兵、巡察斥候其他警戒又ハ傳令ノ勤務ニ服スル者故ナク勤務ノ場所若ハ隊伍ヲ離レタルトキ又ハ到ルヘキ場所ニ到ラサルトキ（同第四十九條）

ニ、故ナク規則ニ依ラスシテ哨兵ヲ交代セシメ其他哨令ニ違反シタル者（同第五十條）

ホ、戰時軍中又ハ戒嚴地境ニ在リテ斥候巡察又ハ偵察ノ勤務ニ服スル者虛僞ノ報

告ヲ爲シタルトキ（同第五十一條）

ヘ、健康ヲ害スヘキ飲食物ヲ配給シタルモノ（同第五十四條）

ト、從軍ヲ免レ又ハ危險ナル勤務ヲ避クル目的ヲ以テ疾病ヲ作爲シ身體ヲ毀傷シ其他詐僞ノ行爲ヲ爲シタル者（同第五十五條）

4. 抗命ノ罪

イ、上官ノ命令ニ反抗シ又ハ之ニ服從セサル者（同第五十七條）

ロ、暴行ヲ爲スニ當リ上官ノ制止ニ從ハサル者（同第五十九條）

5. 暴行脅迫ノ罪

イ、上官ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者（黨與又ハ兵器兇器ヲ用ヒテ暴行脅迫シタル者モ亦同シ）（同自第六十條至六十二條）

ロ、哨兵ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者（同右）（同自第六十四條至六十七條）

ハ、上官又ハ哨兵以外ノ陸軍軍人其職務ヲ執行スルニ當リ之ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者（同右）（同自第六十八條至六十九條）

ニ、多衆聚合シテ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者（同第七十條）

6. 侮辱ノ罪

上官又ハ哨兵ヲ其面前ニ於テ侮辱シタル者（同自第七十二條至七十四條）

7. 逃亡ノ罪

イ、故ナク職役ヲ離レ又ハ職役ニ就カヌ者（黨與シテ犯シクル者モ亦同シ）（同自第七十五條至七十六條）

ロ、戰時軍中又ハ戒嚴地ニ在リテ三日ヲ過キタルモノ（同第七十五條ノ二）

其他ノ場合ニ於テ六日ヲ過キタルモノ（同第七十五條ノ三）

ハ、敵ニ奔リタル者（同第七十七條）

8. 軍用物損壞ノ罪

軍用物ヲ燒燬又ハ損壞シタル者（同第八十三條）

9. 掠奪ノ罪

イ、戰地又ハ帝國軍ノ占領地ニ於テ住民ノ財物ヲ掠奪シタル者（同第八十六條）

ロ、戰場ニ於テ戰死者又ハ戰傷病者ノ衣服其他ノ財物ヲ褫奪シタル者（同第八十七條）

10　俘虜ニ關スル罪

イ、俘虜ヲ看守又ハ護送スル者其俘虜ヲ逃走セシメタルトキ（同第九十條）

ロ、俘虜ヲ逃走セシメタル者（同第九十一條）

ハ、俘虜ヲ逃走セシムル目的ヲ以テ器具ヲ給與シ其他逃走ヲ容易ナラシムヘキ行爲ヲ爲シタル者（同第九十一條）

11　違令ノ罪

イ、哨兵ヲ欺キテ哨所ヲ通過シ又ハ哨兵ノ制止ニ背キタル者（同第九十五條）

ロ、在鄉軍人故ナク召集ノ期限ニ遲レタルトキ（同第九十六條）

ハ、兵役ヲ免ルル目的ヲ以テ疾病ヲ作爲シ身ヲ毀傷シ其他詐僞ノ行爲ヲ爲シタル者（同第九十七條）

ニ、戰時軍中又ハ戒嚴地境ニ在リテ軍事ニ關スル虛僞ノ命令通報又ハ報告ヲ爲シタルモノ（同第九十八條）

ホ、戰時又ハ事變ニ際シ軍事ニ關シ造言飛語ヲ爲シタル者（同第九十九條）

ヘ、禮砲號砲其他空砲ヲ發スヘキ場合ニ於テ彈丸瓦石其他ノモノヲ裝塡シテ發シタル者（同第百條）

ト、哨兵又衞兵故ナク銃砲ヲ發シタルトキ（同第百一條）

チ、戰時軍中又ハ戒嚴地境ニ在リテ急呼ノ號報アリタル場合故ナク來會セサル者（同第百二條）

リ、政治ニ關シ上書建白其他ノ請願ヲ爲シ又ハ演說著ハ文書ヲ以テ意見ヲ公ニシタル者（同第百三條）

ヌ、服從ノ義務ニ違フヘキ事ヲ目的トシテ黨ヲ結ヒタルトキ（同第百四條）

三　服役ノ場所

陸軍刑法ニヨリ處罰サレタル者ハ徽戒刑務所ニ於テ服役スルモノトシテ罪ノ有無ヲ審判スルハ軍法會議ニ於テ行フ　又陸軍刑法ニ於テハ前項ニ示セル罪ノ外ナルモ陸軍軍人ニシテ一般刑法ニ觸ルヽ罪ヲ犯シタル場合ニハ其ノ罪ノ有無ハ軍法會議ニ於テ審判スルモ適用スヘキ刑法ハ普通刑法ナリ

第二節　陸軍懲罰令

陸軍軍人ニシテ其本分ニ背キ又ハ軍事ノ定則ニ違ヒ其他軍紀ヲ害シ風紀ヲ紊リ其犯行陸軍刑法ノ罰ニ該ラサルトキハ本令ニ依リ之ヲ懲罰ス

一　罰目左ノ如シ（兵ニ關スルモノノミ）

降等　重營倉　輕營倉

右ノ外召集中ノ在鄉軍人及召集ニ依ラス部隊ニアリテ陸軍軍人ノ勤務ニ服スル在鄉軍人ノ外　現ニ服役上ノ義務履行中又ハ陸軍軍人ノ身分ヲ表彰シ得ヘキ服裝ヲ爲ス在鄉軍人ニハ次ノ罰目ヲ適用スル

降等　譴責

二　罰目ノ取扱左ノ如シ

1. 降等　一階級ヲ下サルヽヲ謂ヒ、犯行重キ者又ハ屢々刑罰若クハ懲罰ノ處分ヲ受ケ仍改悛ノ狀ナキモノニ科ス
2. 重營倉　故意ニ係ル犯行ニ科シ其日數一日以上三十日以内トシ營倉ニ錮シ寢具ヲ貸與セス飯湯及鹽ノミヲ給シ演習及教育ノ場合ヲ除クノ外勤務ニ服スルコトヲ禁セラル但シ三日ノ内一日ハ寢具ヲ貸與シ通常ノ糧食ヲ給セラル
3. 輕營倉　過失ニ係ル犯行ニ科シ其日數一日以上三十日以内トシ營倉ニ錮シ演習及教育ノ外勤務ニ服スルコトヲ禁セラル
4. 減給　重營倉ニ處セラレタル者ハ罰期間給料ノ十分ノ八ヲ減セラル　輕營倉ニ處セラレタル者ハ罰期間給料ノ十分ノ五ヲ減セラル
5. 禁足及苦役　重營倉及輕營倉ハ勤務其他ノ必要アルトキハ禁足又ハ苦役ヲ以テ之ニ代フルコトアリ　此ノ場合ニ於テモ重營倉又ハ輕營倉ニ對スル減給ハ行ハル
6. 禁足　重營倉一日ヲ苦役三日　輕營倉一日ヲ禁足二日ニ換算ス
7. 苦役　勤務演習及教育ノ場合ヲ除ク（外營外ニ出セルヲ禁セラル）
8. 譴責　犯行ヲ糺シ將來ヲ戒飭セラルヽヲ謂ヒ、受罰者期滿ツルトキハ中隊長ニ對シ將來改悛ヲ表スルタメ誓言セシム

三　受罰者期滿ツルトキハ中隊長ニ對シ將來改悛ヲ表スルタメ誓言セシム

懲罰ノ目的ハ當人ヲシテ悔悟改悛セシムルニ在ルカ故ニ假令處分ヲ受クルモ自暴自棄ニ陷ルコトナク爾後奮勵努力シ名譽ヲ恢復スルコトヲ心懸クヘシ

一　侮辱職ノ罪（犯例）

○○一等兵ハ昭和九年五月三十日午前零時二十分頃所屬聯隊（留守隊）風紀衞兵裏門歩哨ニ上番シ警戒區域ヲ動哨中同零時五十分頃擅ニ同隊縫工場内研場入口ノ靴箱ニ腰掛ケ銃ヲ手ヨリ放シテ傍ノ板壁ニ立掛ケ休息シ居ル内睡眠ニ陷リ同一時二十分頃折柄巡察中ノ週番士官ニ呼起サルルマテ覺醒セサリキ

右ハ法律ニ照スニ○○一等兵ノ所爲中銃ヲ手ヨリ放シ腰掛ケタル哨令違反ノ點ハ刑法第五十條第三號ニ睡眠シテ職務ヲ怠リタルハ同法第四十八條第二號ニ各該當スルヲ以テ禁錮二ケ月ニ處セラル

二　違令ノ罪（犯例）

○○一等兵ハ昭和三年七月九日日曜日休暇外出先ニ於テ飲酒酩酊ノ餘歸營時限ニ遲レタルニヨリ同隊通用門ヨリ歸隊セント欲シ同門ニ到リ立哨中ノ歩哨ニ對シテ擔所持セル外出證ヲ示シ同哨所ヲ通過セントシタル處歩哨ヨリ外出證ニテハ通用門ノ通過ハ許サレス表門ヨリ通行スヘキ旨ヲ告ケラレ更ニ歩哨ニ對シ內證ニテ通行ヲ許シ呉レト願ヒ依然歩哨ヨリ之ヲ許サヌコト拒マルルヤ其ノ歩度ヲ早メ同所ヲ通過歸隊シタリ

右ハ法律ニ照スニ○○一等兵カ哨兵ノ制止ニ背キタル所爲ハ陸軍刑法第九十五條第一項第三號ニ該當スルヲ以テ禁錮二ケ月ニ處セラル

第十三章　風紀衛兵

衛兵勤務ノ服行ノ厳否ハ直接警戒ノ厳否トナリ影響スル處甚大ナルモノトス故ニ此ノ勤務ニ服スル者ハ能ク其ノ守則ヲ理解記憶シ之カ應用ノ力ヲ養ヒ厳確ニ實行スルヲ要ス若シ勤務ニ怠慢非違アルモノハ勿論此ノ勤務ヲ妨害ズル者アルトキハ刑法ニ依リテ處分セラルヽモノトス

第一節　通則

一　風紀衛兵ハ週番司令ノ指揮ニ屬シ營内ノ取締竝ニ警戒ニ任シ營門出入者ヲ監視スルヲ任務トス其ノ責任ハ重大ニシテ其ノ一擧一動ハ隊内風紀軍紀ノ粛否ヲ表證スルモノナリ故ニ此ノ勤務ニ服スルモノハ熱心勉勵以テ困苦ニ克チ一身ヲ犠牲ニスルモ其ノ任務ヲ完フスルノ精神ナカルヘカラス

二　衛兵勤務ニ服スル兵ニ對シテハ、上官ト雖モ勤務上ニ就キテハ其ノ權ヲ犯スヲ得サル重大ナル職權ヲ有スルモノナレハ厳確ニ職務ヲ勵行シ、又自ラ風紀ノ模範トナリ姿勢、動作、服裝ヲ厳正ニシ諸定則ノ履行ヲ確實ニシ犯スヘカラサル威厳ヲ保ツヘシ

三　苟モ軍人態度ヲ紊リ服裝法ニ違ヒ若ハ軍隊内務ノ諸規定ニ違反スルモノアルトキハ決シテ寛假スルコトナク之ヲ正シ以テ聯隊名譽ヲ保ツコトニ勉ムヘシ

第二節　衛兵一般ノ心得

一　衛兵ノ服裝ハ軍裝（第三裝用ヲ着用シ編上靴ヲ穿ツ）トス

二　控兵ハ常ニ軍裝ヲ整ヘ不時ノ呼集ニ應スル準備ヲ爲シアルヘシ

三　衛兵ハ衛兵所備付書類ノ外書見スヘカラス司令ノ許可アルニアラサレハ決シテ衛舍ヲ離ルヘカラス

四　衛舍内ニアリテハ特ニ靜肅ヲ守リ又衛舍内外ノ清潔ヲ保スヘシ

五　夜間衛兵ノ三分ノ一ハ假眠ヲ許サルヽト雖モ服裝ヲ解キ銃劍ヲ脫スルコトヲ得ス

六　准士官見習士官以上衛舍前ヲ通過スルトキハ衛兵中最初ニ之ヲ認メタルモノハ「敬

六禮」ト呼ヒ現在スルモノハ其ノ場ニ立チテ姿勢ヲ正シ衞兵司令ハ之ニ對シ敬禮ヲ行フヘシ

七 外來人ニ對シテハ懇切叮嚀ヲ旨トシ且速ニ取扱フヘシ司令ノ指圖ニ依リ下士官以上ニ面會ヲ求ムル者ニ對シテハ氏名ヲ尋ネ之ヲ該官ニ通報シテ其指圖ヲ受ケ兵ニ面會ヲ求ムル者ニ對シテハ面會所ニ案内ノ後週番下士官ニ通報スヘシ若シ面會ヲ求メラレタルモノ不在ノトキハ成ルヘク其ノ行先歸營時刻等ヲ聞キ之ヲ告ケ知ラスヘシ

第三節　歩哨ノ一般守則

一 歩哨ハ嚴ニ守則ヲ守リ常ニ耳目ヲ働カシ警戒ヲ怠ルヘカラス

二 歩哨ハ常ニ姿勢動作ヲ正クシ用務ノ外他人ト談話スヘカラス又頭巾ヲ冠ルコトヲ禁ス

三 歩哨ハ雨雪ノトキハ哨舍ニ入ルコトヲ得但シ特ニ警戒ヲ要スルトキ又ハ敬禮ヲ行フ際ハ哨舍ヨリ出スヘシ

四 歩哨ハ衞兵勤務ニ關係アル上官及直屬系統ノ團隊長ニアラサレハ之ニ守則ヲ語ルヘカラス

五 歩哨ハ特ニ定メラレタル場合ノ外哨所ノ位置ヨリ三十歩以外ノ地ニ行動スルコトヲ禁ス

六 歩哨ハ衞兵所又ハ隣歩哨ニ警報セントスルトキハ「氣ヲ付ケ」ト叫ヒ機ヲ失セス電話ヲ使用スル等ノ手段ニ依リ敏速ニ目的ヲ達スルコトニ勉ムヘシ

七 歩哨ハ左ノ場合ヲ除クノ外銃劍ヲ着クヘカラス

一、夜　間

一、警備上必要アルトキ

一、別命アルトキ

八 歩哨ノ敬禮ハ哨所ノ位置ニ於テ之ヲ行フヘシ但シ其ノ位置ニ復スルノ遑ナキトキ又ハ現位置ニ於テ行フモ妨ケナシ

一、表門ノ歩哨ハ所屬部團長聯隊長及准士官見習士官以上ノ引率スル武裝シタル軍隊營門通過ノ際整列ト呼フヘシ

其一　表門歩哨特別守則

一　表門ヲ出入スルモノヲ監視シ其ノ附近ヲ警戒ス

二　出入ヲ許スモノ

イ、指揮者ニ依リ引率セラレタル軍人

ロ、下士官以上及其隨從者

但シ下士官ハ休日以外ノ日及休日ニ於テ外出ノ規定時限以外ニアリテハ公用證外出證明書外泊證明書又ハ營外居住證ノ一ツヲ持ツモノニ限ル

ハ、兵ニシテ公用證、外出證明書、外泊證明書ノ一ツヲ持ツ者及一般休日ノ外出ノ規定時限內ニ在リテハ外出證ヲ持ツ者

ニ、第七師團鳩班員證明書ヲ持ツ者

但シ日朝點呼後ヨリ夕食時限マテ

ホ、憲兵、傳令、郵便電信集配人

ヘ、陸軍所定ノ制服ヲ着用シ又ハ徽章ヲ附ケタル軍屬傭人

ト、見合セ門鑑ト符號スル門鑑ヲ持ツ者

チ、軍部ニ屬スル乘用自動車

リ、特ニ聯隊長ノ許可セルモノ

其ノ他ノ者ハ司令ノ許ニ至ラシム

三　特出ヲ許ス物品

イ、准士官見習士官以上及其隨從者ノ持ツ物

ロ、營外居住證ヲ持ツ聯隊附下士官ノ携行スル軍裝品及日用品

ハ、持出證ニ衞兵司令ノ認印アル物品

四　地方ノ荷馬車、橇、自動車ハ通行ヲ許サス

其二　裏門歩哨特別守則

一　裏門ヲ出入スルモノヲ監視シ其ノ附近ヲ警戒ス

但シ日夕點呼ヨリ起床迄ハ動哨トナリ兵器庫間ヲ警戒ス

二　何時ニテモ出入ヲ許スモノ

イ、指揮者ニ依リ引率セラレタル軍人

ロ、准士官見習士官以上並ニ營外居住證ヲ持ツ者及之等隨從者

ハ、公用證ト將校當番證ヲ持ツ者
ニ、合同火藥庫衞兵ニ服務スル者
特ニ聯隊長ノ許可セルモノ
三　門ヲ開ケアル間出入ヲ許スモノ
イ、合同火藥庫、將校集會所及將馬場ニ往復スル者
ロ、憲兵郵便電信集配人
ハ、陸軍所定ノ制服ヲ着用シ又ハ徽章ヲ附ケタル軍屬傭人
ニ、見合門鑑ト符號スル門鑑ヲ持ツ者及其ノ車馬
ホ、其ノ他ノ者ハ司令ノ許ニ到ラシムル物品
四　持出ヲ許ス物品
イ、准士官見習士官以上及其隨從者ノ持ツ物品
ロ、營外居住證ヲ持ツ聯隊附下士官ノ携行スル軍裝品及日用品
ハ、持出證ニ當番使用者或ハ衞兵司令ノ認印アル物品
五　火災及火藥庫事件等ノ場合ハ電話ヲ以ツテ衞兵所ニ知ラシムルト共ニ最寄リ厩當

其三　營倉歩哨特別守則

一　營倉入ノ者ヲ監視シ異狀アリタル時ハ司令ニ報告ス
二　營倉扉ノ開閉及物品ノ出入ハ司令ノ立會ナケレハ許サス

第四節　風紀衞兵司令服務規定

一　御眞影奉安所ノ奉護ニ任シ其開閉ハ週番司令ニ限ルモノトス
二　金櫃及貴重品箱ニ對スル監視ノ責ニ任シ其ノ開閉ノ責ニ任ス
金櫃貴重品箱ノ開閉ハ之カ擔任者ニ限ル
三　鍵ノ保管ハ左ノ區分ニ依リテ取扱ヒ衞兵所ニ表示スル區分ニ依リ所定ノ場所ニ置キ保管ノ責ニ任ス
1.　甲類ノ鍵（戰用被服庫、戰用糧秣庫、戰用蹄鐵置場、常用被服庫、炊事糧秣庫、馬糧庫、兵器庫（第一第二共）兵器委員室、劇毒藥箱、醫務室劇毒藥箱）ノ授受ハ鍵授受簿ノ交換ニ依ル

2. 乙類ノ鍵（甲類以外ノモノ）ノ授受ニ際シテハ衞兵所備付ノ鍵授受簿ニ記載スル
四 裏門哨舍ニ取付ケアル電話ハ毎上番ニ於テ衞兵交代時及日夕點呼直前ニ於テ歩哨
掛ヲシテ點檢セシムヘシ
五 裏門ヨリ應援ヲ求メタル時ハ控兵ノ半數ヲ衞兵所ニ殘置シ速ニ其ノ門ニ到ルヘシ
六 控兵ハ水吸、石炭運搬、灰捨、掃除等雜用ノ時ハ衞兵所ヲ離ルヽヲ銃ヲ携行セシメサルコトヲ得
七 諸門ノ開閉ニ關シ左ノ通リ定ム

表門開扉	起床時限	閉扉	夕食時限
小門同	夕食時限	同	起床時限
裏門同	起床時限	同	日夕點呼
其ノ他	ノ門ハ准士官以上ノ藤求ニ依リ開閉ス		

第十四章 衞戍勤務

一 通則
一、陸軍軍隊ノ永久一地ニ駐屯スルヲ衞戍ト稱シ當該軍隊ニ於テ其他ノ警備及陸軍ノ秩序軍紀風紀ノ監視並ニ陸軍ニ屬スル建築物等ノ保護ニ任ス旭川衞戍地附圖第十ノ如シ
二、讀戍司令官同副官
1. 旭川衞戍地ニ於ケル衞戍司令官ヲ命セラル
2. 旭川衞戍副官ハ師團副官之ニ任ス
三、衞戍勤務ハ主トシテ衞戍衞兵及衞戍巡察ヲ以テ之ヲ行フ
二 衞戍勤務ニ服スル者ハ左ニ記スル場合ニ非サレハ兵器ヲ用フルコトヲ得ス
一、暴行ヲ受ケ自衞ノタメ止ムヲ得サルトキ

二、多衆聚合シテ暴行ヲ爲スニ當リ兵器ヲ用フルニ非サレハ鎭壓スルノ手段ナキト
キ
三、人及土地其他ノ物件ヲ防衞スルニ兵器ヲ用フルニ非サレハ他ニ手段ナキトキ
衞戍勤務ニ服スル者兵器ヲ用ヒタルトキハ直ニ衞戍司令官ニ報告スルモノトス

三 衞戍勤務ニ服スル者ハ其任務ニ妨ケナキ限リ左ニ揭クル者ヲ逮捕スルコトヲ得又軍人以外ノ犯罪者ト雖モ之カ逮捕ノ爲メ憲兵又ハ警察官ヨリ援助ノ請求アルトキハ之ニ應スルコトヲ得
但シ衞兵司令及其衞兵ノ約半數ハ何レノ場合ニ於テモ衞兵所ヲ離ルヽコトヲ許サス
一、暴行、殺人、逃亡、放火、賭博、强盜、窃盜等ノ現行犯人
二、營內下士兵卒勤務ニ依ラス又ハ規定ニ反シ營外ニ在ル者
總テ逮捕シタル者ハ軍人軍屬又ハ常人タルトニ依リ成ルヘク速ニ憲兵警察官又ハ所屬部隊ニ引渡スヘシ

四 旭川衞戍地ニ於ケル衞戍勤務區分竝ニ任務左ノ如シ

1. 衞戍衞兵

イ、兵器庫衞兵
兵器庫衞兵ハ步兵隊ニテ服務シ師團兵器庫及師團被服糧秣倉庫ヲ監視警戒ニ任ス

ロ、火藥庫衞兵
火藥庫衞兵ハ步兵隊ニテ服務シ春光臺火藥庫構內ノ監視警戒ニ任ス

五 旭川衞戍勤務細則中衞兵勤務者ニ必要ナル事項左ノ如シ

1. 衞兵勤務ニ服スル者ノ夏季及冬季間ニ於ケル所要被服竝ニ着用區分左ノ如シ

イ、夏衣袴	自六月十日 至九月十日	防寒靴防寒覆面ハ夜間ノミ之ヲ用フ司令ニ於テ其必要ヲ認メサルトキハ之ヲ除キ又晝間吹雪或ハ氣溫零下五度以下ニ降下シ其ノ心要ヲ認メタルトキハ步哨ニ之ヲ使用セシムルヲトヲ得
ロ、防寒手套	自十一月一日 至四月三十日	
ハ、防寒外套(頭巾手套帶ヲ除ク)	自十二月一日 至三月十五日	
ニ、防寒外套附屬手套		
ホ、防寒靴		
ヘ、防寒覆面		

但シ防寒手套防寒外套附屬手套ノ着脫及防寒襟ノ起伏等ハ寒暖ヲ顧慮シ衞兵司令ニ於テ適宜之ヲ命スヘシ

2. 攝氏零下二十五度以下ニ降下セハ司令ニ於テ歩哨ヲ三十分毎ニ交代セシムルコトヲ得

3. 吹雪或ハ攝氏零下五度以下ニ降下セル場合ハ司令ニ方テ衞兵所ノ表戸ヲ閉塞スルコトヲ得

三 衞戍巡察

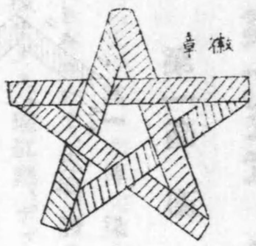
一、第一種巡察

第一種巡察ハ將校准士官ヲ以テ之ニ充テ主トシテ衞兵ノ勤惰ヲ監視シ兼テ軍人軍屬ノ非違ヲ戒ムルモノニシテ通常一週間服務スルモノトス

二、第二種巡察

第二種巡察ハ主トシテ軍人軍屬ノ非違ヲ戒ムルモノニシテ休日其他臨時ニ外出ヲ許シタル場合ニ於テ定メラレタル區域ヲ各隊ヨリ巡察セシムルモノニシテ週番(日直)士官又ハ副官之ニ服ス

四 軍屬傭人ノ陸軍所定ノ徽章左ノ如シ



技師(高等文官)ハ金色
技師(判任文官)ハ銀色
雇員　ハ緋色
師團司令部在勤ノ者ニシテ制服ナキモノハ右ノ區分ニ依リ左腕ニ附ス

馬丁ハ左ノ區分ニ依リ徽章ヲ左上膊ニ附ス

乘馬ヲ許サレタル者　地質　絨

乘馬ヲ許サレサル者　地質　絨

第十五章　衞生法及救急法

第一節　衞生

其一　傳染病

傳染病トハコレラ、赤痢、腸チブス、ペスト、流行性腦脊髓膜炎（以上ニ痘瘡、發疹チブス、猩紅熱、ヂフテリア、ヲ加ヘタルモノヲ法律上ニテ傳染病ト稱ス）其ノ他流行性感冒、マラリヤ、肺結核、花柳病、トラホーム等ヲ謂フ

一　コレラ

四腸ヲ痛マナクテ吐イタリ下シタリ後ニハ吐ク物モ大便モ米ヲ淘イタ汁ノ樣ニナリ身體カ急ニ衰ヘ眼カ窪ミ聲カレ手足カ冷ヘ腓腸筋カ痛ムノテアル

二　赤痢

三下腹カ劇シク痛ミ且ツ下痢ノ後ハ又忽チ腹カ絞ツテ下サウトスル而シテ下ス分量ハ逐次減少スルノナラス下シタルモノハ後テハ糊ノ樣ニナリソレニ血カ混ス

ルノテアル

三 腸チフス

二熱カアツテ久シク續キ精神カ鈍ツテ譫言ヲ言ヒ又甚シキハ狂人ノ樣ナ擧動チナスコトアリ身體カ次第ニ弱クナル

四 パラチブス

一パラチフスハ腸チブトヨク似タ病氣ナリ

五 ペスト

ペスト菌カ皮膚ノ小サイ創カラ入ルトキハ鼠蹊又ハ腋窩ナトニ腫物カ出來熱カ高ク精神カ鈍ク恰モ酒ニ醉ツタ人ノ樣ニナル

病カ肺ニ附イタ時ハ咳カ出テ痰ニ血カ混ル

六 發疹チブス

疹カ出來テ熱カ高イ

七 流行性腦脊髓膜炎

頭痛カ劇シク頂カ擘リ熱高ク精神カ鈍クナル

八 マラリヤ

此ノ病ハ患者ノ血チ吸ヒタル蚊ニ螫サレタル時傳染ス時ヲ隔テ、熱カ出其ノ出ル前ニハ寒サチ覺エ體カ震ヒ熱ノ後テ汗カ出ル而シテ病ムコト久シキニ亘ル時ハ色カ蒼クナル

九 肺結核

色カ蒼クナツテ咳カ出テ腹チ下シ熱カ出ル久シクナレハ痰ニ血カ混リ又ハ血ノミヲ吐ク後ニハ熱カ度々出テ寢汗カ出ル

隊內ニカ、ル容體ノ患者アル時ハ互ニ注意シ速カニ受診セシメル必要アリ

肺結核ノ病菌ハ主トシテ患者ノ痰唾ノ中ニアリ咳ニ咳嗽ト飛沫痰唾ノ乾キテ塵トナリタルモノトハ最モ危險ナリ又口ニ觸ルヽモノハ屢々傳染ノ媒チスル其ノ他病菌ハ患者ノ衣服寢具住居等ニ着キアルコトアリ

肺結核ノ豫防ハ正シク身體ヲ鍛錬スルコト咳嗽アル人ニ面セサルコト成ルヘク塵ヲ吸ハサルコト口ニテ息セサルコト食器類ヲ清潔ニシ之チ他人ト混用セサルコト等チ主トス

咳嗽ヲナストキ手巾ニテ口ヲ覆フコト痰唾ハ必ス痰壺ニ咯クコトハ何人モ守ルヘキ作法ナリ

十 花柳病

花柳病トハ淋病、下疳、梅毒ヲ謂フ

花柳病ハ病ヲ有スル者ニ接シタルトキ傳染スルモノナリ

1. 淋病ヤ下疳ノ病源菌ハ此ノ病ノ附イテ居ル所カラ出ル汁ニアッテ此ノ患者ト性交チスルト傳染ス

此ノ病菌カ手ヤ手拭其ノ他ニ附着シタルヲ知ラスシテ之ニテ眼ヲ擦リナトスルト忽チ淋毒性結膜炎(風眼)トナル

2. 梅毒ノ病源菌ハ全身ニ在リ故ニ此ノ患者ト性交スルトキハ傳染シ親ヨリ子ニ傳ヘラレ其ノ禍ハ一身ニ止マス實ニ恐ルヘキ病ナリ

十一 トラホーム

トラホームノ病原菌ハ患者ノ眼ヨリ出入スル汁テ指ヤ手拭、洗面器、被服、寝具等カラ傳染スル故他人ヨリ手拭等ヲ借ルヽハ甚タ危險ナリ

其二 其ノ他注意スヘキ病

一 胸膜炎

脚膜炎ハ胸痛ミ息苦シク咳嗽出テ熱アリ斯カル容體アルモノハ速カニ診斷ヲ受クヘシ

胸膜炎ハ屢々感冒結核ニ關係アリ故ニ之レカ豫防ハ感胃肺結核ニ示シタル所ヲ守ルヘシ

二 胃腸病

胃腸病ハ多ク食物ノ不注意ヨリ起ル

暴飲暴食ヲ愼ムヘシ

腐リタル疑アル飲食物未熟ノ果物ヲ食フヘカラス夏季ハ殊ニ消化シ難キ食物腐リ易キ食物水水等ヲ用ヒサルヲ可トス

又腹部ヲ冷ヤスハ屢々胃腸病ノ原因トナルコトアリ

胃腸ヲ害スル時ハコレラ赤痢等ノ傳染病ニ罹リ易シ

同一ノ食物ニテ多數ノ食中毒ヲ生スルコトアリ凡テ食物ニ疑ハシキトキハ互ニ相戒ムヘシ

三　感冒

感冒ハ皮膚鼻咽ノ寒氣ニ冒サレタルトキ起ル其ノ豫防法ハ漸次ニ皮膚ヲ鍛錬シテ丈夫トナスコトヲ第一トス

精神弛ミ元氣萎エタルトキハ感冒ニ罹リ易シ成ルヘク口ニテ息スルコト勿レ

皮膚ニ寒サヲ感シタル時ハ精神ヲ緊張シテ運動ヲ行フヘシ

汗出テタル後入浴ノ後等ハ皮膚弛ミテ感冒ニ罹リ易シ油斷スヘカラス

全身濡レタル時ハ能ク拭ヒ擦リタル後乾キタル被服ニ更ムヘシ已ムヲ得サル時ハ其ノ儘運動スヘシ

假寢ハ感冒ノ原因トナルコト多シ夜間ハ特ニ脫衾セサル樣注意スヘシ

特ニ中隊不寢番ハ之等ノ看ヲ發見シタル時ハ直チニ注意ヲ與フヘシ

四　皮膚病

疥癬、頑癬（タムシ）、濕疹、汗疱瘡（ミヅムシ）等ノ皮膚病ハ多クハ皮膚及肌着ノ不潔ニ依リテ起ル

皮膚病ニハ傳染スルモノ多イ又容易ニ癒エ難キモノアリ遂ニハ重キ餘病ヲ發スルコトアルカ故ニ勉メテ早ク治療ヲ受クヘシ

其三　豫防法

一　傳染病

イ、室被服、寢具、身體ヲ清潔ニシ殊ニ手ヲ屢々洗フコト又蠅ヤ蚊蚤鼠等ノ媒介物ヲ驅除スルコト

ロ、塵ノ中或ハ痰ヤ咳スル人ニ近ツカサルコト

ハ、讀書ノ際指ヲ舐メ又ハ鉛筆ヤ毛筆ノ軸等ヲ口ニ付ケルハ危險テアル又汚レタル指ニテ眼ヲ擦スルハ宜シカラス

ニ、成ルヘク生水ヲ飲マサルコト箸又ハ水湯呑類ハ自己專用タルヘキコト食器類ハ熱湯ニテ洗フコト

ホ、他人ノ手拭ハ借リチコト又自己ノ手拭ヲ他人ニ貸サヌコト

ヘ、飲食物ハ一度煮ルカ燒イタルモノテナケレハ喰ハヌコト殊ニ夏期ニ於テハ生物ハ絕對ニ食ヘテハナラヌ

ト、蠅ノ附イタ飲食物又ハ腐敗氣ノアル飲食物未熟ノ果物ハ斷シテ食セサルコト

チ、不潔又ハ地方人ノ群集スル場所ニハ成ルヘク立寄ラサルコト

リ、室内ノ空氣ヲ良クスルコト

ヌ、不品行ヲナササルコト

ル、時々物品又ハ寢具ハ日光ニ乾燥スルコト

ヲ、適當ナル運動ヲ爲シ體力ヲ鍛ヘ精神ヲ緊張シアルコト

ワ、氣分勝レヌ時ハ直チニ診斷ヲ受クルコト

二 靴傷（鞍傷）

イ、足、靴下ヲ清潔ニシ靴ノ手入ヲ能クシ革質ヲ軟カニナシ置クコト

ロ、行軍ニ穿キ馴レタ靴ヲ用ヒ出發前靴傷膏等ヲ足ニ塗ルコト

ハ、靴下ニハ皺ナカヲシメ縫目ヲ外ニシテ穿ツコト

ニ、休憩時、又ハ宿營ニ就イタ時ハ特ニ趾ヲ能ク洗フコト

ホ、足熱シタ時ハ靴下ヲ脫キ風ニ當テ又ハ水テ冷スコト

ヘ、鞍傷ヲ防クニハ臀部ヲ清潔ニシ袴下ノ鞍ニ接スル部ハ皺ノナキヤウニ注意スルコト

三 暑中寒中行軍ノ時ニ注意スヘキ件

イ、睡眠ヲ十分ニスルコト空腹ヲ避ケ量ツ酒類ヲ飲マヌコト

ロ、寒中ハ凍傷ニ罹ラマヤウ特ニ注意ヲ要ス之カ爲休憩時ニハ手ヲ動カシ耳鼻等ヲ摩リ或ハ足踏スルコト

ハ、寒中ハ被服特ニ靴下カ濕潤シタラ速ニ交換スルコト

ニ、寒中甚シク凍痛ヲ感スルモ直接ニ火熱ニ觸レヌコト其ノ他釦又ハ紐ノ解脫（トケ）ナイコトニ注意スルコト

ホ、乘馬車ハ行軍ノ間身體ノ運動足ラサルヲ以テ凍傷ニ罹リ易シ故ニ被服ヲ厚クシ大ナル靴ヲ選フ等ノ注意ヲ要ス又場合ニ依リテハ下馬シテ歩行スルヲ可トス

ヘ、雪中ニ露營スルトキハ雪ヲ除キ地面ヲ露ハスヘシ雪ハ踏ミ固ムルトモ人ノ體温ニテ融ケ衣服ヲ潤ス虞アリ掘リタル雪ハ周圍ニ積ミ堤ヲ設ケテ風ヲ遮リ入口ハ風ト、雪中ヲ行軍スル時日光ノ反射強キタメ眼ヲ害スルコトアリ力メテ雪ヲ視ツメサ

ルヲ可トス

チ、暑中ハ渇病ニ罹ラヌ様特ニ注意スルコト

リ、水ヲ多量ニ飲ムハ害アリ特ニ生水ハ上官ノ許ナク飲ム勿レ

ヌ、暑時渇病ノ起ルハ日射烈シク氣温高キ爲ノミナラス空氣潤ヒ風ナキカ爲ナルコ

ト多シ此ノ如キ場合ニ劇動ヲ要スル時ハ特ニ渇病ノ豫防ニ注意スヘシ

ル、渇病ハ初メ烈シク汗出テ後ニハ却テ汗止マリ口渇キ頭痛目眩顔赤クナリ元氣衰

ヘ歩行蹌キ呼ヘトモ答ヘス終ニハ卒倒スルニ至ル又全身ニ痙攣起リ或ハ狂人ノ如

ク躁クモノアリ重キトキハ暫時ニシテ死ス

チ、空腹ナルトキ病後衰弱セル者睡眠足ラサル者食慾進マサル者飲酒セル者行軍軍

慣レサル者等ハ渇病ニ罹リ易シ

ヲ、行軍ノ初メ水筒ノ湯茶ハ成ルヘク節約シテ用キルヲ可トス

生水ヲ飲ムヲ要スルトキハ軍醫又ハ上官ノ許ヲ受ケ其水ヲ選ビテ飲ムヘシ

カ、行軍中許サレタルトキハ速ニ「ホツク」釦ヲ脫シ又屢々帽ヲ脫キテ汗ヲ拭フヘ

シ　休憩中許サレタルトキハ速ニ背嚢ヲ卸シテ憩ヒ清キ水アルトキハ顏ヲ洗ヒ頭

胸ヲ拭フヘシ

休憩長キトキハ少シニテモ眠リテ疲勞ヲ恢復スルコトニ力ムヘシ

第二節　救急法

救急法トハ戰鬪間負傷シタル時或ハ行軍宿營中等ニ急病ニ罹ツタ時醫官ノ診斷ヲ受ケ

ル遑ナキ場合ニ取リ敢ヘス一時手當ヲスル方法ニシテ軍人ハ勿論一般人ト雖モ心得ヲ

クヘキモノトス

其一　創傷ノ處置

一　創ノ癒ユルヲ妨クルハ黴菌カ創口ヨリ侵入スルヲ以テナリ空氣中ノ塵ハ黴菌ヲ附

着シテ居ルヲ以テ創口ヲ開放セハ黴菌ハ遠慮ナク此處ヨリ侵入ス之カ爲左ノ注意ヲ

要ス

イ、消毒セサル手ヤ指等ニテ創ニ觸レサルコト

ロ、紙、手巾、手拭、其ノ他布片等ニモ黴菌ハ附着セルヲ以テ創ニ觸ルヘカラス

ハ、水ニテ創面ヲ洗フコトハ危險ナリ

ニハ彈丸衣片等創口ニ現ハルヽモ拔キ取ルヘカラス

ホハ創ニ血ノ凝リ着キタルトキ之ヲ剝キ取ルヘカラス

二、總テ創ヲ受ケシ時ハ其儘ニ「ガーゼ」ヲ用ヒテ創口ヲ繃帶シ後ニ醫官ノ處置ヲ仰クヘシ

三、如何ナル創ニテモ初ニ「ガーゼ」ヲ用ヒ適當ナル處置ヲナセハ癒ルコト速カナリ一之ニ反シ初メニ創面ニ手ヲ觸レ又ハ適當ナ處置ヲ怠ル時ハ治癒困難ナルノミナラス大事ニ至ルコトアリ

四、受傷セル時衞生部員又ハ擔架兵若ハ補助擔架兵ノ附近ニアラサル時ハ下士官兵創ヲ露シ繃帶包ニテ繃帶ヲ施ス事ヲ得此ノ場合創ヲ露スニハ創部ヲ動カス事ナク叮嚀ニ扱ヒ繃帶スヘシ

五、繃帶包ハ三角巾一枚昇汞「ガーゼ」四枚包紙二枚及包布一枚ヨリ成ル

繃帶包ハ疊ミタル昇汞「ガーゼ」二枚ヲ包紙ニテ包ミ其二包ヲ疊ミタル三角巾ニ挿ミ此ノ三角巾ヲ包布ニテ包ミ縫ヒアリ

繃帶包ハ衣ノ左裾裏ニ納レ置キ專ラ戰場ニ於テ負傷セシトキ使用スヘキモノトス

六、繃帶包ヲ用フルニハ包布ヲ解キ先ツ三角巾ヲ取リテ繃帶ノ準備ヲナシ然ル後包紙ヲ破リ「ガーゼ」ヲ撮ミ物ニ觸レサル如ク「ガーゼ」ヲ開キ指ノ觸レサル處ヲ創ニ當テ殘レル「ガーゼ」ヲ其ノ上ニ重ネ三角巾ニテ卷クヘシ

其二　骨折

一、骨折ニハ同時ニ其ノ部ノ皮ニ創アルコト多シ、創アルトキハ先ツ繃帶ヲ行ヒ後骨折ノ處置ヲナスヘシ

二、上肢又ハ下肢ノ骨折シタルトキハ形ヲ變シ短クナリ痛甚シクテ腫レ傷者自ラ之ヲ動スコト能ハス之ヲ動サントスルトキハ劇シキ痛ヲ覺ユルニテ知ルヘシ

三、骨折ノ處置ハ折レタル骨ヲ動カサルヲ要件トス

イ、肘ヨリ上又ハ下折レタルトキハ簾、厚紙ノ如キモノニテ卷キ又ハ軟ナルモノヲ當テタル上ニ內側ニ短キ棒ノ類、外側ニ長キ棒ノ類ヲ當テ、括リ胸ニ吊リテ支ヘ又健側ノ手ニテ支ヘ持タシムヘシ

ロ、膝ヨリ下折レタルトキハ軟キモノヲ當テタル上ニ下肢ノ內側ニ足ヨリ大腿ノ中央ニ達スル棒ノ類ヲ當テ外側ニ足ヨリ腰ニ達スル棒ノ類ヲ當テ括リ附クヘシ一

第一圖

第二圖

棒ノ類ナキトキハ長キ藁束又ハ卷キタル外套ノ一端ヲ大腿ノ中央ノ內側ニ當テ蹠ニテ折リ曲ケ他ノ端ヲ大腿ノ中央外側ニ達セシメ膝ノ上下ニテ括リ附ケ支フルモ可ナリ（第一圖）

ハ、膝及膝ヨリ高サ所ニテ骨折レタルトキハ外側ニ足ヨリ胴ニ達スル棒ノ類ヲ當テ健側ノ下肢ト共ニ括ルヘシ（第二圖）

棒ノ代リニハ尙木ノ皮高梁稈狹キ板「プリキ」天幕支柱等ヲ用ヒ已ムヲ得サレハ銃劍軍刀ヲ用ヒルコトヲ得

一　血ハ心臟カラ動脈ニ通シ次ニ小サキ枝ニ入リ全身ヲ循リ靜脈ニ合シテ心臟ニ歸ル動脈ハ淺キ所ニテハニ觸感スル此ノ所ヲ脈處トイフ

二　一般ノ止血法

イ、靜脈出血ニハ「ガーゼ」ヲ創面ニ當テ指ニテ強ク壓シ血ノ止マルヲ見テ更ニ「ガーゼ」ヲ其ノ上ニ覆ヒ堅ク繃帶ス

ロ、動脈出血ニハ其部ヲ高ク保チ先ツ「ガーゼ」ヲ丸メテ出血スル所ニ當テ、指テ強ク壓シ血カ止マラサル時ハ創所ノ上部ノ動脈ノ通スルヲ壓ス

三　局部ノ止血法

出血少ナキトキハ之ヲ擧ケ擧ケ吊リ又ハ下カラ支フ併シ出血稍々多キトキハ次ノ處置ヲ爲ス

イ、手又ハ前膊カラ出血スルトキニ臂力癒ノ內側ナル淺キ溝アル所ニ撮指ヲ當テ他ノ指ヲ後ロニ廻シテ握リ撮指テ強ク壓ス（第一圖）

又傷者自ラ行フニハ第二圖ノ如クスル

ロ、臂ノ上部或ハ腋ノ下カラ出血スルトキ
頸ノ下、鎖骨ノ上ノ窪ミニ拇指ノ尖ヲ當テ深ク内
下方ニ向ヒ壓ス（第三圖）
ハ、脚カラ出血スルトキハ鼠蹊ノ中央ノ下ニ拇指ヲ
當テ、壓ス（第四圖）
ニ、出血甚タ多ク指テ壓シテ補助擔架兵等尚來ラサ
ル時ハ創ヨリ上ノ脈ノ上ニ圓キ物ヲ當テ疊ンタ三
角巾ノ類テ緩ク卷キ末端ヲ結ヒ之ニ棒ノ類ヲ挾ミ

第一圖

第二圖

第三圖

廻シテ緊メ血止マルニ至ツテ挾ンタモノヽ一
端ヲ止メテ置ク（第五圖）
若シ緊メタ處カラ下カ感覺ヲ失ヒ冷カトナリ
紫色ヲ帶ヒタルトキハ脈ヲ指テ壓シ卷イタモ
ノヲ緩メ暫ク シ再ヒ緊ム
ホ、指ヨリ出血スルトキ指ノ根ノ兩側ニ拇指ト
示指トヲ當テ、強フ壓セハ可ナリ
（以上ハ救急法ノ第一章其ノ一其ノ二其ノ三ニ依ル）

其四　繃帶及其用法

一　三角巾ノ名稱及其ノ用法
イ、三角巾ノ名稱ハ第一圖ノ如シ
ロ、三角巾ハ或ハ開キタル儘用ヒ或ハ尖頂ヨリ順次ニ疊ミテ幅二寸許ノ帶狀ト爲シ
テ用フ之ヲ疊ミ三角巾ト名ツク
ハ、疊三角巾ノ用途

第五圖

眼、耳、額、頬、顋、頸、手、足等ノ小サキ創ヲ巻キ或ハ骨ノ折レタノニ棒類ヲ副ヘテ括ルニ用ヒ又ハ前膊ヲ胸ノ前ニ吊リテ支フルニ用フ其ノ使用法ニ付テハ實地ニ教フヘキモノトス

第一圖

（繃帶法第二章ニ依ル）

其五　急病

一、卒倒

背嚢ヲ卸シ被服ノ束縛ヲ除キ空氣ノ流通好キ處ニ臥サシムヘシ室内ニテハ窓ヲ開キ室外ニテハ陰アル地ヲ選ヒ臥サシムルニハ通常頭ヲ低クス顏赤キトキニ限リ頭ヲ高クシ之ヲ冷ス聲高ク喚ヒ醒シ胸ニ水ヲ灌キ胴上肢下肢ノ皮膚ヲ心臟ノ方ニ向ケテ摩リ胸掌蹠ヲ刷毛ニテ擦ル等ノコトヲ試ムヘシ　總テ創ノタメニ卒倒ノ狀ニ在ル醒メタルトキハ冷メタル湯茶又ハ水ヲ飲マシムヘシ

者ハ叮嚀ニ取扱ヒ濫ニ人工呼吸法等ヲ行フヘカラス

二、火傷

人ヲ火ノ中ヨリ救ヒ出サントスルトキハ我衣袴ヲ濕シ頭ト頸トニ濕シタル布ヲ纏フヘシ

被服ノ燃ユル人ハ之ヲ速ニ地ニ僵レシメ被服寢具等ヲ以テ覆フヘシ

手當法

イ、徐ニ傷ヲ露ハスコト

ロ、衣片等皮膚ニ膠着シタル處ハ强テ引キ離サス鋏テ周圍ヲ切リ取ルコト

ハ、皮カ赤クナリシトキハ水ヲ以テ冷ヤスコト

ニ、水泡ヲ生シタルトキハ薄皮ヲ破ラサルコト

ホ、皮爛レタルトキハ「ガーゼ」又ハ新タナ布片ニ清潔ナ油ヲ塗リ覆フコト

ヘ、指ハ一本毎ニ繃帶スルコト

三、渇病

手當法

イ、背襄ヲ卸シ被服ノ束縛ヲ解キ空氣ノ流通良ク且ツ日陰アル地ニ頭ヲ高クシテ臥
セシメ扇子、團扇ノ類ニテ風ヲ送ルコト
ロ、顏胸ニ水ヲ灌キ濡レタル布巾ニテ胸部ヲ覆ヒ氷アラハ手拭ニテ包ミ頭胸ニ當ルコ
ト
ハ、呼吸弱キトキハ人工呼吸法ヲ行フコト
ニ、醒メタルトキハ冷シタル湯茶又ハ水ヲ飲マシメ又酢ノ如キ臭アルモノヲ嗅カシ
メ再ヒ失心スルヲ防クコト
ホ、醒メテ怠テ眠ルハ生命危ケシ監視ヲ怠ルヘカラス
ヘ、渇病起ルニ先タチ顏赤クナリ頭痛スルニ心付カハ早ク渇病ニ對スル手當ヲナス
ヘシ

四、凍傷

手當法

イ、豫防用ノ軟膏ヲ鼻、耳、手ノ指足ノ趾ニ塗ルコト
ロ、紫色ヲ呈シタル處ハ雪、氷若クハ冷水ヲ用ヒテ輕ク摩スルコト
ハ、水包ヲ生シ又ハ暗黑色ヲ呈シタル時ハ火傷ト同シ手當ヲスルコト

五、凍死

手當法

イ、凍エタル人ノ體ハ折レ損シ易シ之ニ觸レ又ハ動カスニ當リ特ニ注意シテ叮嚀ニ取
扱フコト
ロ、風ヲ受ケ土地又ハ家屋ノ冷カナ室ニ移スコト
ハ、先ツ被服ヲ除キ雪又ハ水ニ浸シタル布ニテ輕ク摩リ體柔カナルニ至ラハ冷カナ
ル寢具ノ上ニ移シ乾イタ毛織物又ハ布片ノ類ニテ全身ヲ摩ルヘシ
ニ、要スルトキハ人工呼吸法ヲ行フ
ホ、醒メタルトキハ微温ナ湯茶ヲ飲マシメ次テ酒類ヲ飲マシムルコト
ヘ、寢具ヲ被ラシムルニハ次第ニ厚クシ室ノ徐ロニ緩ムルコト

六、窒息ノ手當法

イ、窒息シタル者ヲ救ヒ出サハ之ヲ空氣ノ流通ヨキ處ニ置キ顏ト胸トハ水ヲ灌キ又ハ水ニ浸シタル布片ヲ當テ要スレハ人工呼吸法ヲ行フ

ロ、瓦斯ノ溢レタル室ニ入ルニハ火ヲ携フヘカラス差入レシ燭火ノ滅スルハ有害瓦斯ノ殘留セル徴ナリ

七、咬傷擦傷

手當法

イ、創ノ周圍ヲ輕ク壓シテ血ヲ出シ創ニ「ガーゼ」ヲ當テ、繃帶ス又ハ口テ吸ヒ吐キ出スモ可ナリ

ロ、手足ニアリテハ創カラ上ノ部ヲ强ク括ルヲヨシトス

八、中毒

手當法

イ、毒物ヲ飲食シテ未タ吐カサル時ハ指ノ尖若シクハ羽毛ニテ咽喉ヲ靜カニ搔キ又ハ多量ノ微溫湯鹽湯等ヲ飲マセテ吐カシム

ロ、生卵、牛乳、食用油「バタ」若クハ湯茶ナトハ稀クスルモノアルヘシ

（猫入ラズ）等ノ毒ニハ牛乳、油又ハ「バタ」ヲ與ヘルコトハ嚴禁トス

ハ、中毒ヲ起セシ飲食物、藥及吐物ハ注意シテ保存スヘシ

其六　戰用毒瓦斯

救急處置

瓦斯傷者ノ救急處置ハ常ニ迅速ヲ要シ決シテ遲疑スルヘカラス　其ノ細部ニ就テハ各瓦斯ノ種類ニ依リ夫々差異アルモ一般ニ共通ナル点ヲ擧レハ次ノ如シ

一　瓦斯傷者ハ迅速且ツ靜ニ瓦斯圈外ニ搬出シ速ニ汚毒被服ヲ脫シ身體ヲ除毒シ要スレハ更衣スルコト必要ナリ　此際頭髮部ノ除毒ハ困難ナルヲ以テ特ニ注意シテ實施スヘシ　傷者ノ防毒面ハ身體ノ除毒後脫スヘシ　此際救護者ハ防毒具ヲ裝着シアルヲ要ス　就中「イペリツト」等ノ糜爛性ニ於テ然リトス　汚毒及之カ疑ヒアル携帶品ハ常ニ危險ナルコトヲ標示シ他ト混合セサル如ク處置スヘシ

二　瓦斯傷者ハ酸素ノ補給著シク不利ナルヲ以テ成ルヘク靜ニ仰臥セシメ無益ノ體動ヲ禁シ步行或ハ長途ノ運搬等ヲ避クルヲ要ス　又顏面ハ嘔吐ヲ顧慮シテ橫向トナスヘシ

三 瓦斯傷者ハ虚脱(キヨダツ)又ハ體溫降下ノ虞アルニ依リ氣候ニ應シ毛布湯「タンポ」懷爐等ヲ以テ直接適當ニ身體ヲ溫メルト同時ニ室溫換氣等ニ注意スヘシ尙要レハ溫キ飲料ヲ與フルヲ可トス

四 瓦斯傷者ニ對シテハ人工呼吸ヲ行フヘカラス之レ瓦斯傷者ハ可及的安靜ヲ旨トシ體內ノ酸素消費量ヲ幾分ニテモ減少セシメンカ爲ナリ（但シ一酸化炭素中毒者ノ場合ヲ除ク）

五 第一救急處置ヲ經タル瓦斯傷者ハ速ニ後方ノ瓦斯傷治療機關ニ後送スヘシ但シ十時ニ多量ニ與スヘカラス茶、「コーヒー」ハ一層可ナリ

六 湯アラハ飲料水ヲ適宜與フヘシ

七 各瓦斯ニ對スル救急處置ハ概ネ次ノ如シ

一、窒息性瓦斯（鹽素「ホスゲン」等）

1. 瓦斯傷者ハ速ニ瓦斯圈外ノ新鮮ナル空氣中ニ擔出シ絕對安靜ヲ命シ湯「タンポ」毛布慢爐等ヲ以テ身體全部ヲ保溫スヘシ

2. 次テ症狀ヲ顧慮シテ酸素ノ吸入ヲ行フヘシ

3. 危險界ヲ脫スレハ「酒精飲料」、熱「コーヒー」或ハ二〇%重曹水等ノ飲料ヲ與フヘシ

二、糜爛性瓦斯（「イペリツト」「ルイサイト」）

1. 速ニ瓦斯圈外ニ擔出シ皮膚ノ除毒ヲ行フヘシ　除毒ニハ除毒包ヲ用ヒ該包所載ノ順序ニ從ヒ處置スルモノトス　毒液多量ニ附着スルトキハ綿、又ハ「ガーゼ」等ニテ吸取リタル後除毒スヘシ、或ハ水洗スルコトモ可ナリ

2. 局所ノ除毒終了後加里石鹼ヲ用ヒ溫浴（出來得レハ溫雨浴）ヲ行ヒ全身ヲ洗拭スヘシ

3. 眼ニ對シテハ二%重曹水ニテ洗眼スルカ或ハ初メ五十倍過マンガン酸加里液ニテ洗ヒ後〇八五%食鹽水ニテ充分洗滌スルモ可ナリ

4. 口腔ニ對シテハ二%重曹水又ハ五千倍過マンガン酸加里液ニテ充分含嗽スヘシ

5. 「イペリツト」瓦斯ヲ吸入シタル場合ニハ一、〇%重曹食鹽水ノ吸入ヲ可トス

6. 「ルイサイト」ノ皮膚ニ附着セルトキハ先ツ五・〇%苛性曹達液ニテ良ク濟拭

シ後充分ニ水洗スヘシ　蒸氣ニ觸レタルトキハ水酸化泥膏ヲ貼用ス　其ノ他一般ニ「イペリット」ノ場合ニ同シ

7. 汚毒被服ハ加溫シタル　〇・五%ノ石灰乳ニテ一時間浸漬シタル後洗濯スヘシ或ハ煮沸毒スルモ可ナリ

三、催淡性瓦斯（臭化「ベンゲル」　鹽化「アセトフエノーン」）

1. 新鮮ナル空氣中ニ撤出スレハ暫時ニテ恢復ス

2. 重症ナルモノニハ　二・〇%重曹水ノ洗眼、次テ生理的食鹽水（〇・八五%）ニテ洗眼スヘシ

四、噴嚏（クシャミ）性瓦斯（ヂフエニール鹽化砒素、ヂフエニール青化砒素）

中毒者ハ速ニ瓦斯圏外ニ撤出シ汚毒シタル被服及裝具ヲ脫シ　二・〇%重曹水ヲ以テ含嗽スヘシ

五、中毒性瓦斯（青酸、一酸化炭素）

1. 中毒者ヲ速ニ瓦斯圏外ニ撤出スヘシ

2. 速ニ酸素吸入ヲ行ヒ全身ノ按摩（マンサク）ヲ行フヘシ

3. 人工呼吸法ハ實施シテ可ナリ

八　覆面病ニ就テ

防毒面ヲ長時間ニ亘リ裝着スルカ或ハ長ク裝着ノ儘劇動ヲ續クルトキハ瓦斯交換ノ不充分ト體表面面ヨリノ蒸散作用ノ障碍セラレ種々ナル症狀ヲ惹起スルモノナリ之ヲ覆面病ト云フ

一、症狀　本症ハ喝病ノ症狀ニ酷似ス　即チ頭痛、耳鳴、眩暈、歩行蹣跚（マンサク）等ヲ訴ヘ其ノ他脫力應答不確實及發熱等ノ症狀ヲ呈スルモ之等ハ何レモ輕症型ニ屬ス然レトモ尙進ンテハ失神、痙攣、呼吸因難ニ陷リ、顏面蒼白トナリ卒倒スルニ至ルヘシ　之等ハ重症型ニシテ同時ニ脈搏　八・一五〇ヲ算シ呼吸急迫スルモノナリ

二、救急處置

救急處置ハ速ニ覆面除去シ、新鮮ナル空氣中ニ於テ被服ヲ解キ充分呼吸セシメ二・〇%重曹水ヲ與フル外一般ニ喝病患者ニ準シテ處置スヘシ

其七　人工呼吸法

一、人工呼吸法準備

イ、空氣ノ流通好キ所ヲ選ヒ敷物ヲ地ニ敷ク

ロ、衣ヲ脫シ袴ヲ開キテ仰ケニ臥セシメ、被服ノ類ヲ卷テ肩ノ下ニ挿ミ頭ヲ低クス

ルコト

ハ、患者ノ舌落チ込ミ喉頭ヲ塞キ居ルトキハ救助ハ先ツ舌ヲ引キ出シ布片ニテ頤ニ括又ハ絲ニテ舌ヲ縛リ絲ヲ頂ニ廻ハシテ結ヒ或ハ舌ヲ箸ノ如キ二本ノ棒ヲ以テ挾ミ兩側ヲ縛リ棒ノ端ヲ頰ニ支ヘル等舌ヲ口ヒリ出シテ置クコト

ニ、其實施法

實施ニ就テハ實地ニ教フヘキモノトス（救急法ノ第五章ニ依ル）

第十六章　赤十字條約

一　趣意

凡ソ戰爭ハ國ト國トノ爭ヒニシテ個人間ノ爭ヒニアラス而シテ戰爭ニ從事セシ傷者又ハ病者ハ各其ノ國ニ忠義ヲ盡シタル名譽ノ人ニシテ且戰鬪能力ヲ失ヒシ者ナリ故ニ人道上カラ之等ノ傷病者ハ敵味方ノ差別ナク互ニ救護スルヲ適當トス是レ本條約ノ趣旨ナリ

二　締結ト我國ノ加盟

條約ハ前項ノ趣意ニ基キ西曆千八百六十四年我國ノ（元治元年）瑞西國外十一箇國ノ委員瑞西國「ジエネヴヲ」府ニ集リ締結セシモノナリ

我カ明治天皇ハ此ノ條約ノ趣意ヲ嘉シセサセ給ヒ、我カ軍人及軍屬ニモ此ノ幸福ヲ享ケシメントノ宏大無邊ノ厚キ御思召ヲ以テ　明治十九年六月之ニ御加盟アラセラ